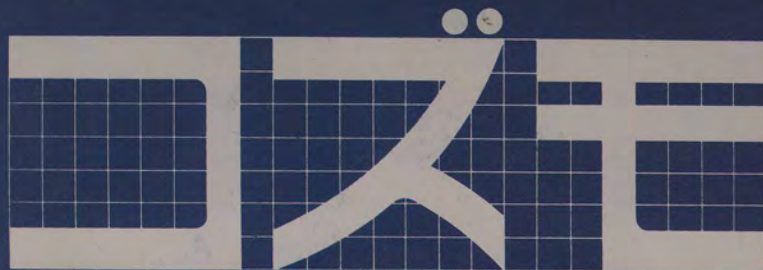


UFOと宇宙

特大号 1974

隔月刊 12月号 No.

9



不思議な光体と奇妙な信号！

UFOによる米空軍機追尾事件

スペインに出現した円盤と乗員

UFOは人類を宇宙へ導いている！？

狛江市で撮影されたUFO

●地震の鍵をにぎるマントル対流！

連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤(4)

また千葉県に円盤が出現！

＜連続写真と解説を2頁に掲載＞



世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤の謎と怪奇

黒沼 健著

定価九八〇円

恐怖の一九九九年 円盤襲撃に対するノストラダムスの予言、船舶の消失、人間蒸発等目に見えぬ円盤の攻撃と現代科学の範囲ではとらえられぬ怪奇な現象。各地に潜入し対地球戦略を工作する宇宙人の驚くべき実体及び歴史にあらわれた円盤と宇宙人の存在を興味深く紹介する。

空飛ぶ円盤とアダムスキ 空飛ぶ円盤の跳梁
久保田八郎編 五五〇円 高梨純一著 八五〇円

空飛ぶ円盤のすべて 空飛ぶ円盤実在の証拠
平野威馬雄編著 八〇〇円 高梨純一著 九〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 空飛ぶ円盤の真相
平野威馬雄・荒井欣一著 八〇〇円 G・ナタムスキ久保田八郎 八〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する これが空飛ぶ円盤だ
A・ミシエル・田辺貞之助訳 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤実見記 それでも円盤は飛ぶ
G・ナタムスキD・レスリー 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記 火星からの空飛ぶ円盤
G・ナタムスキ久保田八郎 八〇〇円 C・アリンガム・岩下肇 七〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密 空飛ぶ円盤と宇宙人
T・ラサム・久保田八郎 七〇〇円 黒沼 健著 九五〇円

ヒューマノイド 空飛ぶ円盤搭乗者
平野威馬雄編 定価 九八〇円

霊と死の世界 謎と怪奇 黒沼 健著
シリーズ1 九八〇円

呪いと神秘の世界 謎と怪奇 黒沼 健著
シリーズ2 近刊

●東京 文京 本郷5-30 振込141750●

高 文 社

●京都 左京 百万遍 振込23523●

上 わが銀河系



銀河系に属する天体《バラ星雲・馬の首星雲・三裂星雲・亜鈴星雲・ラグーン星雲・オメガ星雲・カニ星雲など・太陽・惑星・彗星》

定価750円 千145円 B4判

好評発売中

下 100億光年のかなた



アンドロメダ座の大星雲・さんかく座の渦状星雲・おとめ座の紡錘状星雲・おおくま座の渦状星雲・M82星雲など銀河系外の他の宇宙

定価700円 千145円 B4判

好評発売中

パロマ天体写真集

へール天文台の5m大望遠鏡がとらえた宇宙の姿を、一頁に一枚、週刊誌を開いた大きさに再現した迫力あるデカ判写真真集がこれだ!

●東京天文台長 大沢清輝解説/天文と気象別冊

天文図書目録呈呈

<口絵写真>

●カラー また千葉県に円盤が出現！／横浜市上空のUFO？

東京狛江市の弾丸型UFO／岡崎市の3機編隊UFO

UFOー清水で撮影／小野川湖上空の細長く黒い物体／十和田湖上に円盤が出現(?)

イラスト 市川淑一
池田雅行
中沢修一

不思議な光体の出現と3000メガサイクルの受信！

UFOによる米空軍機追尾事件 翼 淳 8

水晶のようなドームをつけた“奇妙な物体”と男 J.マシマス／アンヘル・バリゴン

スペインに出現した円盤と乗員 20

ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている！ 26

世界中に出現するアダムスキー型円盤の意味するもの

ゴードン・クレイトン

UFOは人類を宇宙へ導いている!? 中山真理 34

仏典の中にもあった天空人の地球来訪 志田行賢 41

大気圏内のUFOの速度 アイリーン・グランチ 46

狛江市で撮影されたUFO 48

UFO情報 54

東京で「宇宙人特別講演会」開催 57

●<天空と大地>科学シリーズ——？

地震の鍵をにぎるマントル対流！ 58

日本列島はどうなるのか？ 地球物理学の權威が警告する

東京大学教授 理学博士 竹内 均

久保田社長、熱海でUFO講演／<口絵写真説明> 東京中野区上空のUFO 68

科学1ボックス

69

連載科学記事——

宇宙・引力・空飛ぶ円盤(4) 75

慣性と遠心力／空中浮揚現象の謎

レナード・クランプ

富山湾上空に謎の白線が出現！ 85

国内UFO目撃報告 86

読者の声
OPINIONS

93

Supplement—追記 98

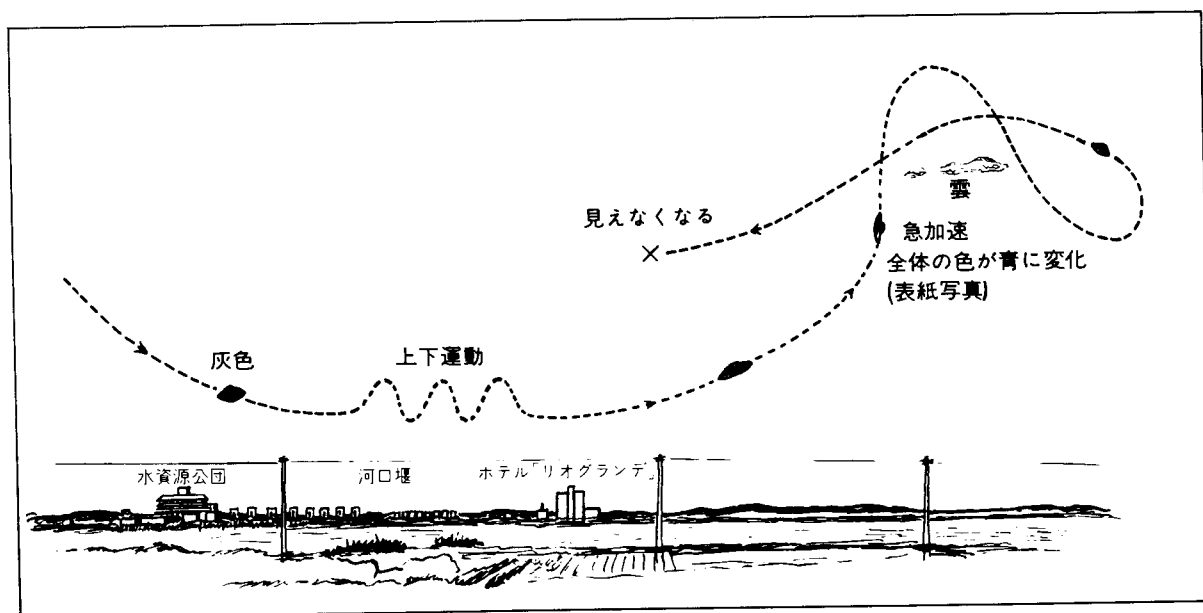
編集部より

99

また千葉県に円盤が出現!

●今年3月23日午後3時頃、千葉県香取郡東庄町の鈴木禎通君(11歳・当時小4)がお父さん(通弘氏・39歳・会社員)からもらったカメラをさげて弟の正通君(8歳・当時小1)を撮影するため裏庭へ出たところ、突如北方の鹿島地帯方面から円盤型物体が出現したのを目撃した。こわくなった2人は隣家の廃車になったマイクロバス(子供の遊び場になっている)の中へはいり、夢中で連続2枚の写真を撮影した。目撃時間は約45秒ぐらいで、その間物体は南へ進行し、大きくターンして元の方へ飛び去った。飛行コースは下図のとおりである。表紙写真は連続2枚目のもの。高度約100m。(ミノルタA・ロッドコール45mmF3.5・絞りF8・ $\frac{1}{100}$ 秒・フジカラー-N100)

—表紙写真と連続—



神奈川県横浜市の江田正次氏（25歳）が撮影したこの写真の物体（中央の黒丸）は何？ 以下は正氏の手記

今年7月21日午後7時すぎ、横浜市の磯区の川上地区を訪問した際、急に天上が暗くなって見上げました。強い太陽と雲が写りません。どうしても気になるので、持ちのカメラを屋上にかまえました。自動露出ではいくら絞っても太陽がはいると見えないので、手動で絞り絞って急いで1枚撮りました。現像後、写真の中心部に黒い物体が写っていましたので、引当しの際、現像時にキスかどうか語ってもらいましたが、キスではないようです。

機材：サビペンタックスESII・SMCタクマー
レンズ：タクマーF3.5・絞りF16・フィルム：コダカラーII

横浜市上空のUFO?

—頭上が気になってきた撮影者—

東京狛江市上空 弾丸型UFO

●今年5月14日午前10時半頃、狛江市の学生・高橋（仮名）がアパートの自室から上空を飛ぶ白銀色の弾丸型物体を約2分間撮影に成功したが、減速シャッターのため惜しくも少しブレ。物体はかなたのスピードで北から南へ飛行したが、最後は左下の白いスジ状のものが目撃された。撮影機は35mmF2にケンコーテレプラス2.5倍。



高校生が目撃！

●愛知県岡崎市の岡野俊和君（17歳・高校生）が今年8月8日午後7時30分頃、自宅裏から3機で静止している不思議な物体を発見。中央より左上の白い3個の物体、その下の白い軌跡のものは右下方向の水路にはるコースト1.5kmはく岸野写真機8の目的地カメラと照像も用意していた岡君は撮影に成功。だが2枚目を撮そうとして5、6秒目を過ぎ、カメラは暴走、なさい。ヤシカエレクトロ35・ヤシノンDX45mmF1.7・絞りF2・シャッターは自動・照像使用・アシカラー。

岡崎市の3機編隊UFO



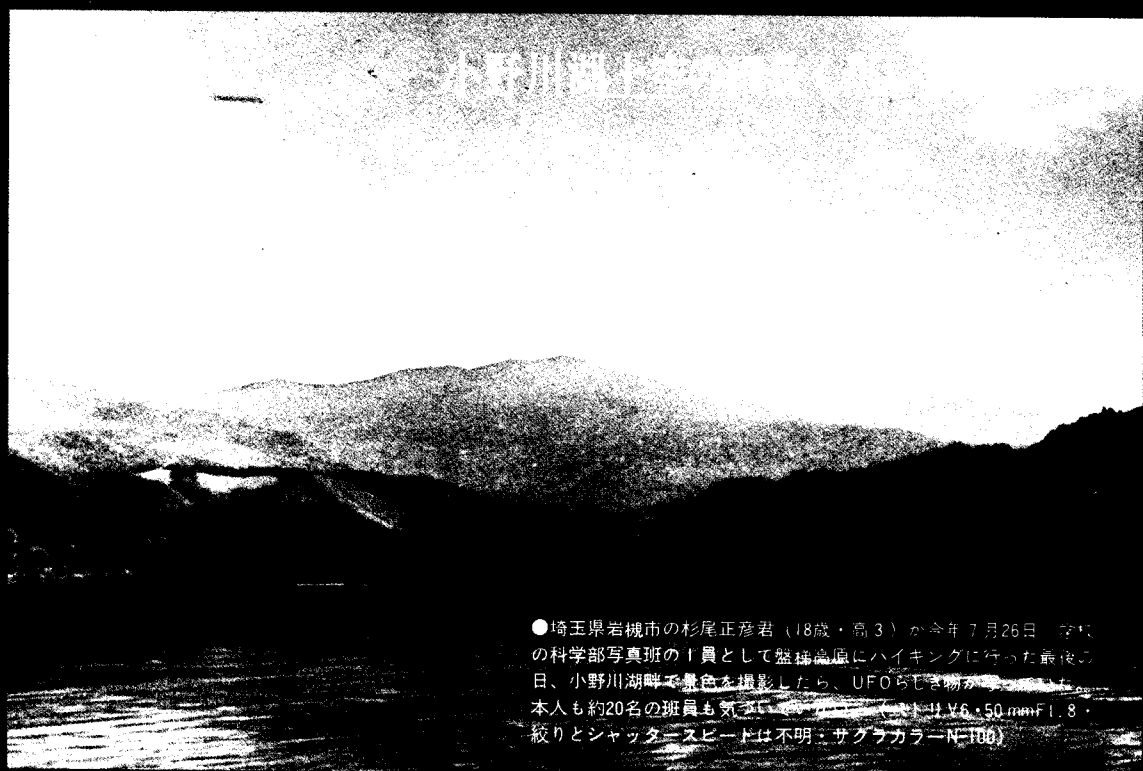
●会社社長と息子2人が2夜連続目撃

UFO—清水市で撮影

●静岡阿東清水市の園部好孝氏（45歳・会社経営）は今年8月17日の夜8時頃、子息孝行君（中1）と好弘君（小3）をつれて裏山で不気味な青色のUFOを目撃した。

「8時頃、裏山の有度山へカブト虫を捕りに子供たちと行った。そのとき子供たちは「あっ、円盤だ!」と言ったが、私は「流星だろう」と言った。子供たちは、水平飛行から上昇する流星はないと言っていたが、私は目撃していないので特とも言えなかった。

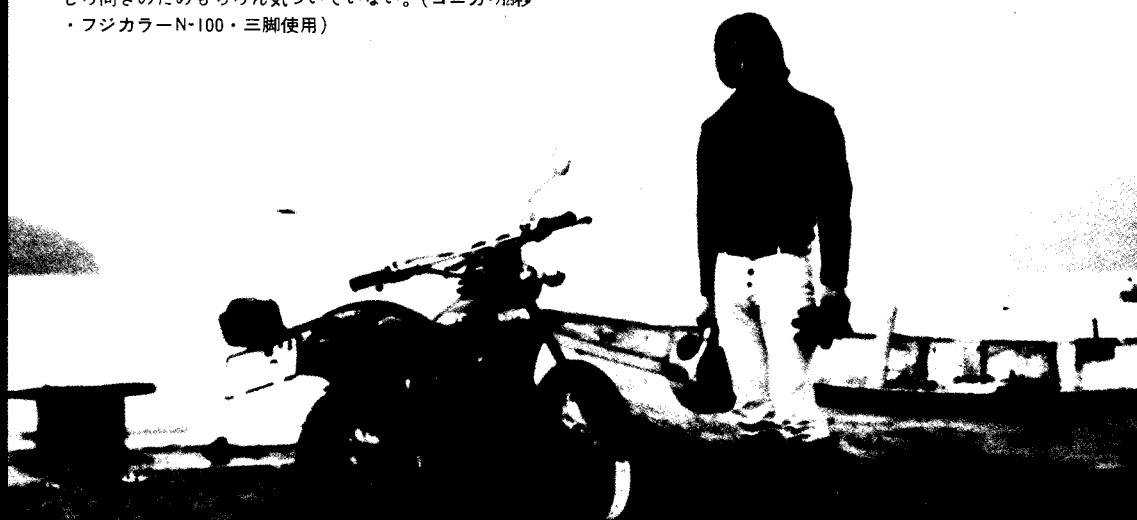
翌18日の8時前、昨夜のことが気になり、遊び半分であったがカメラを持って昨夜の場所へ行ってみた。そして南々東の方向を見ていると、雲の切れ間から光る物体が見えた。大きな物体は静止しており（左上の青い光体）、小さな物体2個は動いていた。夢中でシャッターを切ったが、絞りもピントもチェックするひまはなかった。ただ連続で1秒のシャッタースピードだけが気になっていた。そしてその物体はすぐ雲に覆われてしまった。その後しばらくその場所にはいたが雲は切れず、子供たちが円盤にさらわれた人っているなどと言いだしたので、逃げるような気で現場から立ち去った」と園部氏は報告している。目撃時間は約50秒。仰角30～40度。高度 400～500 m。（キャノン7・コーナン135 mm・絞り不明・1秒・フジカラーK-100）



●埼玉県岩槻市の杉尾正彦君（18歳・高3）が今年7月26日、学校の科学部写真班の1員として盤梯高原にハイキングに行った最後の日、小野川湖畔で景色を撮影したら、UFOらしき物が写っていた。本人も約20名の班員も気づいていない。撮影機材はミノルタ V6・50mm F1.8・絞りとシャッタースピードは不明・サクラカラーN-100

■湖畔で偶然にUFO(?)が写った2例■

●今年8月15日の午後2時頃、宇都宮市に住む佐々木紅洋さん（18歳・会社員）が十和田湖畔で記念撮影したところ、写真現像後に奇妙な物体が写っていた。本人はうしろ向きのためもちろん気づいていない。（コニカ・1/100秒・フジカラーN-100・三脚使用）



十和田湖上に円盤が出現(?)（左の水平線上）

9月30日放送
東京中野区上空のUFO

●NHKサービスセンターの中道孝典理事が目撃・撮影

(詳細は63頁に掲載)

UFOによる米空軍機追尾事件

不思議な光体の出現と毎秒三〇〇〇メガサイクルの受信！

つばさじゅん
翼醇



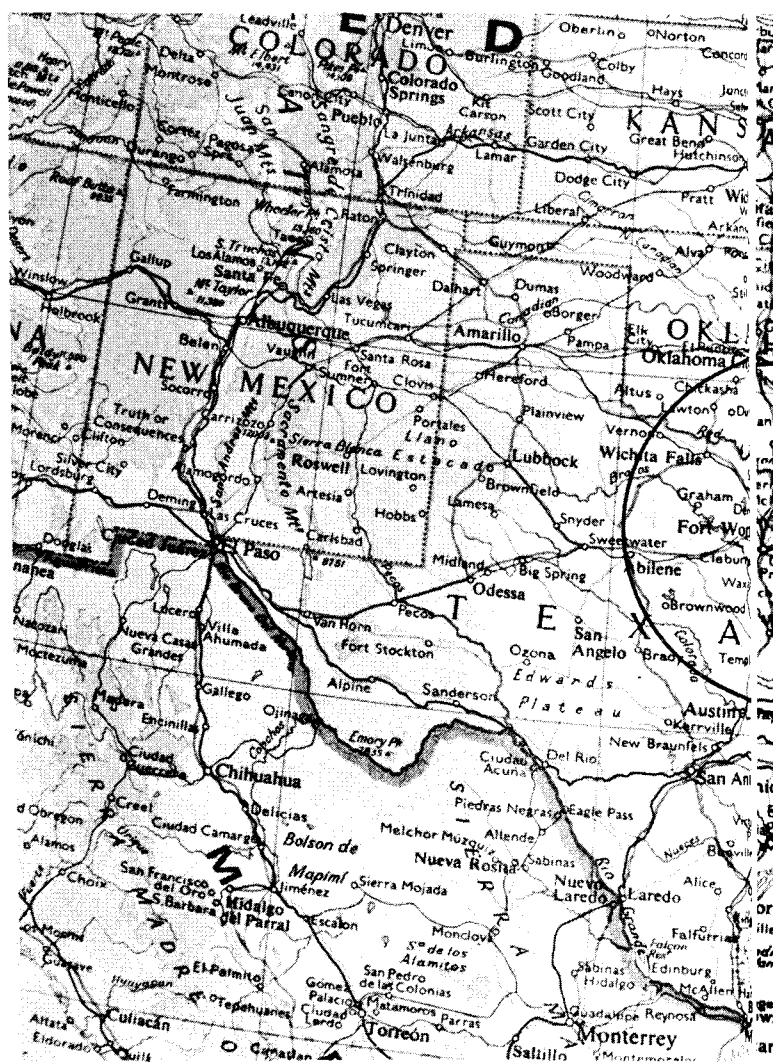
気まぐれに受けた試験に以外にも合格する破目となり、二年間の外国留学を言い渡されたとき、この先半年以上にもわたる留学手続の複雑さと独身滞米の心ぼそさに、朝ベッドから起きあがる体の重さが三倍にも感じられる毎日を三年前の私は送っていた。

米国カリフォルニア州のスタンフォード大学の航空学科大学院への留学がきまり、渡航直前になってしまった結婚式も終え、一路サンフランシスコへ向うボーイング七四七が飛ぶ三万フートの成層圏を、ひよっとしたらあのUFOも静かに飛んでいたかもしれないなどということは、実にその当時まったく脳裏をかすめもしなかった。

自家用パイロットのライセンスに挑戦して飛んでいた七三年夏のカリフォルニアの空でも、またカナディアン・ロッキーのジャスパー国立公園の展望台でも、UFOに遭遇する可能性を

こんなUFOオンチであった私に一撃のショックを与えてくれたのが、アメリカのテレビの三大ネットワークの一つNBCを通じて七四年一月三十一日に放送された特別番組「古代宇宙人を求めて (In Search of Ancient Astronauts)」である。初回の放送による大反響にこたえての再放送とкаだった、アンデスのインカやマヤの不可解な遺跡やアメリカ・インディアンの大な地表画、何回か船や航空機を飲み込んだバイミューダ・トライアングル等を古代の宇宙人と関連つけてドキュメンタリー風に解説した

想像することなどまったくなかったわけである。



もので、一時間の間その迫力というか、神秘的というか、とにかく息をつめて見ていた。このドキュメンタリーの製作過程などはその後バンタム・ブックスの文庫本にまとめられている。題名は「In Search of Ancient Mysteries」というので興味のある方にはぜひ一読をおすすめしたい。コズモにすでに翻訳掲載されたデニケンの「Chariots of Gods (神々の戦車)」よりやや客観的な調子で書いてある。

ハイネック博士の講演を聞く

論文作製に追われて多忙の日々を送るうちにふと目についたのが大学新聞の小さな記事「U

F Oの権威が講演」で、あの有名なノースウェスタン大学のハイネック教授が、スタンフォード大学プラズマ研究所主催の講演シリーズの一环として登場するというものであった。この講演シリーズは「われわれを取りまく世界」というテーマのもとに、スカイ・ラブ一号に科学者として乗ったスタンフォード大学のガリオット教授などもその後登場した。

冬とは言ってもそれ程寒さを感じない七四年二月八日、あまり気のすまないような顔をみせながら他にすることもなさそうな家内を愛車フォード・マベリックに押し込んで、会場となっていた五〇〇人以上も収容する学部学生用の広い講義室に着いたとき、私たちはカセットレコーダーをかかえた中年のご婦人の次の二番乗りだったが講演が始まる直前には満席になるほどだった。スタンフォード大学では、ほとんどの教授が広大なキャンパス内に住居があるせいか、中学生ぐらいになる子供たちを連れた教授たちの顔も沢山見え、冬の夜長をテレビですぐすかりにといった感じの和やかな雰囲気の中、主催側の紹介の後に拍手に迎えられて、アメリカのインテリにはよく見られるヒゲをたくわえたハイネック教授が登場した。ハイネック教授のことはコズモ五号の三二ページに南山宏氏によっても少し触れられているが、アメリカ空軍の「ブルー・ブック・プロジェクト」と呼ばれたUFO目撃調査にたずさわったが、空軍とはどうもしつくりいっていなかったようであ

る。その後の米政府の委託によってコロラド大学のコンドン教授らによって行なわれて、ほとんどのUFO報告を否定したいわゆる「コンドン・レポート」の解析過程等に反論をとなえているグループの代表的な人である。

講演は、これもコズモ五号で南山宏氏により触れられているが、教授が七二年に著して好評を博した「The UFO Experience: A Scientific Inquiry」の内容に大体沿ったものであった。

つまりUFO目撃報告の内容の自然現象との混同やその分析のむずかしさに触れた後、いろいろな人々による各種雑多なUFOの目撃報告（彼はこれを「Experience」と呼んでいる）のうち複数の目撃者による報告のみを取り出して、これを夜間の光体（nocturnal lights）、昼間遠距離から目撃された円盤（daylight discs）、レーダーに捉えられ、かつ、同時に肉眼でも目撃されたもの（radar visual）、近距離からの目撃ないしはコンタクトした事例（close encounter）に分け、スライドをまじえて米空軍顧問時代の調査の経過にも触れながら、UFO独自の電磁現象や地面に残った着陸の跡などを、アメリカ中西部の有名大学の教授にふさわしい科学的な論理で説明していった。この講演当時の私はまだ一般的なUFOの現象や知識にまったく乏しい状態だったので、ハイネック教授の話の一つ一つが新鮮な驚きであると同時に、驚くべき事実に対する米空軍上層部等の権力側の冷たい反応が偏見に基づいていかに一方的

●スタンフォード大学

なものであるかが、教授の言葉を借りるまでもなく理解することができた。

講演終了後の質疑応答中にはジェット機で飛行中に教授みずから撮影したというスライドも見せてくれたが、それは光りを放つ円盤上にドームがついたUFOとしてはポピュラーなものだった。しかし、教授自身は自然現象や航空機の誤認などでは説明不可能な光体とだけ言うだけの実に控えめな説明だった。最後に教授は五〇〇名近い聴衆に「UFOを見たことがあると思う人は手を上げてください」と尋ねたところ、五〇人ほどの手が上がったのに、UFOが



それほど身近なものであったかという意味で私は驚いてしまった。その後教授は更に「そのうち公的な機関に報告した人はどのくらいいますか？」と尋ねたところ手を上げた人は一〇人以上に減ってしまい、米国におけるUFOへの関心の実情の一面をうかがい知ることができた。教授によれば、報告して名前が出ると周囲の人から軽べつされるというのが報告をしないという大きな理由になっているのだそうである。

講演と質問が終わった後、教授は報告していない人たちからその内容を聞くため、しばらく会場に残っていたが、黒山の人だかりで、目撃



●ハイネック博士

者たちの真剣なまなざしは、彼らが信頼できるUFOの研究者をいかに必要としているかを示しており、今でも忘れられない。

論文の仕上げでそろそろ忙しくなってきた七四年四月二七日には、車で一〇分ほどの所の高校の講堂を借りて行なわれたスタントン・フリードマン氏の講演を一人で聞きに出かけた。驚いたことに今回は入場料が二ドル七五セントで、留学中の乏しい財政上一瞬ためらったが、日本ではこのような講演を聞く機会はほとんど

ないだろうと、気をとり直してはいつてみた。フリードマン氏はシカゴ大学卒業後、米航空宇宙局やゼネラル・モーターズ等で原子力ロケットなどの研究に一三年ほどたずさわっていた原子物理学者で、現在はUFO関係の講演が本業となってしまうた、これも立派なヒゲの人だった。氏の話はいかにUFOの目撃報告は信ずるに値するものであるかというような調子で、UFOを信じない人をどのようにしたら信じさせることができるかということにも触れ、スライ

ドをまじえながら二時間以上も話しつづけた。質問時間中にはメキシコ上空でUFOと出会ったという戦闘機の元パイロットや、米空軍の調査にたずさわっていたというような人も聴衆の中にいて、米空軍は重大な資料を隠して公表していないなどというようなやりとりも行なわれていた。

私も四月の末頃までにはUFO関係の本も大分読み、講演中に出てくる目撃の実例は大体どこかの本で読んだ記憶があるものだった。目撃報告者の日常生活における信頼性についてはフリードマン氏も大分その重要さを強調していた。

論文も提出、最後の試験と卒業式もすんで帰国までの間、四回程サンフランシスコ湾やサンタクルズ山脈の上を飛んだが、ここでも結局UFOらしきものにはおめにかかれず、見るのはサンフランシスコやオークランドへ降りる大型機と近くの飛行場からのセスナやバイバーばかりで、ややがっかりのうちに二年振りでインフレ吹き荒れる日本へ帰ってきた。

さて前おきが十分長くなってしまったが、残った紙面で、航空宇宙関係では最も権威のあるAIAA（アメリカ宇宙航空学会）に特別に設置されたUFO小委員会により詳細な検討が行なわれたUFO目撃報告の抄訳をお届けしよう。AIAAは日本という航空宇宙学会にあたるもので、その中にUFO専門の小委員会が設けられたわけだから、アメリカの航空宇宙関

係者のUFO問題に対する関心の深さをうかがわせるものである。

この小委員会は、AIAAの各メンバーがUFOに関してそれぞれ独自の意見を持つことができるよう、検討資料を提供するという目的で設けられたもので、NASA(米航空宇宙局)、航空機メーカー、ジョージア工科大学、海洋大気局環境研究所、米陸軍等からの専門家で構成されているが、空軍からはだれも参加していない。

UFOによる米空軍機追尾事件

●概要

電子報復装置(以下ECMと略す)を搭載した乗組員六人の空軍RB-47型偵察機が、一時間半もの間七〇〇海里以上もUFOに追尾された事件で、飛行経路はミシシッピ州からルイジアナ州、テキサス州を通じてオクラホマ州にまでわたっている。このUFOは機上のECMや地上のレーダーでも探知され、かつ、乗員により何回もその強い発光が目撃された。

特に興味深いのは、この物体はレーダー、ECM及び肉眼という三つの観測手段というか方法というか、とにかく肉眼観測中に消えたときにはレーダー上でもECM上でも同時に消え、再度現われたときには、この三つの観測手段上に同時に現われたということ、偵察機乗組員

い。次の事件は一九五七年七月一七日に発生したケースで例のコンドン・レポートでも触れられており、気象報告が違う日のものに基づいていたり航空機の飛行の日付が違ったりしているが一応原因不明として分類されている。これはコンドン教授らによる調査が事件発生後一〇年ほどたってから行なわれたためと思われる。以下はジェームズ・マクドナルド氏により同小委員会に送られたレポートの概要である。

の経験では決して得ないような急激な運動を行なったということである。

●初めに

一九五七年七月一七日の早朝、偵察機RB-47はテキサス沖及びメキシコ湾上空での射撃訓練、メキシコ湾洋上での航法訓練、及び米國中南部を横断するECM訓練のため、カンサス州トペカのフォーベス空軍基地を飛びたつた。

そのRB-47は六人乗組で、そのうち三人は、機体後部のECM装置を取り扱う電子装置モニターであった。彼ら六人の氏名は次のとおりである。操縦士ルウィス・チェイス、副操縦士ジェームズ・マックコイド、航法士トーマス・ハンレイ、第一モニター、ジョン・プロベンザノ、第二モニター、フランク・マクルア、第三

モニター、ウォルター・タックシェラ。以下マクドナルド氏による乗組員とのインタビューとコンドン委員会の記録ファイルに基づくレポートが続く。

コンドン委員会の本件に関する記録ファイルは、テキサス州ダンカンビル第七四五ACWRONからファイルされた三ページにわたるテレックスとフォーベス空軍基地第五偵察飛行大隊の大隊情報将校のバイウエツにより作製されて、ADCの情報部長ジープ空軍大佐の八月十五日付要請により、コロラド州エント空軍基地のADC本部に提出された四ページにわたる調査報告から成っている。この調査報告と一二ページにわたる機上観測員のデータシートは一月一七日にADCからブルーブック計画の本部へ回送されたが、ブルーブック計画が本件に関して受けた最初の報告は明らかにこの回送によるものであった。このデータシートはチェイス空軍少佐により九月一〇日に作製され、コンドン・グループの記録ファイルの他の部分では触れられていない重要な事項が多数含まれている。コンドンらの記録ファイルには正確な時間や位置及び、その他の状況については大変重要な情報があるが、なまなましい記録が生きているうちに書かれたものではないのである。

●ECMの性能

最初のECMによるコンタクトにはいる前にまずECMの機能などを簡単に説明する必要がある。

ある。このRB—四七電子偵察機には、敵の地上レーダー基地の位置とそのレーダー電波のバース特性を発見するために、三組の受信専用レーダー・モニターが装備されている。マクルアーが操作していた第二モニターはALA—六方向探知（以下DFと略す）受信器と呼ばれるもので、機体の胴体後下部に取り付けられた背合わせの二つのアンテナが、毎分一五〇ノ三〇〇回転でまわり地上を走査する。すなわち、最大毎秒一回の割合で地上のレーダーを走査できるわけである。その周波数帯域は一〇〇〇から七五〇〇メガヘルツである。このALA—六受信器からの信号は、APR—九レーダー受信器とALA—五パルス解析器で処理される。以下の第二モニターとはこのすべてのシステムを含むものである。

●第一モニター

プロベンザノが操作していた第一モニターはAPD—四方向探知システムで、機体の両主翼尖端の固定アンテナを使用しており、高い周波数が専門である。第三モニターの周波数帯域は三〇から一〇〇〇メガヘルツで、タックシェアーが操作していたが、この事件には関連していないので以下触れない。VHF通信もこの事件では影響を受けていなかった。方向探知受信器はレーダーではなく、遠く離れたターゲットからの反射を得るために、それ自身が電波を放射するようなことはないことを強調しておきた

い。これらの装置はただはいってくるレーダー電波をキャッチし、その特徴などを解析するだけなのである。遠くにあるレーダーからの電波を受けたとき、DF受信器のスコープには、機体を中心にした座標系の対応する位置に小さな光や点滅光が出る仕組みになっている。地上に固定されたレーダーに一方から近づいていく場合、点滅光がスコープの上半分に最初に表われ、次に、以下の検討で重要なポイントになるダウンスコープに移って行く。

メキシコ湾上空での航法訓練を終えた後、バイロットのチェイスは高度三四五〇〇フィート、マッハ〇・七五（二五八ノット指示対気速度、真対気速度で時速五〇〇マイル）でミシシッピ州の海岸線から陸上へ飛行してきた。対流圏に広がった高気圧の影響で、絶好の飛行日和で、雲はまったくなしといってもよいくらいであり、にわか雨や雲雨も当日の飛行ルートにはまったくなかった。ミシシッピ州ガルフポート近くの海岸（図ではA点）を横切ったすぐ後、マクルアーは第二モニターのスコープ上で、機体の五時方向（右翼の後方位置）に信号があるのを認めたが、彼にはその信号は、あたかも真正正路の地上レーダーからのものであるように思えた。点滅光がアップスコープの方へ動いていくのを見て、マクルアーはそのレーダーは何かの理由で一八〇度ずれてはいるが、機体の北西方向（左前方）にある地上レーダーではないかと思はれ、しばらくの間考えていた。しかし、

そのスコープ上の点滅光が、アップスコープ上をスワイプして機体の右舷側へ移動した後、更に機体の飛行経路を横切ってダウンスコープの左舷側へ移っていったとき、マクルアーは一八〇度のずれでこのような運動を説明づけるのは不可能なことに気がついたと述べている。

●不思議な信号をキャッチ

その信号が機体の左舷後方にあたるスコープ上から消える前に、マクルアーは幸運にもその信号の特性をALA—五パルス解析器で調べていたのである。その状況を私と話し合っている間の彼の記憶では、その信号の周波数は約毎秒二八〇〇メガサイクルであり、特に不思議なことは、普通のSバンドの地上据付探知レーダーに使われるパルス幅パルス繰返しの周波数であった。彼は更にその信号はごく普通の走査率まで持っていたことをおぼえている。当時広く使われていたCPS—六Bレーダーのような地上レーダーセットにその特性が非常によく似ていたので、多分マクルアーはその時点で他の乗組員に連絡しなかったのであろう。第一モニターは該当する周波数では働いていないことがあとからわかった。第三モニターを該当する周波数で作動させるのは不可能であると、マクルアー及び他の乗組員は私に述べている。

次に私は、フォーベス空軍基地の偵察飛行大隊情報将校が作製した調査報告から、事件全体のうちこの偵察機（コールサインはレーシー—

(七)に係わる該当部分に関する事項を引用する。

「RB—四七H型偵察機レーシー一七の第二ECM偵察員は、ミシシッピー州メリディアン付近で次のような特性を持つ信号を傍受した。周波数二九五ノ三〇〇〇メガサイクル、パルス幅二・〇マイクロセカンド、パルス反復周波数毎秒六〇〇サイクル、スリープ率毎分四回転、垂直極性あり、信号はDFスコープの上方へ急激に動き、信号源の急激な運動を示した。すなわち、信号源は飛行体である。観測の後、信号は無視された……」

● UFO、猛烈なスピードで前方を横切る

もしこの飛行で何か不思議な物体がRB—四七偵察機の付近にいたことを示すようなことが何も起こらなかったなら、マクルアーの観測は必ずや思い起こされることもなく彼自身もすぐに忘れてしまったことであろう。彼自身一時は不思議に思ったのであるが、何かエレクトロニクスの故障ではないかと思ったのであった。このときの飛行計画によれば、機上の各オペレーターが既知の地上レーダーユニットに対するECMの運用訓練を実施するため、ミシシッピー州のメリディアンとジャクソン付近(図の点B)で西への進路変更を要求している。当時の記録は、チェイスとマッコイドが私になまなましく詳細にわたって述べたその後に起こった事

を裏付けている。

彼らの偵察機はマッハ〇・七五、高度三四五〇〇フィートのまま真方向を二六五度に変更した。前席のチェイス少佐はグリニッジ標準時一〇時一〇分(現地時間午前四時一〇分)に、最初は、一一時の方向から自分とほぼ同じかやや高い高度から高速で接近してくる他のジェット機の着陸灯ではないかと思われたものを発見した。彼は隣席のマッコイドに声をかけ、普通の飛行機にはついていない航法灯がないのに注意を留め、更にその青白くて強い光が急速に接近してくるので、機内通話装置を通じて他の乗組員に、急激な回避動作に注意するよう警告したのであった。

しかしチェイスが回避を始めようとする前に、彼とマッコイドはその強烈な光がほとんど瞬間的にその飛行方向を変え、パイロットのチェイスが二〇年間にもわたる飛行経験及びこの後の事件後の飛行中にも出会ったことがないようなものすごい角速度で、左舷から右舷へ彼らの飛行経路をすばやく走り抜けた。そのまばゆい光体はものすごいスピードで彼らの一一時方向から二時方向へ移動し、その後消滅してしまっただけであった。

チェイスが書いた事後尋問書の一部をなす機上観測員データによれば、RB—四七偵察機のグリニッジ標準時一〇時一〇分における最初の目撃の位置は、北緯三二度、西経九一度二八分で、ルイジアナ州中西部のウィンズボロ付近

(図の点C)にあたる。

一九六九年のチェイスとのインタビューも以下の情報部レポートとよく一致している。

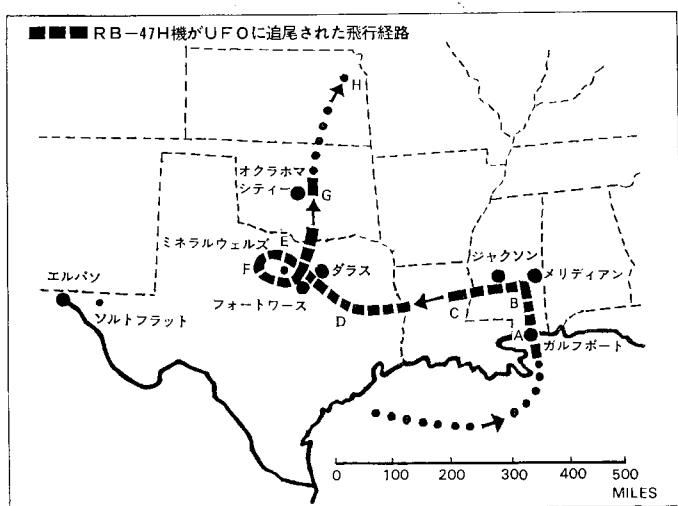
「グリニッジ標準時一〇時一〇分、機長が最初に淡青色のまざった非常に強い白色光を一一時方向に発見し、その光体は二時三〇分方向へ通過し、消滅したのを目撃した」

チェイスはこの飛行中には、磁気コンパスの異常な動きは何も観測していなかった。

● ルイジアナ——テキサス上空での行動

その強烈な光体が消滅した直後、チェイスとマッコイドはインターフォンを通じてすでに知らされていた他の乗組員たちとその光体について話し始めた。マクルアーは、彼はALLA—六がガルフポート付近上空で受信した不思議な信号を思い出しながら、初めてその奇妙な現象を皆に伝え、そしてそれと同時に彼の第二モニターを、何かが現われてくるかもしれないと思い、約三〇〇メガサイクルで走査するようにセットした。すると彼は、例の正体不明の光体があった今消滅した二時方向から強い信号を発しているのを発見したのである。

プロベンザノは私にこう述べている。すなわち、その直後に彼らは第二モニターが正常に作動しているかを調べるために、既知の地上レーダーステーションを使って、第二モニターの機能をチェックした。その結果、そのモニターは完全な状態で作動していることがわかったので



ある。それから彼は、自分の第一モニターを三〇〇〇メガサイクルに合わせたところ、やはり同じ方向から信号を受けたのであった。もちろん偶然とはいえ、この信号は実際の地上レーダーからで、それが相対的にずれたものである可能性はあるのであるが、時間がたってもRB-四七偵察機はおよそ毎時五〇〇マイルで西へ飛びつづけているにもかかわらず暗闇からのこの三〇〇〇メガサイクルの信号は、すべての地上レーダーのようにダウンスコープへ移動せず、RB-四七から見ても同じ位置を保っていたので

ある。

この事件の全体の経緯のなかで、この右に述べた部分とこれに続いて起こった部分にかかわる全乗組員の記憶は、まだいきいきしているのに私は気がついた。もちろん種々のこまかい部分では、それに関与した程度により彼らの記憶はいくらか異なっているが――。

チェイスは最大許容出力にいたるまで、飛行機のスピードを変化させてみたが、その三〇〇〇メガサイクルの信号の相対的な位置は何ら変わらず、この信号源をその位置に従えたままでルイジアナ州を横断し、テキサス州東部にさしかかった。そして、テキサス州がダンカンビルの第七四五ACWRONのレーダーの到達範囲にはいってきるとき、チェイスは地上ステーションへの報告をためらうことをやめ、とうとうそのステーション(コードネームは「ユタ」)を呼びだしたのである。乗組員はこの時点までにはすでに、一連の不思議な現象について不安を感じようになつてきていたと、当時の乗組員の何人かは私に述べている。この時点における事件の経過は、偵察飛行大隊情報将校のレポートからの引用で簡潔に述べることにする。

「機長は乗組員に伝達し、ECM第二オペレーターはこの信号を捜索し、グリニッジ標準時に一〇時三〇分に相対位置〇七〇度これを発見した。グリニッジ標準時一〇時三五分、同〇六八度。グリニッジ標準時一〇時三八分、〇四〇度」このレポートの時間の経過は、マクルアーが

直ちに彼のALA-六をチェックするのを考えたのではなく、チェックするのを考えつく前に約二〇分が経過していることを意味することを注意されたい。グリニッジ標準時一〇時三八分までには、この正体不明の三〇〇〇メガサイクルのレーダーのような信号を送る物体は、時速五〇〇マイルのRB-四七偵察機に対して、アップスコープ上を移動していたことにも注意しなければならない。飛行大隊情報将校のレポートは次のように続いている。

「グリニッジ標準時一〇時三九分、機長は機の高さ三四五〇〇フィートであり、天候は快晴であった。機長はその物体の形や大きさを測定することはできなかったが、光はその物体の頂部から発しているとの確証を得た。

一〇時四〇分頃、ECMオペレーターは相対方向〇四〇度と〇七〇度この二つの信号をとらえたことを報告した。機長と副操縦士は、同じ赤色をしたこの二つの物体を同時に口撃した。機長はフライトプランを無視し、物体を追跡する許可を得た。機長はADCサイトのユタと連絡をとり可能な援助を要請した。同一〇時四二分、ECM第二オペレーターは相対方位〇二〇度一つの物体を発見した」

その当時の乗組員とのインタビューで私は、右に述べているいくつかの点で乗組員らの記憶が相互に必ずしも同じでないことに気がついた。マッコイドの記憶によれば、その発光体は



時によって突然、機の右舷から左舷側に移動し、また元にもどったということである。チェイスの記憶によれば、彼はすでに述べたいくつかの事象の前にユタ基地（しかしながら彼の記憶ではカースウェルGCIであった）と連絡したということであり、ユタ基地は、その物体がアップスコープを動き再度視界に現われた間、上空ではなくて地上を搜索していたということであった。次の記述で明らかになるように、ユタ基地は、その正体不明の物体が北西へ向きを変え、ダラスとフォートワースの間を通過してしまうまでにはそれを探知していなかったことを、当時の記録はかなり明確に述べている。チェイスはFAA（連邦航空局）から追跡の許可を、コースをはずれた旋回中（図の点D）に得たと私に説明し、FAAは追跡の続行を可能とするため、すべてのジェット機を該当する飛行コースから移動させたとも言っていた。

飛行大隊情報部のレポートは次のように続いている。

「グリニッジ標準時一〇時四二分、ECM第二は相対方位〇二〇度の一つの物体を発見した。機長はスピードをマッハ〇・八三に上げ追跡を開始し、その物体は前方を飛行していた。同一〇時四二分半、ECM第二は相対方位〇四〇度と〇七〇度に、再度二個の信号をとらえた。同一〇時四四分、彼は相対方位〇五〇度到一个の信号をとらえた。同一〇時四八分、ECM第三はインターフォンと方位指令の会話を記録して

いた。ADCサイトは機に明確な識別のため、IFF（敵味方識別）モードIIIにすることを要請し、その後引き続き、物体の位置を要請した。乗組員は物体の位置を、テキサス州フォートワースの北西一〇ノードイカルマイルと報告し、ADCサイト、ユタは直ちにそのスコープ上で物体の存在を確認した。

同一〇時五〇分頃、物体は停止したもよう、機はこれを追いついてしまった。ユタ基地はこのとき、そのスコープから物体を見失ったと報告した。そして、ECM第二も同じく信号を失った」

私の質問に答えたパイロットのチェイスの記憶によれば、物体を開みつめるのを感じるようになるるとき、地上のユタ基地が、その物体が地上のレーダースコープ上では停止したと知らせてきたときは同じ時であったと述べている。また、そのとき、その物体がRB-47に対してどのような位置にあるのか確信が持てなかったため、その物体との衝突を避けるために進路を変えたが、その物体に接近するにつれその物体の上に来ていることに気がついたとも言っている。その物体が視界から消滅し、かつ、第二モニターとユタ基地のスコープ上から同時に消え去った瞬間に、その物体は彼の位置から見て下方に約四五度の位置にあった。

チェイスはテキサス州ミネラルウェルズ付近（図の点E）で機を左旋回させ、彼とマッコイドはそのまばゆい物体をふたたび発見しようと

肩ごしに見まわした。その物体がふたたび光を発して現われ、第二モニターのスコープ上に現われたのと、ユタ基地の地上レーダーにとらえたのはほとんど同時であったのを、当時関係した人はすべて記憶している。一九五七年に記された前出のレポートは、これらの事柄を次のように述べている。

「航空機は旋回を開始し、ECM第二は相対方位一五〇度に信号をとらえ、ユタ基地もスコープ上に信号をとらえるとともに、機長はふたたび物体を目撃した。グリニッジ標準時一〇時五二分、その信号は物体に接近し始め、およそ五ノードイカルマイルの位置まで接近したとき、その物体は高度一五〇〇フィートまで降下し、機長は見失った。ユタ基地も物体をスコープ上から見失ってしまった。

グリニッジ標準時一〇時五五分、テキサス州ミネラルウェルズ地域で、乗組員は残燃料の関係で、所属基地に帰投しなければならない旨、ユタ基地に通報した。乗組員はCIRVIS（筆者には何を意味するかわからない）レポートは提出されているかどうかユタ基地にただし、ユタ基地は、そのレポートはすでに提出されていると回答した。

グリニッジ標準時一〇時五七分、ECM第二は相対方位三〇〇度に信号をとらえたが、ユタ基地のスコープにはとらえられず。同一〇時五八分、機長はテキサス州フォートワースの北西二〇ノードイカルマイル、推定高度二〇〇〇

フィート、機体から二時の方向に物体を再度目撃した」

チェイスは事件のこの部分の詳細について更に、その物体が彼より低い高度にあったとき、それをめがけて急降下した旨をユタ基地に伝え、その許可を得たと述べている。当時の記録にあるように、その物体が突然急降下したことについてはおぼえていなかった。また、当時の乗組員のだれもが記録していないこまかい点で、この情報レポートに載っている。彼チェイスが私に語ったところでは、彼が三五〇〇フィートから二五〇〇フィートぐらいいまで急降下したとき、その物体は消滅し、ユタ基地の地上レーダーのスコープと、そして第二モニターからも同時に消え失せてしまったとのことである。私が当時の乗組員たちと一九六九年にインタビューしたときには、だれも時折出現した、肉眼で見えて、レーダー電波を出す第二の物体のことをおぼえていなかったことについて触れる必要があると思う。

● テキサス——オクラホマ上空での行動

彼らの飛行がこの時点にさしかかったとき、マッコイドは最大許容出力の使用と最初の飛行計画からのずれにより、燃料消費が多くなりすぎているのが少し心配になったことをおぼえている。マッコイドはパイロットのチェイスに、燃料が残り少ないので、彼らの所屬基地であるフォーベス空軍基地に帰投しなければならぬ

旨アドバイスし、彼らはフォートワース付近（図の点F）から北へ進路を取ったのである。北へ進路を取った途端ALAA-6受信器がふたたび、毎秒三〇〇メガサイクルの信号を機の後尾にとらえたのをマクルアーとチェイスはおぼえているが、地上のレーダーも同時にその信号をとらえたかどうかについては、彼らの記憶に若干の相違がある。マッコイドはこのこまかい点については何もおぼえていなかった。前出の一九五七年の情報レポートは幸運にも、彼らが北へ進み、オクラホマ州へはいっていたこの時点における状況を記録している。

「グリニッジ標準時一一時二〇分、当該機は所屬基地に向け北に進路を取る。この進路変更により物体は機の後尾に位置した。第二ECMSCOOPに、その物体の信号を相対方位一八〇度と一九〇度の間にとらえ続けたまま機は同一一時四〇分に、オクラホマシティーの真横ぐらいにさしかかった。そしてそのとき、その信号はやや突然に消滅してしまつた。五五SRWD01（第五五戦略偵察飛行大隊情報部長）は、電子方向探知器上の現象は機長の目撃と何回となく完全に一致していることは疑いないと考えており、したがって、その物体が、とらえられた信号の原因であると考えている」

その物体はオクラホマ州南部まで彼らといっしょであったというのがチェイスの記憶であるが、しかしハンレイの記憶によればその物体はオクラホマシティー付近（図の点G）までずっ

といっしょであった。その他の乗組員の記憶はそれほどはっきりしておらず、その物体はフォートワースと彼らの所屬基地のあるトベカ間の北へ向かった進路上のある区間の間でその物体といっしょであったとだけ記憶している。

● ブルーブックでは

ブルーブック計画のチームは、この事件についての情報を、事件発生後二カ月以上も経過した一九五七年一〇月二五日に受けたことを記録は示しているが、その短い要約は次のような文章で終わっている。

「事件データのCAA（民間航空局）との共同調査において、ダラスとフォートワース付近で目撃された物体は、明らかに旅客機であったことがCAAにより確認された」

二つの文章は、その当日の午前三時三〇分、エルバソから五〇マイルのテキサス州ソルトフラット（図を参照）上空二四〇〇〇フィートのアメリカン航空の二機DC-6の空中衝突一歩手前の状況に言及しているのである。とにかくこれまでに述べた事件は、アメリカ政府の公式記録であるブルーブックには「アメリカン航空の第六五五便であることが確認された」として記録されている。



以上でAIAAのUFO小委員会にファイ

されたレポートの抄訳は終わるが、読者もすでにお気づきのとおり、ヒューマノイドとコンタクトしたとか、円盤の中に連れ込まれたとかいうケースにくらべて、このレポートはレーダーと肉眼による、それも夜間という大変に地味なケースである。なぜこのような地味なケースが、同小委員会のAIIA A会員に提供する最初のケースとなったかを考えてみるのも面白いのではないかと思う。

AIIAというアメリカでは、あのマサチューセッツ工科大学(MIT)、NASA、ボーイング社を始め航空宇宙関係は、大学教授か



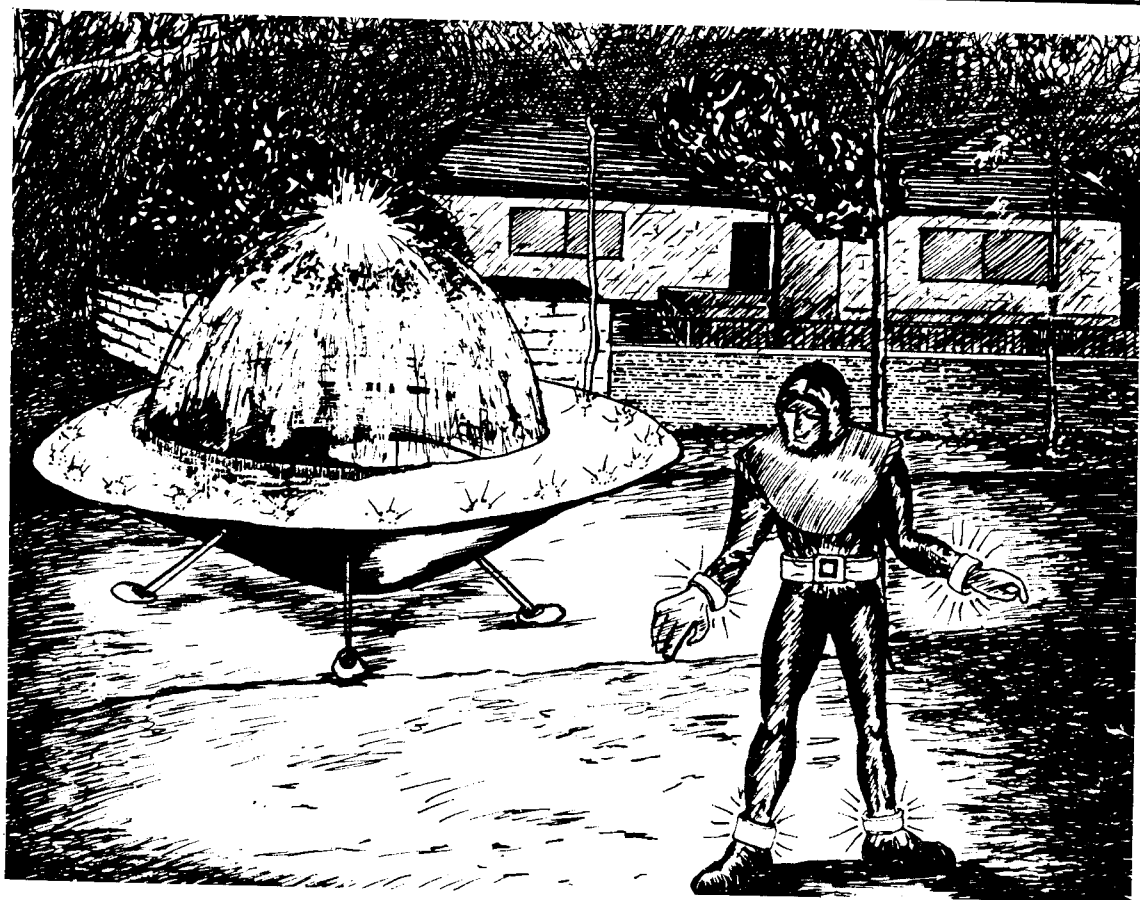
●ダラス、フォートワース附近

ら各研究所の第一線研究者、航空機やロケットメーカーの設計者にいたるまで、お歴々の方々がすべて会員という、月への着陸を可能ならしめた輝かしい航空宇宙技術を背景にした学会で、何というか、アメリカの科学技術の一方の旗頭である。そのような各会員にUFOに関する吟味された資料を提供するのであるから、最初からヒューマノイドとのコンタクトや円盤の中へ連れ込まれたというショッキングなケースでは、信じるものも信じてもらえなくなるというわけで、レーダーという人間による誤認の可能性がほとんど少ないメディアを含む前述のよ

うな地味なケースが選ばれたのではないかと筆者は想像している。というわけで、その内容も事件の模様を詳しく記述するだけで、これに対する解釈や想像がいっさい含まれていない。これはもとより資料のみを提供するという同委員会の初めからの姿勢のためである。それともう一つ忘れてはならないことは、このケースの目撃者はすべてその道の専門家であったという点である。偵察機のパイロットが旅客機の着陸灯(高空を巡航につけることはほとんどない。また着陸灯は普通白色光で淡青色など発するはずがない)を見分けられないようでは何のための偵察かというわけであり、ECMのオペレーターが旅客機、それも遅いプロペラ機が発生するレーダー電波(旅客機から発するとすれば気象レーダーだが、快晴の日これを使うことはあまりない)が見分けられなければ、これも何のための偵察かというわけである。一般市民がドライブ中に遭遇したようなケースとは根本的に違う面を前述のケースは含んでいるのである、と言ってもよいだろうと思う。筆者が思うようなことはもちろんAIIA Aのお歴々が承知していないわけではなく、この点からもこのケースが有初に選ばれたのは小委員会が充分検討のうえではなかったかと思われる。

(筆者は東大工学部出身。米スタンフォード大学大学院修了。航空工学専攻。UFO研究家)

突如農家に現われた水晶のようなドームをつけた“奇妙な物体”と“男”



スペインに出現した円盤と乗員

★★★★★★ J・マシアス & アンヘル・バリゴン★★★★★★

スペイン、バリャドリッド地方のプエンテ・デ・エレラに住むドン・ルイス・デ・ディエゴ氏の農家でお手伝いさんとして働いていた、C・R・嬢（チャールス・フォートのグループによって名前は公表されていない）は、一九七〇年八月一六日（注1）に、以下に述べるような異常な出来事を体験した。彼女はそのときの模様を次のようにわれわれに語ってくれた。

「私はちょうどそのときテレビを見ていました。土曜日の晩でしたので、『メデイカル・セクター』という番組を見ていたのです。そのとき突然、ビューッという強烈な音がしたので、聞き慣れない音でもあったし、特に夜だったこともあって何だか不安な気持ちになりました。外へ出て調べてみようと立ち上がったとき、テレビの映像が乱れているのに気がつきました。そこでテレビのところへ行き、自分で直せるかどうか調べるためにチャンネルを調節してみました。ところが、いろいろなボタンをいくら押してみても映像の乱れを直すことはできませんでした。

いずれにしても放送終了の時間に近かったので、私はテレビのスイッチを切り、さっき聞いた音の原因をつきとめようとドアのところへ行きました。玄関に通ずる通路のところに、種々のあかりをつけた『奇妙な物体』と、

そのそばに一人の男がいて庭のムラサキウマゴヤシの畑を見ているのを私が目撃したときの驚きは、みなさんにはとても想像もつかないでしょう。私は恐ろしくなって、家の中に駆け込みドアを閉めました。しばらくすると、はじめに聞いたのと同じ音がして、その後まもなく私が部屋窓越しに外をみると、例の『奇妙な物体』は消え失せていました」

●質疑応答

彼女が一気に自分の体験を長々と語ったあと、われわれはもっとくわしく知るために彼女に多くの質問をしました。以下はわれわれの質問と彼女の答である。

●状況の概要

問 テレビにはどのような変化が起ったのですか？ 映像に影響があったのですか、それとも音の方ですか？

答 画面に何本もの線が現われたのです。

問 あなたはバンガローに一人でいたのですか？

答 いいえ。おばあさまもいっしょでした。つまりルイス様の祖母です。彼女は音は聞いていますが、UFO

は目撃していません。

問 あなたの働いていた農場には犬だとかあるいは他の動物はいなかったのですか？

答 あのとときは雇主が乗馬用に使っていた馬が二頭いただけです。でも犬や家畜も飼っているんですよ。

問 失礼ですがもう一度確認しますが犬はいたのですか？

答 いいえ。

問 馬が何か落ち着かない様子はありませんでしたか？

答 いいえ。もともと馬小屋は少し離れたところにありましたから、実際のところ良くわからなかったのです。(注2)

問 あなたがお聞きになった音はどんな音だったのですか？ また、音の強さに変化はありましたか？

答 笛のようなピューッという音でした。

その音は私が通路のところに立っている間ずっと聞こえていましたが、私が最初家の中で聞いたのよりは少し小さく聞こえました。その後、私が再び窓から外を見ようとした直前に、最初聞こえたのと同じようにまた、鋭くなりました。

問 あなたが外にいてUFOを目撃していた時間と、家の中にもどってドアを閉めた時間はどれくらいだったのですか？

答 ほんの数秒でした。それからすぐに家の中にもどったのです。

問 最初に聞こえた音と次に聞こえた音との間ほどのくらいだったとお思いですか？

答 五、六分だったと思います。というのは、そうこうしている間に私はいろんな事をしましたので。(注3)

問 UFOはバンガローからどのくらい離れたところにいたのですか？

答 約三〇メートルほど離れたところ

●物体に関する詳細

問 もしその物体と横から見た「*egg*」(意味不明。*egg*のまじがいか?) タイプの車とをくらべた場合、物体はそれよりも大きかったのですか、小さいかったですか？ それとも同じくらいの大きさでしたか？

答 ほとんど同じ大きさでした。

問 円盤の高さは、どのくらいでしたか？

答 その近くに植えたばかりの木と同じぐらいの高さでした。

問 UFOの実際の大きさをメートルで表わしたら、どのくらいになりましたか？

答 幅約四メートルで高さが約二・五

メートルです。脚の長さは約六〇センチで、これが船体とドームを支えていました。

問 その物体はどんな形をしていましたか？ 絵に描いてみて下さい。

答 ええ、描いてみます。

問 あなたが描いて下さった絵を見ると、(UFOは) 何本もの支柱に支えられた楕円形の物体で、半球形のドームがその上にかぶさっているように見えますが、ドームがどのような色をしていたか教えていただけませんか？

答 水晶のようにほとんど透明でした。

問 それでは楕円形の部分は何色でしたか？

答 銀色でした。

問 UFOは空中に停止していたのですか、それとも直接地面に停止していたのですか？

答 通路のセメント舗装してあるところに「脚」で立っていたと思います。

問 物体は何か光を発していましたか？ もし発していたならどのような光だったか説明していただけますか？

答 ドームの上に、連続的ではありませんがくるくる回る青白い光が見えました。一回まわってから止まり、それからまた回るといふ具合でし

た。それにもう一つ、回転速度はとも遅かったようです。回転速度が落ちると、それにもなって光の輝きもなくなりましたが、光そのものは消えませんでした。

問 楕円形の船体にも光は、見えませんでしたか？

答 ええ、いろいろな種類の光がたくさんついていました。でもすべての光はさっき私が述べた光よりも小さかったです。光は白色や、紫や、黄色でした。

問 光はきちんと順序よく並んでいましたか、それとも物体のまわりに不ぞろいにつけられていましたか？

答 物体のまわりにきちんと列をなしてつけられていました。

問 物体が何本の支柱に支えられていたか正確に述べられますか？

答 いいえ、正確にはわかりません。

問 ドーム、つまり船室は回っていましたが、それとも固定されていなかったか？

答 固定されていません。前にも述べたように、回っていたのはその上にのっていた光の方です。

問 その物体にはドアかステップがありましたか？

答 いいえ、そのようなたぐいのものは見えませんでした。もしかしたら背後にあったのかもしれませんが、私のいたところからは見えませんでした。

●乗っていた人物について

問 あなたが目撃した乗員は何人でしたか？

答 「円盤」の外に一人を見ただけです。船室にはだれもいませんでした。

問 その人物は、UFOからどのくらい離れたところに、立っていたのですか？

答 三、四メートルです。

問 どのような人間だったか説明していただけますか？

答 背丈が約一・八メートルぐらいの男のように見えました。体にびったりとした黒もしくはダーク・ブルーの服を着ていましたし、着ているものと同じ色のヘルメットを頭にかぶっていました。腰のまわりや足首にはブレスレットのような光る物をつけていましたし、また、腰の中央あたりに四角いバックルをつけていました。おそらくベルトのバックルだと思いますが、色は腰のまわりや足首につけていたものと同じでした。

問 どんな顔をしていたか詳しく説明できますか？

答 いいえ、それでは皮膚がどんな色だったかもわからないわけですね？ たとえ

ば白かったとか、黒かったとか、あるいは黄色だったとか？

答 顔は明るい色だったと思います。

問 髪の毛はありましたか？

答 見ていないのでわかりません。

問 そのヒューマノイド（人間）がどのような行動をしたかを詳しく、はっきりと述べてみて下さい。

答 最初に彼を見たとき、彼はムラサキウマゴヤシの畑をじっと見ながら立っていました。かがみこまないで周囲を見ていました。その後は「円盤」の方へ歩いて行きましたが、その中にはいったかどうかわかりません。というのはそのとき私はドアを閉めてしまったからです。

問 彼は普通の人間と同じように歩いていたか？ 歩きぶりについて何か欠陥とか不自然さとかがありませんでしたか？ 彼は腕を振っていませんでしたか？

答 普通に歩いていました。それも大股で。そう、歩幅はとても大きいと思いましたが。腕は普通の人と同じように動かしていました。

問 ヒューマノイドがあなたを見たとき、

思いますか？

答 いいえ、そうは思いません。それに私の身体全部が外に出ていたわけではないのです。バンガローの階段を降りようとしたとたん、物体を見たので、あわてて家の中へ駆け込み、顔だけ外に出て見ていたのですから。それというのも習慣で、夜の一時半から一時の間は玄関灯を消しておくことにしているのです。ですから彼のいたところから私が見えたとは思えません。

●物理的な力によるマークまたは足跡について

問 物体が着陸していたところに跡かマークのようなものは残っていませんか？

答

●図1. バリャドリッド地方の地図、矢印は着陸地点

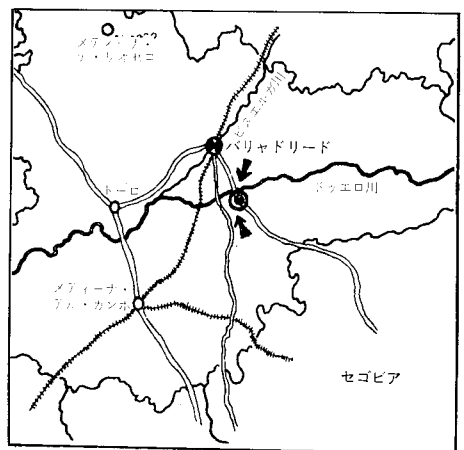
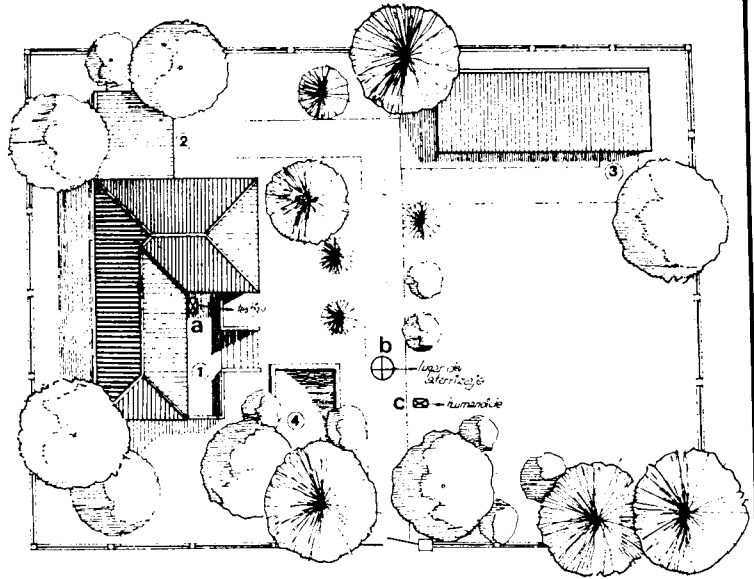


図 2

農家の配置図

- ① テラス
- ② ガレージ
- ③ 馬小屋
- ④ 水泳プール

- a) 目撃地点
- b) 着陸地点
- c) 乗員の出現地点



答 え。

問 どんなマークでしたか？

答 二度目に窓から外を見たとき、UFOが着陸していたあたり一帯に一樣に輝いている光をはっきりと見ることができました。次の朝、昼間でさえも、その場所に黒い足跡がはっきりと残っていました。

問 その足跡はどのような形をしていて、一体いくつぐらい残されていたのですか？

答 人間の足跡のようでした。もっと正確に申しますと、(形は)ブーツ型で、ヒールがついており、ヒールの部分は靴底の前の部分より狭くなっていました。靴底にはいくつもの斜線がはいっていました。足跡の数までかぞえていませんが、数個ありました。

問 その付近で他にあなたの注意を引いたものはありませんでしたか？

答 草が倒されていたとか燃やされていたとか、あるいは木が折られていたとかいう様子はなかったのですか？

答 UFOの一部分はまちがいないく土の上にあったはずなのですが、例のマークは道路がセメントで舗装された部分にしかありませんでした。

問 他にそれを見た人はいますか？

答 それとマークが消えるまでのくらいかかりましたか？

答 農場へ来る人はだれでも見まし

た。もっとも、私はそのことについてだれにも何にも話さなかったの

で、彼らはその跡に特別な注意を払う様子はありませんでした。足跡が消えるまでには数日かかりました。さっきも申し上げたように夜になると足跡が光って見えました。

問 何か丸いマークはありませんでしたか？

答 いいえ。とにかく日中に見えたのは足跡だけです。夜になると地面が光っていました。それもとどころでなく、その付近全体が光っていました。

●目撃者について

彼女は二歳で、若い頃からお手伝いさんをしていました。小学校も出ていないので、教育を受けたとは言えない。このように教養がないので、最も基本的な事柄には無知である。

会見の間、彼女の態度は最初の恐怖状態から、相互に通じ合える良い状態へと変化していった。彼女は、われわれが会見の模様をテープレコーダーにとりたいという申し出を何なく受け入れてくれた。

にもかかわらず、会話を通じて感じられたことは、例の出来事を思い出すことによって起こる緊張や心配が彼女を支配していたということである。



●写真1. 事件のあった家屋。UFOは写真左側の男性が立っている付近に着陸していたものとみられる。

あとで彼女の家族から聞いてわかったことだが、われわれがインタビュを終えて帰った後、彼女はわあわあ泣いたり、われわれに例の出来事を話したことで義理の兄に文句を言ったりしてヒステリックな反応を示したというのだ。明らかにわれわれが質問している間、彼女は自分の目撃した物体のサイズや寸法や大きさを自分が普段使用しているものと比較して述べようとしたが、自分自身、そこに来ただけで

あったのでむづかしかったことは事実である。同様に、彼女の知っている語彙が限られていたため、自分が思っていることを表現する際、たびたびジェスチャーに頼らざるを得なかったこともある。彼女は自分が耳にした例のビュールという音を表現する際、それを伝えるもっとも良い方法として擬声的な表現を選んでいる。われわれの行なった質問形式を批判的にとらえれば、確かにバリエーホ・ナヘラ博士(注5)が指摘しているように、われわれはあらかじめ答が準備できるような誘導質問を数回行なうというミスをおかしたことは認めざるを得ない。

しかしこのミスをおかしたのは実際にテープレコーダーに記録していたときだけであり、これは彼女に対して公平な質問を行なった最初の質問が終わったあとのことである。したがって、テープレコーダーにとったのは以前に彼女と行なった会話の確認と繰り返すにす

ぎないことを考えれば、ほんのわずかな誘導質問が調査全体をダメにするとは考えられない。

●目撃事件が起こった場所について

この事件が起こった農場は、プエンテ・デ・エルレラ(バリャドリッド地方)の郊外にある。バリャドリッドからの正確な距離は一一・六キロメートルで、場所はマドリッドとレオン間のハイウエーに面している。

そのあたり全体は、「河川地域」として知られている区域に含まれている。昔からの農業地帯で、ドゥエロ川(外国人にはポルトガル語名のドウロ川としてむしろ良く知られてからの水を使った肥沃な灌漑地帯を有しているところで、また、針葉樹系統の木が豊富にあるところでもある。目撃事件の起こった農場はセゴビア通り(マドリッド―レオン間高速道路)近くにあり、そこを通るドライブはだれでもその場所を簡単に見ることができると、われわれは夜の交通量を調査した。しかし二四時間ごとの交通量が一〇〇〇台から二〇〇〇台の間という交通量のおおざっぱな平均数値を得られただけだったのは残念であった。

一三・二キロボルトの電線が家屋から一〇〇メートル離れたところに張られていたという事実は重要である。その家から川までの距離は約三〇〇メートルである。

農場のいろいろな建物の配置は図2にのっているので、ここでは詳しく述べないことにする。したがってここでは、地所全体が図中に出ているとだけ述べておく。(写真1参照)

農家への通路は幅約四・五メートルで、写真(写真2参照)でもわかるように両側には小さな木が並んでいる。

●結論

この種の事件をはっきりさせようとする、ヘリコプターのような一般的な航空機と見まちがえたのだとか、目撃者の感覚的知覚作用に何らかの変化が起こったためだとか、ごくありきたりの説明がなされるものだが、今回の事件にはそのような説明はあてはまらないと確信する。

われわれは目撃された物体の特別な特徴からまちがいないことを主張するし、他方、日中も見えたという物理的な跡が存在したからには、いかなる幻覚現象や錯覚の可能性も除外されるものと主張する。

しかし同時に、われわれは目撃者側が、意識的にせよ無意識的にせよウソをつく可能性のあることを見逃してはならない。今回の事件に関しては意

識的にウソをついている可能性は次のような理由から除外されるべきである。

(1)前に述べたように、目撃者が無教養であることから彼女がこの種の複雑な話をデッチ上げることは不可能であるといえる。彼女の家族の他の人たちが持っていた物体に関する情報を集めただけでは彼女が正確なデータをまじえながら話をするのには不十分である。というのも実際このデータは他の着陸事件によっても確認されているからだ。

(2)人々をかついで自分に注意を向けさせよう(たとえば有名になりたいとか、冗談をいいたいか)というには



●写真2. 農家へ通じる道路(大通りから撮ったもの)

具体的な動機がない。

こうしたことから、われわれが、目撃者は目撃事件をボーイフレンドにしゃべった以外には他のだれにもしゃべっていないことや、家族でさえ一九七二年三月までこの事件のことを知らず、彼女の義理の兄がふとUFO現象のことを口にした後、彼女が彼に目撃事件を話したとき、みんなはじめて知ったということを強調するのは意義がある。

また、次のような理由からウソや作り話説には実質的な根拠があるとは信じがたい。

(a)彼女の生活記録から彼女は正直な人間であることがわかっていいる。

(b)彼女との会見の間、何回繰り返しても、彼女の話の中に一片の矛盾も感じとれなかったこと。

このような根拠をもとに、論争の余地のない真実性が今回の目撃事件にあると考え、ここに、今回の事件はヒューマノイドの出現も含めて、本当にUFOが着陸した事件であるとの結論に達した。

問題になっているUFOがその特徴や乗員の出現から判断して、本当に地球以外の星から来たものだと言えることは、もちろんそれを証明するすべではないのだが、不合理なことではあるまい。(注6・7)

補注

1 目撃者が、事件が起こったのは八月の土曜日と日曜日の夜だということも思い出しているのです、この日付は正しいと思う。

この事件は、ほぼ八月一日と一六日の間の夜に起こったものである。

2 馬小屋はバンガローから約一五〇メートル離れたところにある

3 主観的要素と目撃者が感じた不安から、彼女は時間の見積りをまちがえている可能性もある。

4 われわれは通常物を比較する場合、農場の所有者がこのタイプの

7

車を持っていることから、この車のサイズを使っている。

(ゴードン・クレイトンのコメント。実のところ、「Seat 850」とはどんな意味なのか、見当がつかない。これは「Seat 850」のミスプリントではないのだろうか?)

5 J・A・パリエーホ・ナヘラ博士著「精神病学入門」参照。

6 目撃された実体は、ブラジルのジャデル・U・ペレイラが分類した「ヒューマノイドのタイプの分類」のうち、Typel. Variant (T.V.)に相当するものである。

われわれ(C・E・I・本部)が半島を横切っているBAV-Cラインの近くで見つけた多数の着陸事件や、一九六九年(バリヤドリッドとブルゴスにチャールズ・フォート・グループが設立された年)まで、ラインが横切っている地方のどこにもUFO研究センターがなかったということから、われわれはイベリアの着陸事件に関するすべての疑問に対し新しい感覚で取り組む必要があると思う。

というのは、この件に関して過去の研究に使用されたサンプルが典型的なものでないと感ずるからである。

ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている

●世界中に出現し続けるアダムスキー型円盤——その目撃報告や写真類は何を意味するか？

ゴードン・クレイトン 英国フライング・ソーサー・レビュー誌幹部



●米イーストマン・コダック社を訪問したときの故ジョージ・アダムスキー(左)。
右は同社技師でUFO研究家のウィリアム・シャーウッド。

このすばらしい目撃事件の新聞記事を送ってくれたのはかつてパナグラ航空に属していたペルー、リマのジョージ・ミルバークで、彼の旧友であるデレク・デンブスター（一九五五年から五六年にかけて英国のフライング・ソーサー・レビュー誌の編集長であった人）を通じて私に回送されてきたものである。

ペルーに アダムスキー型円盤が出現！

事件は一九七三年一〇月一九日に発生した。この日、ペルー人技師ユーゴ・ルヨ・ベガという人が空中に静止している正体不明の物体をボラロイドカメラで撮影したというもので、これはどう見ても一九五二年一月一日に米カリフォルニア州バロマー・ガードンズで、不運な、しかもひどく悪く言われていると思われるあのジョージ・アダムスキーによって撮影されたという「金星の円盤」にそっくりなのである。

ジョージ・ミルバーク機長にはこのペルー人技師を知っている一友人があるという。そのためもっと詳細な報告とその写真のコピーがいずれ入手できる可能性がある、そのことをミルバーク機長に依頼してある。

手元にあるリマの新聞「エル・コメルシオ」の一九七三年一〇月二三日付

に掲載されたその記事によると、一九七三年一〇月一九日金曜日の午後三時頃ユーゴ・ルヨ・ベガ氏はリマに向かって中央ハイウェイを車で疾走中であつた。マトッカナの事業関係の客が同乗している。この客は路傍の露店でマシナリン・オレンジを少し買ったばかりで、ちよつと停車してそのオレンジを食べようではないかと誘いかけてきた。

そのあと——ベガ氏の言葉を借りると——「われわれはほんの数メートルの所に空飛ぶ円盤を見た。息がはずんでくる。二人とも無言のままだ。一連の考えが心をかすめた。私は騒がずに車へ走りもどってカメラを取り出した。そして細心の注意を払って写真を撮影した」

氏はたった一枚だけを写せたという。話は続く。「最初、円盤はたいそうゆっくり動いていたが、次に上昇を始めて急速に視界から消えてしまった。このため一枚しか写せなかったのだ。

瞬間私は写真がうまく写っていると思わなかった。写真の技術はへただと自認していたからだ。だが像が現われるのを見たときは驚喜した。その物体のかたちが写っているのだ。とにかくこの一枚の写真はそれが本物のUFOで、心の産物でないことを証明しているよ」

ベガ氏の説明によれば、はじめに二人が円盤を見たときはそれが「目の高さ」にあったという。その場所はペルー中央ハイウェイ約五四キロの地点、ラ・カルレテラ・セントラルである。氏は新聞記者に次のように語っている。

「そのUFOはリマク川と大きな峡谷の上空に現われた。非常にゆっくりと動いており、客も私もその光景に心をうばわれてしまった」

ベガ氏による円盤の形状は次のとおりである。

「それは輝く銀色を帯びていた。上部は丸屋根のように見え、頂上には一定の青い光があつて（注1）、その下に小さな窓群のついた小塔があつたが、これはよく見ることができた。更にその下方には円盤が大きな台状に広がつて、その直径は約一〇メートルだった（注2）。底部の中心にはコーン型の物があり、そこには非常に強い暗赤色の輝きがあつた（注3）」

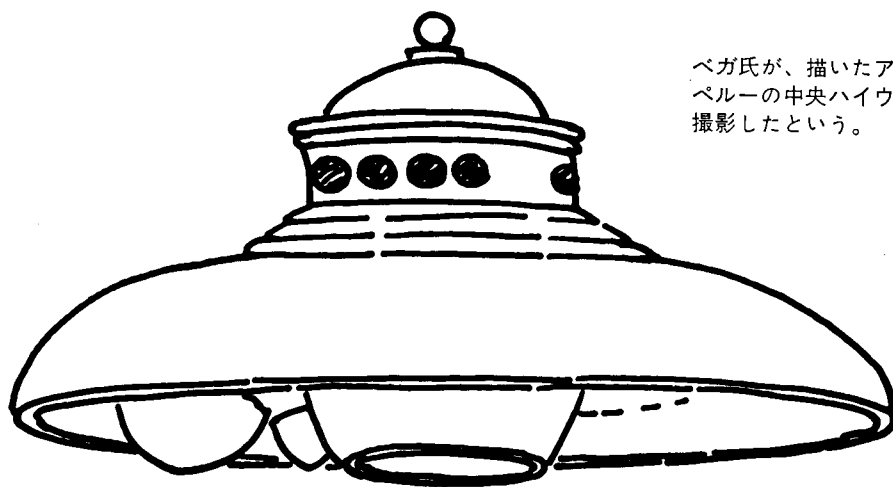
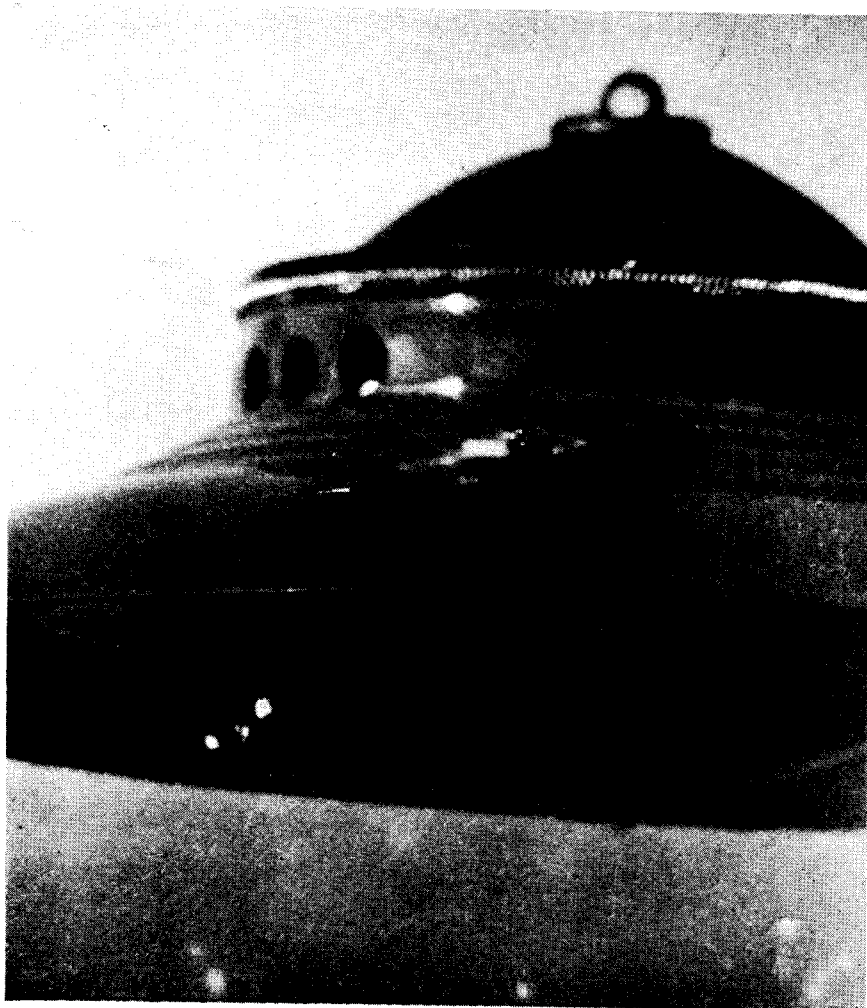
二人が呆然自失の状態からもとへもどるのに二〇分ほどかかったが、その後もドライブを続けるまでにしばらく円盤のことを話し合っていた。相手の客がだれであるかは新聞社が伏せている。「その人は名を知られたくないある金持だ」としか氏は言わない。

ベガ氏は新聞社のためにスケッチを提供した。ごらんのようにこれは典型的な「アダムスキー型円盤」を示している。しかもこのスケッチには見たところ四個ずつの丸窓があるが、これによってある興味深い話がよみがえってくるのである。多数の読者はご存知あるまいから、ここでひとつご紹介しよう。

スティーン・ダービシャー
少年の体験

アダムスキーがバロマー・ガードンズの上空で「スカウト・シップ（偵察用小型円盤）」を撮影したと称してから一年二カ月ほどの後、医師の息子である二三歳のスティーン・ダービシャーという英国の少年が、一九五四年二月二五日の朝十一時にレーク地方のコンiston湖水（ランカシャー）の上手にある丘の上でアダムスキータイプの円盤と酷似した二枚の写真を撮影した。スティーンと従弟のエイドリアン・マイヤーの二人はコンiston・オールドマン山の頂上へ登ったのである。小鳥を観察するのが二人の趣味だったため、鳥の写真を撮るつもりで、安物の小型カメラをさげていた。そして頂上で地面近くの空中に瞬間的に停滞した物体を目撃し、スティーンは二枚ほど写した。うまく撮れてはいなかったが、ともかく形と大きさはなんとか示していた。スティーンによれば、その物体は銀色のぎらぎらした表

●1952年12月13日、午前9時10分に、米カリフォルニア州バロマー・ガーデンズで、アダムスキーが6インチ反射望遠鏡を用いて撮影したという金星の円盤。



ベガ氏が、描いたアダムスキー型円盤。
ペルーの中央ハイウェイ付近で目撃し、
撮影したという。

面を見せており、「光線が通るけれども、中まで見通すことはできないような」ものであったという。最初それはじかに太陽の光を受けていたが、上昇し始めるにつれて雲が直射日光をさえぎったため、少年たちはもっと明瞭に見ることができた。「それは固い金属状の物体で、ドームと丸窓(複数)があり、底には三つの球体があった。底の中心部は黒くて、コーンのようにとがっていた……キャビン・ドームの頂上にはハッチのようなものがあった」という(注4)。

数日後にステイヴン・ダービシャーが四名の新聞記者の質問攻めにあったとき、記者たちは少年に心交わりを起させようとしたり、些細な点で言葉の食い違いを起させようと躍起になったが、だめだった。また彼らはアダムスキーとレスリー共著の *Flying Saucers Have Landed* (訳注『初版は一九五三年九月にロンドンで刊行。日本語版は「空飛ぶ円盤実見記」と題して高文社から出ている」)(注5)を読んだと言わせようとしたが、これも少年は否定した。両親も否定している。しかしステイヴンはアダムスキーの「スカウト・シップ」写真を見たことはあると言う。これはロンドンの雑誌「イラストレーテッド」誌の一九五三年九月三〇日号に掲載されたものである。しかしステイヴンはこちらを困

惑させるような少年らしい論理をかざして、自分が見た物とアダムスキーが見たと称している物とは「まったく同じ種類の物ではない」と主張した。説明せよとせまられて彼は「イラストレーテッド」誌に出ている写真は三個の丸窓が一列に並んでいるが、自分が見た物体には四個の丸窓が一列に並んでいたのだと言う。物体が下降してほとんど地面に触れそうになったときは丸窓が三個しか見えなかった。これは二人の少年が最初に見た数だったのである。だが、続いて物体が回転したために四つの丸窓があるのを認めた。三個ではなかったのだ。(訳注『少年が目撃した光景は本誌第6号六四頁「宇宙・引力・空飛ぶ円盤」の「序」に詳述」)

円盤の丸窓は四つだった

翌年の一九五五年に英国でフライング・ソーサー・レビュー誌が創刊された(訳注『UFO専門誌として世界一流』)。私は多年の海外生活を終えて、英国へ帰ったばかりだった。私自身は一九四一年に中国のある都市の上空で一機のUFOを見たことがある。ニューヨークリーンズでは、一九四四年の二月に連合軍がドイツを空襲したとき「フー・ファイター」が見られたという嚴重な検閲済のアメリカの新聞記事

を読んだ(注6)。一九四八年から一九五一年にかけてブラジルにいたときは初めてUFO関係の記事が出たのを見た。したがって、当然のことながら私はフライング・ソーサー・レビュー誌の創刊号からの読者になっている。そしてまもなく、当社の編集長だったデレク・デンプスターや主筆のウェイヴニー・ガーヴァンと知り合った。

当時の実業界におけるウェイヴニー・ガーヴァンの地位は、ロンドンのワナー・ローリー社の社長であった。この出版社は一か八かの社運をかけてアダムスキーとレスリー共著の *Flying Saucers Have Landed* (邦訳版「空飛ぶ円盤実見記」)を最初に出版した会社である。同社が出版に踏み切ったのはまったくガーヴァンのアドバースによるものである。彼は独自な考えから急増するUFO出現報告の裏には何か真実の要素があるにちがいないという確信をもつに至っていた。(注7)

一九五五年、私たちは時折昼間に会合をもったが、その一つで(こうした場合ロンドンのセント・マーティンズ・レーンにある舞台俳優などの出入りで有名なバブ・ザ・ソールズベリー)で通常行なわれた、ウェイヴニーはアダムスキーの円盤写真とダービシャーの写真についてある興味深いことを話してくれたのである。

彼が言うには、アダムスキーからその写真を受けとったとき、大写しにされたその円盤写真は(一九五三年の初版本の口絵写真として掲載されたもので、一九七〇年のデスモンド・レスリーによる新版には写真①として出ている。注8)たしかに、一列に四個の丸窓があったという。しかしこの写真を初版本に掲載するにあたって、出版社側は写真の右端をカットしたために、印刷されたものは丸窓が三個しか見えないものになってしまった。そういう事実を知らないはずのステイヴン・ダービシャーは「自分」が見た円盤には四個の丸窓がついていたと言いつ張ったのである。兩名が撮影した各円盤は、とにかく丸窓の数に関しては結局同じだったのだ!

ウェイヴニー・ガーヴァンとのこの対話のあとしばらくして私はレナード・クランプの *Space, Gravity and the Flying Saucer* (訳注『宇宙・引力・空飛ぶ円盤』)と題して本誌に連載中)というすぐれた書物を読んだ。その序文はデスモンド・レスリーによって書かれているが、ウェイヴニーがアダムスキーの円盤写真の右端をカットしたこと、ステイヴン・ダービシャーが新聞記者から質問攻めにあった件について私に話してくれたことをレスリーが確認していることを知ったのである。レスリーは *Flying Saucers Have*

Landed の新版中でもこのことを確証している。

しかもレナード・克蘭プはその著書の中に正射影法による比較図を掲載し(注9)、それによってアダムスキー写真とダービシャー写真を厳密に比較し、問題の両物体が何であろうと、形に關してはまったく同じであるとの結論を出した(訳注)この比較図は本誌第6号六六頁に掲載)。アダムスキーがとつともなく巧みにでっちあげたインチキ劇をカリフォルニアから英国のレーク地方まで足を伸ばして演じたか、それとも一三歳の少年がそれをやったのか——いづれにしてもこのインチキ説はしだいに影が薄れ始めてしまつた。

中米でもアダムスキータイプの

円盤が撮影された

くり返すが、アダムスキータイプの円盤写真としては、この二点だけが唯一のものではない。この種の写真は他にも多数存在するのである。それらの真憑性は他の型のUFOの写真と大体に同程度である。特に私はアダムスキータイプのある写真を思い出す。それは一九六三年の春か夏のイタリアのグラービア誌に出ていたものである。解説文はマデイラという米陸軍将校に関するもので、その人が撮影した物体は中米のある共和国の(私はコスタリカだ

と思う)高速道路土かそのそばに立っているときに目撃した、着陸した円盤だという。私はその物体とアダムスキー写真の物体とに相違を見出すことはできなかった。一九六三年にイタリアの新聞は多数のUFO関係の報道記事で溢れていた。そして私はその多くをフライング・ソーサー・レビュー誌のために翻訳したが、その中にこの将校の記事も含まれている。しかしその記事は当時レビュー誌の編集長だったウエイヴニーが採用しなかった。なぜ活字にしなかったかは謎である(注10)。なぜなら彼はアダムスキーがウソつきでもなければ山師でもないことを強く確信しており、この写真がアダムスキーを有利にすると考えていたからだ。

ペルーのベガ氏の目撃報告の到着は、アダムスキーの写真類やその体験記について綿密な再考をする方が賢明ではないかということを示唆している。というのは、私が先にも述べたように、一九五二年以来多年にわたって「鐘型金星円盤」の目撃報告やその写真類の出現の流れが着実にあつたばかりではなく——これは疑う人にとって恐怖以外の何物でもないが——アダムスキーが早まって発表してしまった、あの「背の高い、きれいな、長髪の、慈愛深い人々」に関する報告類も出ているからだ。しかもアダムスキーの報

告は米国やヨーロッパで男たちが長髪を好まなかった頃のことである。

一九六六年一〇月に私の書いた記事、「中南米におけるヒューマノイド」の中で、誠実な人はこの種の問題について非常に綿密な調査を要求するけれども、おそらくこのような誠実さは示されることはなかったと述べた。これはアダムスキーは結局正しかったのか、もしないという恐怖のためである。(訳注)この傍点の部分は原文ではイタリック体にしてある)

結局われわれは一九五二年以来ほう大なUFO関係報告や「コンタクト体験記類」を取り扱ってきた。われわれは心の操作、洗脳、プログラミング、計画などについて多くを学び始めている。現在われわれのところへ殺到しているまったくファンタスティックなUFO体験記類にかんがみると、一九五二年にジョージ・アダムスキーによって語られた体験だけを特に「問題外」または「納得できない」としているのはどういふことなのだろうか? 彼はむしろ長もがすると思われ始めているのではないだろうか?

やはり空飛ぶ円盤だ!

最後に、「アダムスキー」の金星円盤という特異な問題に關してつけ加えたい。私の写真術の知識はきわめて貧

弱なものだが、この深い知識をもつ多数の人が多くの機会にこの問題を論じ合うのを聞いてきた。そしてジョージ・アダムスキーがなんとやっかいなものを撮影したかと話し合っている人が二人といなかったという事に強く打たれたのである。こうしたさまざまな「解釈」を集めた私のささやかなコレクションの中で、特に罪のない権威者たちが次のように判決をくだしているのが目立つ。あの円盤は

1、米国の病院の手術室で用いられる一種のランプ。

2、タバコ入れ。

3、孵卵器。

あの謎の物体がこの異なる三種の目的に役立ったとは、ともかくも私には認めがたい。年月の経過とともに、私はその物体がジョージ・アダムスキーの言った言葉通りのものなのだろうとしきりに考えるようになってきた——「空飛ぶ円盤だ」と。

注

(1) アダムスキーは彼の「スカウト・シップ」が半透明なガラス状の鐘のように見える、その頂上には「一種の重いレンズのように見える丸い球」があつて、それが光つていたと述べている。他の多数のUFO報告も、物体の頂上に必ずしも青色とは限らないがきらめく光があつたことを特筆している。

●スティーン・ダービシャー少年撮影の円盤





●スティーヴン・ダービシャーが撮影直前に目撃した円盤をみずからスケッチしたもの。

●UFO研究史上重要な役割を演じたスティーヴン・ダービシャー(左)とエイドリアン・マイヤー

●アダムスキーの *Flying Saucers Have Landed* の共著者デスモンド・レスリー



(2) 「約一〇メートル」というのは、UFOを間近に目撃したという人々の話に共通した目測値である。ジョージ・アダムスキーは自分の見た円盤が「約二〇フィート（六メートル）あると考えたが、彼は目撃して呆然となつたために正確な大きさを注意して測れなかったと言っている。

(3) アダムスキーは円盤の底部が光っていたとは言っていないが、彼の写真はたしかにベガ氏のスケッチに見える「コーン」と同じ物を示している。しかも他の多くの目撃者もまったくこれと同じコーンについて語っており、多数の円盤写真もはっきりとそれを示しているか、それらしい物を見せている。そのうえ、アダムスキー写真とベガのスケッチはドームの下部の側壁を取り巻いているリングまたはどっしりしたコイルに関してまったく一致している。丸窓のすぐ上のキャビンを取り巻く「リング」といわれるもの、フレンジ（外縁）、半分のぞいた三個の球形着陸装置などもそうである。その他にも私が見のがした類似性があるかもしれない。

(4) ウェイヴニー・ガーヴァン著「空飛ぶ円盤と常識」（一九五五年三月、ロンドンのフレデリック・ミューラー社刊）を参照。

(5) ロンドンのワナー・ローリー社刊。前述のようにこの出版社の社長は

ウェイヴニー・ガーヴァンであった。

この機会に、Flying Saucers Have Landedの英国版が最初の刊行であるところり返し述べておくのも重要であろう。多くの人が信じているように「米国刊のベストセラー本」が、先に出たのではない。というわけは最初米国の各出版社はアダムスキーの原稿をこたわったからである。そしてデスモンド・レスリーの原稿といっしょにしてウェイヴニー・ガーヴァンが編集し、出版したのである。

(6) これら初期の個人的なUFO現象の目撃の詳細については、一九六二年のFSR（フライング・ソーサー・レビュー誌）三・四月号に書いた私の記事「フー・ファイターズ」と、ロバート・チャプマンの「未確認飛行体」（一九六九年ロンドンのアサー・バーカー社刊）を参照。

(7) 「空飛ぶ円盤と常識」の一〇頁でウェイヴニー・ガーヴァンは次のように述べている。一九五三年の始めに彼は英国ドーセット州ウェイマスに住む一人の男から手紙を受けとったが、それによれば空飛ぶ円盤が存在するどころかその町の背後の丘に着陸した円盤のパイロットと実際に話し合ったというのである。パイロットは「自分たちが地球へ来るのは地球の政治指導者がずるずるとつくりあげた困った状態に対して警戒するようになったからだ」

と言った。これは二〇年以上も後にわれわれがやつとうなずけるようになった洞察であった。ウェイヴニー・ガーヴァンは続ける。「私はこの手紙を読んだとき、しばらく考えた。それから衝動的にそれを引き裂いて、クズかごの中に投げ入れた。その手紙の差出人を狂人だと思った。それから約一カ月後にアダムスキーの原稿と写真類が私の机にあつた。そこで急にそのウェイマスからの手紙を思い出したが——遅すぎた。もし本書が偶然にその人に読まれるならば——その名前を忘れたのだ——私の不信を許していただきたい。そしてもう一度早急に連絡していただきたい」（私が知る限りでは、彼は連絡を受けていない）

(8) デスモンド・レスリーとジョージ・アダムスキー共著 Flying Saucers Have Landed（一九七〇年にロンドンのネビル・スピアマン社から刊行）。この新版にはデスモンド・レスリーの追加記事が掲載してある。すでに指摘したように、アダムスキーはやはり弁護されてしかるべきだと信ずる。ゆえにこの問題に関心のある人はこの書を、特にレスリーの記事を注意深く読みたい。彼のアダムスキー問題に対する現在の見解はFSRに述べられてきた見解ときわめて近い。アダムスキーの言う謎の「金星人」の性質や由来については特にそうである。

(9) レナード・クランプの正射影法による比較図は広く流布している。これはクランプの著書「宇宙・引力・空飛ぶ円盤」（一九五四年ワナー・ローリー社刊）と、Piece for a Puzzle（一九六六年ワイト島、サマートン社刊）に出ており、またデスモンド・レスリーの Flying Saucers Have Landed の新版にも掲載されている。更にFSR一九六三年九・一〇月号及びアダムスキーの死後までもなく一九六五年七・八月号のFSR誌に再掲された。（ついでながら燃料とエネルギー危機に直面している現在、科学トレーニングを受けている人々はレナード・クランプの理論を注意深く検討している。またResearch in Shadowのドイツ人著者「ロー・シグマ」の理論に対してもそうである。これは最近のFSRに取り上げられた。更にフランス人、ルブランチエーとわれわれの同志であるR・H・B・ワインダーの理論も掲載された。この人々はUFOの推進法の問題を長く探求してきている）

(10) その翻訳のファイル用コピーは空き部屋のほう大な書類の下に埋もれてはいるはずだが、見つからない。マディラ撮影の写真の載っているオリジナルのイタリア紙の切り抜きは私の訳と一緒にウェイヴニー・ガーヴァンへ渡したが、その後どうなったか知らない。

UFOは人類を 宇宙へ導いている?!

中山真理



古代から現代に到るまでUFOは幾度となくわれわれの頭上に出現し、か
ずかずの記録を残しているが、一体こ
れらはいかなる理由で飛来するのだろ
うか。単なる科学的探索、地球征服、
鉱物採集等の理由はこの問いに対する
答えとはならない。

もっと大きなしかも劇的なゴール、
または役割を暗示しているのではない
だろうか？

UFOは心霊現象ではない！

まずUFOが偉大なる目的を持つこ
とを述べる前に、UFOがどこから飛
来するかを、明らかにする必要がある。
なぜなら今日UFOの故郷につい
ては様々な説があつて一定せず、もし
UFOが大気圏ではなく四次元あるいは
地球内から飛来するのだと定義する
ならば、これから述べることはまったく
意味をなさないものとなるからであ
る。

古代地球におけるUFO大気圏外飛
来の証拠として、われわれは世界各地
に残る伝説、あるいは今なお謎として
考古学者たちを悩ませている数多くの
遺跡を挙げる事ができるが、これら
はすでに過去の産物であり、UFOが
現在しばしばわれわれの頭上に出現し
ているという事実ほどには重要でない
と思われる。

しかしここで推理してみるのもわる
くはないだろう。

地球よりはるか彼方、ある銀河系宇
宙の星々では地球上における人類発生
よりかなり以前に知性体が進化し、今
日のわれわれの科学技術よりも更に進
歩した科学的水準に達していた。

そしてこの科学の発達によって彼ら
は宇宙船を建造し、全宇宙ではないに
しても星から星へと飛行し、ついにわ
れわれの銀河系に到達する。彼らの宇
宙船つまり空飛ぶ円盤が地球上に着陸
すると、彼らは人類史上を通じてある
役割に従事するようになった。その同
乗員はおそらく個体として実在する生
命ある知性体であり、人間または同類
のものであったと思われる。

このような説明はあまりにも単純で
しかも容易にわれわれが納得できるも
のである。われわれは想像をたく
ましくして、とてもない結論に到達
したり神秘主義にその説明を求める必
要もない。

しかしながら、大気圏外ではなく別
な世界からUFOが飛来するのだと主
張する人々は「単純すぎるのではない
か。そのような仮定のもとでは今日わ
れわれにとって科学的、物理的に説明
不可能であるUFOにまつわる奇妙な
現象を説明することができない」と反
論するかもしれないが、この問いに対
してモリス・K・ジュサップ博士は

彼の著書の中で、次のように解答して
いる。「UFOの存在は広く超自然と
かオカルトとか呼ばれている多数の現
象と同一視されているが、宇宙飛行及
び宇宙における他生命体の存在だけが
それらの現象を説明することができ
る」

更にカナダのUFO研究の代表的人
物として著名な故ウィルバート・B・
スミス氏は、「スペース・ブラザーズ
は惑星連合体と呼ばれているかもしれ
ないものについて語っていて、そのメ
ンバーはある精神的または知的に開化
したレベルの惑星から派遣されている
可能性がある。

もしわれわれが民族的自滅に陥るこ
とを制することができ、多数の世界に
おいて人間同士友爱精神を高め、人間
の神性や品位を尊重し合うならば、わ
れわれは終極的にこの小さな地球とい
う限界を超えた地域に居住する進化し
た人々の偉大な宇宙共同体（惑星連合
体）に受け入れられることも期待でき
る」と彼の著書の中で推測している。

地球はまさに独立し、国家を与えら
れ、国連に議席を与えられることを待
っている半植民地的なアフリカ諸国と
同様の状態と言えないだろうか？

この宇宙共同体、あるいは惑星連合
体存在の可能性については、コーネル
大学の天体物理学者であるカール・サ
ガン博士や英国の国際天文学者フレッ

ド・ホール博士さえも言及している
が、一九六二年ニューズウィーク紙は
次のような記事を取り上げている。

「多くの科学者たちは今や銀河系宇宙
内に一種の惑星共同体、つまり地球に
おける国連のような星々の連合体を形
成する進化した知性体の実在を確信し
ており、その数は増えつつある」

しかしながら大部分の科学者は宇宙
には複数の文明が存在すると認め、そ
の理論を確立しているながらも大気圏外
から宇宙人がわれわれの惑星に到着し
たことを否定しているのである。彼ら
の根拠となっているのは「アインシュ
タインの相対性原理によれば光速より
速いものはない」という理論で、大部
分の星は百または何千光年も離れてい
るのだから、一体いかなる方法で生命
体を乗せたどんな種類の宇宙船がその
ような途方もなく長い旅程を経た後、
地球に到達できるだろうという疑問を
持っている。

サイモン・ニューコンブ博士は相対
性原理を基に、宇宙間を航行する宇宙
船は秒速二九万八〇〇〇キロメートル
以下であるという不変の限界を証明し
た。しかしアインシュタインは光速よ
り速いものは何もないとは決して言っ
ていない。彼は単に光速について規定
しただけであり、いかなる物体も無限
の質量を得るだろうと言っているだけ
である。

事実ジョーン・ウィラー教授は光速より速いことがいかにして可能かという画期的な理論を展開しており、コロムビア大学のジェラルド・ファインバーグ教授も光速より速いタキオンまたは反光子に関する数学的なモデルを持っている。

そして最も重要なのは以前重力は絶えず波動を持たない場であると考えられていたのに、最近遠隔の星から重力波を発見したことであろう。イギリスの数学者ジェーン・シンジによるとこのことよりわれわれは重力制御というものをご考案することができ、このような制御は全重量をゼロに減じることができることを意味するらしいのである。同時にこの重力制御という考え方は光速より速く飛行するUFOの推進方法の説明を可能にするだろうと言われている。

これらはUFOが大気圏外から飛来するという仮定を裏づけるものである。しかしなおもUFOが大気圏外、つまり宇宙から飛来するという考えに反対の叫びをあげる人々がいる。彼らはUFOにまつわる奇妙な現象を心靈現象であると主張しているのだが、それらは次のように分類できる。

(1)木の葉運動や直角ターンのような既知の科学法則を否定するかに見える円盤の動き、あるいは円盤が突然消滅するというような科学法則からす

ると説明のつかないもの。

- (2)一・三三メートルという小人から三・六五メートルの巨人に到るまでのUFO同乗者についての矛盾した報告。また気味の悪い怪人が円盤から出て来たという作り話に思える報告。

- (3)UFO分野全体に出没し目撃者をおびえさせているかに見える謎の「黒衣の男達」の存在。

- (4)円盤の同乗者たちとのコンタクトまたは単なる遭遇後、目撃者あるいはコンタクティーに生じる奇妙な生理学的及び精神的反応。つまり記憶喪失、皮膚障害、放射線影響等。

- (5)予言、テレポーテーション、空中浮揚そしてテレバシー・メッセージの受信等まったく奇怪で異常な心靈現象と見える出来事。

一体これらの現象は何を意味するのであろうか？ 一見われわれには非科学的しかも心靈的でオカルトめいた魔法のごとく思えるこれらの現象は、実は百万年いやそれ以上にわれわれよりも進歩した人々の単純で実用的な科学のものとらしたものと考えることができないだろうか？

たとえば(1)は先に述べた重力制御装置を使った宇宙船と考えれば地球上の飛行機類と異なる動きをするのは当然であるし、(2)について言えば地球上でさえ種族によって様々に背丈が異なる

というのに広大な宇宙でそれが同じであるはずがあるうか。あるいは怪人というのは一種のロボットとは考えられないだろうか。

(3)の「黒衣の男たち」はだれがそれを演じているにしろ幽霊等ではなく人間であることは明らかである。

(4)、(5)はわれわれの想像も及ばないようなUFO同乗者たちの科学的および物理的結果以外の何物でもないとは言えないだろうか。

われわれは無限の科学的、精神的段階を控えていて、地球よりもはるかに進化したUFO同乗者からすれば地球人はまだ幼児期にあり、子供が玩具について少しばかり知識を得て得意満面になっているように、科学について自己を過信しているかもしれないのである。

さてUFOが宇宙よりの使者に操縦され地球に飛来するという説の有力な理論として「オカムのレザー」と呼称されている一つの原理を紹介したい。この「オカムのレザー」はある新しい科学的理論または仮説を実験するに当たって最も信頼できる指針の一つであるが、この原理を意識すると次のようになる。

「ある現象を証明するには不必要なそして複雑な仮定を取り入れてはならない。数多くの可能な解答から最も単純なものを探しなさい」

UFOは大気圏外、つまり宇宙の彼方より飛来する。そしてその同乗者はわれわれと同様の人間であり、彼らは地球人を惑星連合体に加盟させるという偉大なる目的を持ってわれわれを宇宙へと先導しているのである。これ以上に単純な説明があり得るだろうか？

古代文明発生の謎とUFO

UFOが宇宙から飛来するという仮定のもとに今度は段階的に古代から現代に到るUFOの役割を明らかにしてみたいと思う。ここで、われわれはUFO同乗者の地球人に対する援助の仕方がありありと見ることができるのである。

宇宙人がわれわれ地球人を惑星連合体に加盟させるために成し遂げた最初の仕事は古代地球上の野蛮な未開人を生物学的に向上させることから始まったようである。つまり進化論では説明のつかない地球人類の頭脳の突然の変化がそれで、ホモサピエンスの頭脳の大きさは猿人や原人の一〇倍近くもあり、これはわずかに数百万年の間になされたのである。

ところで人類学者がいかにしてこのような実に見事な人間の頭脳が突然完成されたかを解明できないでいるように考古学者もまた絶えず一つの大きな

● 水星に他の天体との衝突のこん跡

● 今年3月29日、水星に接近し写真撮影に成功したマリナー10号が9月21日ふたたび接近し、写真500枚をカリフォルニア州パサデナのマリナー管制センターに送ってきた。NASAの天文学者ゴールト氏によれば、35億年前に直径100〜200キロの天体が秒速約5キロで衝突したこの跡が発見されたという。



疑問に悩まされている。というのは少なくとも六万年間、ホモサピエンスは今日のわれわれと同様充分に発達した頭脳を持っていたのかかわらず、他の野蛮な動物とほとんど変わらない状態で地球上に生活しており、そして紀元前八千年に突然文明が発生したのである。しかしなぜ紀元前六万年の人間は住まいを定着し、土地を耕やし、道具を使用し、共同体を形成することをなし得ず、紀元前八千年の人間にそれができたのか？

有名な天文学者カール・サガン博士はこの問いに対し次のように解答している。

「私はもし初期のスメル文明がその起源が人間であるとは思えないスメル人（アカディアンズ）の子孫によって築かれたものであるとするならば、関連した伝説を注意深く調べるべきだと考える。私は次のことが必ずしも大気圏外人とのコンタクトの例であると主張するわけではないが、しかし……」として、ここで博士ははっきりと、力を持った賢明で未知なる人々が船で空より降りてきてスメル人に農法や陶器製造、製鉄、織物やその他多くの事を教えたという伝説の要点を述べており、またその中でも意味ありげなのは彼らが地球の未開人に受胎させ地球人を更に知的にしたと言っている。

さてこの種の伝説が一つだけであれ

ば無視され闇に葬られたであろう。しかしわれわれは、しばしば金属の卵に乗って天空人が降りてきて彼らに文明の道を歩ませたという同様の伝説が地球上における初期文明の発祥地のすべてにみられるということを学者たちも認めている事実に対して眼を向けるべきである。

おそらくこれが第一のステップであろう。中にはわれわれの思いもつかないうステップもあっただろう。しかし自然の生長とは異なる大いなる歩みはまさに宇宙からの人々なくしては成し得なかったかもしれないし、あるいはその歩みはもっと遅れたかもしれないのだ。

輝く三つの月とは？

紀元前と紀元後初期頃の古代の記録の中にくり返し見られる一つの現象として天空における奇妙で特異な太陽（複数）とか月（複数）がある。今日これらの現象を推測すると、それらは現在われわれが目撃する円盤型と同種類の標準的な円盤であるように思われる。その典型的なレポートは紀元前一二二年、シリア上空に三つの特異な月が出現し赤々と輝いたというものである。ハロルド・ウィルキンズやその他のUFO研究者は古代における太陽または月くらいの大きさの輝く球体に

ついでの数多くの例を世間に紹介している。しかし古代人に太陽あるいは月という天体として報告されるには相当長い時間UFOは天空に漂い、輝いていなければならないかったであろう。UFO同乗者は故意にそうしたのではないだろうか？ つまり人々に天空を見続けさせて彼らに宇宙の外には他の太陽があり、月があり、惑星があるというヒントを彼らに与えるためである。

これは地球人類の科学技術革新以前の事であり、おそらくUFO同乗者はこのような方法で人類を宇宙へ先導するという役割の第二段階を果たしたのである。

しかしここで「なぜ宇宙人たちは当時（現在もだが）国王や皇帝や有力者達に会って相談し、彼らを偉大な計画の一員に、加えなかったのだろうか？」という疑問を感じる。もし彼らがわれわれに惑星連合体へ地球人を先導しているという想像を絶する宇宙的なプランの真実を知りたいと思うのなら、なぜ彼らは各国の首脳とコンタクトしないのだろうか。しかしながら過去から現在に到るまでいったい地球上の政府で人々に対して他のすぐれた銀河系政府が存在するというのを正直にしかも謙虚に明らかにできる政府はあったのだろうか？ 各国政府の代表者は辞職して、地球は惑星連合体に加盟するため単一の惑星体として一種の世

界連合を形成しなくてはならないだろう。国連の存在は一つの希望ではあるけれど、それも事実上は大国の権力の影響下にあることを考えると樂觀できない。

ニュージャージーのあるコンタクトイーがUFO同乗者から、一九三九年以来、各国政府の首脳陣に近づくため数多くの試みがなされたが結局何も得られなかった。「われわれはあなた方のリーダーを理解できません」と伝えられたという。そこでUFO同乗者は作戦を変え、草の根運動——つまり一般人に働きかけることにしたらしい。

なぜなら今日彼らが着陸の際コンタクトする人々は農夫やセールスマン、主婦等といういわゆる一般人で、そしてこのような人々こそが自分の眼で見た真実を確信を持って話すことができ、また広くその事件が知られたることになるからである。

飛行船型UFOの出現

第二のステップでは宇宙人はその多くの努力をわれわれの眼を天空に向けさせて、不思議な太陽や月についての物語を広めることに執ったと思われるが、この第三段階からわれわれは彼らがいかにして一種の広大なジェスチャーゲームという手段でわれわれを宇宙へ先導しようとしたかをありありと見

ることができる。

一八九六年から九七年にかけてよく発表されたように世界がUFOの目撃の大きな波の一つを体験した。しかしそれが今日見られるような葉巻型のUFOではなく飛行船型のものであったのはなぜだろうか。

目撃者の話やスケッチによると飛行船の大部分はつりかごか時々翼をつけていて、ツェッペリンや動力化されたガスバッグのような形をしているのである。けれどもそれらは決して地球人によって製作されたものではなかったと言える。というのは事実、ツェッペリンが時速二八・八キロメートルというスピードで五・六キロメートルほど飛行船を飛ばすことに成功したのは一九〇〇年の六月であつたし、イギリスのガスバッグが時速二四キロメートルで八〇キロメートル飛んだのは一九〇七年が初めてだったからである。しかも一八九七年のUFO飛行船はアメリカ中の上空を少なくとも時速一六〇〇キロメートルと見積られるスピードで飛び、際限なく長時間、市の上空に漂っていることができたのである。このこと一なぜ飛行船の型をしていなければならなかったか—についてUFO研究家間に二つの解答がある。一つは宇宙人はわれわれを驚かさないうようにカムフラージュとして似たような飛行船を作ったという答え、もう一つはわれ

われの科学技術を模倣することによってこれは何か地球製の装置であろうとわれわれを思わせ混乱を生じさせて宇宙人が地球を訪問していることが発覚し重大問題となることを防いだというものである。しかしこれらの考えを円盤飛来の目的は……という別の角度から見てみるとこうは言えないだろうか。つまり宇宙人はわれわれに宇宙を征服するための路上に到る次の必要な段階を単に示していたのである。

宇宙人の手による飛行船はまさに地球人の発明の才能に対して挑戦を示したのであり、ここまでおいでと手招きをしていたのだと考えられる。

奇妙な「幽霊飛行機」

しかし飛行船はもちろん宇宙征服のほんの踏み石であつた。

一九〇三年にわれわれの飛行機がデビューして以来、一九一四年の第一次大戦をきっかけとして開発されるまでは比較的ゆっくりとしたスペースが開発されていたが、一九〇九年、多くの場所で国籍不明で超スピードの飛行機が目撃された。われわれの飛行機は一九一〇年にやっと高度記録一・二七キロメートル、時速八・八キロメートル、飛行時間は一時間に達したに過ぎなかったのに、この不思議な飛行機は当時かなりの猛スピードでしかも一度

に何時間も飛行したのである。一体これが地球の科学技術の産物であつたのだろうか？

一九三二年の初期頃、巨大な数の翼のある飛行機がスカンジナビア地方の上空に出現した。それらは小さな町々の上空を飛び、巨大で灰色をしており、しばしば複数の（八つまで）プロペラエンジンをつけていて、しかも時折猛烈な暴風雪の中を飛行したと記述されている。今日でさえもわれわれの飛行機—プロペラ機であれ、ジェット機であれ—はそのような暴風雪や暴風雨は避けているのに、これら一九三二年から三三年の地球製とは思えない飛行機はいかなる悪天候に対しても動じなかったように思われる。

一九四六年のUFO群が幽霊ロケットと呼ばれたのと奇妙に一致するのだが、スウェーデンやノルウェーの人々そしてフィンランドの人々はこれらの無気味な機械を「幽霊飛行機」と呼び始めた。とにかく完全に信頼できる人々によるあまりにも多くの確証されたレポートがあるので、この巨大な灰色の飛行機が幽霊だと考えることはできない。それらは事実飛行機のような音をたてる機械であり、時々雪の上に着陸の跡を残したりもしたのである。しかしなぜ彼らは空飛ぶ円盤を使用せず、不細工なプロペラ動力の飛行機を採用したのだろうか。

前にも触れたようにそれらはいつもわれわれ地球製のものより技術的に進歩した飛行機であつたということに注意すべきである。つまりこの飛行機を操縦する宇宙人はふたたびわれわれの飛行機のデザインをより向上させようとデモンストレーションを行ない、われわれを扇動し、激励していたのではないだろうか。多くの人々によって目撃され世界中のニュースとなった新型の見事な飛行機の実在がわれわれの科学技術のスパークプラグとしての役割を果たし、地球製の飛行機を急速に改良させた原因となったことは否定できないように思われる。

この段階でわれわれがなし得たことは大きかった。空気の征服がそれである。

地球人に挑戦？

一九四六年、ちょうど第二次大戦後スカンジナビア地方ではふたたび北方上空に突然幽霊ロケット群が出現した。一九四六年六月一日、魚雷あるいは葉巻型の最初の幽霊ロケットがフィンランド上空を飛んだことが報道された。より長くしかも細くなったけれどそれらは「V2」型であつた。事実スウェーデンはただちにロシアがV2型のロケットを自国の領空を越えて北極海に着水させる実験を行なったとし

て告訴した。

しかしもちろん後に宇宙ロケットでは勝利を取めたロシアでさえも一九四六年に長さ一八三メートル、時速八〇〇〇キロメートルと見積られるこのような巨大なロケットを製造することはできなかった。

統一されたロケット型、そして、それらの尾底からしばしば炎を噴出したこと、消え去るまで数多くの垂直な発砲があったという事実はあたかも、「見てごらん下さい。V2型ロケットに改良を加えれば、あなた方も宇宙飛行を達成できるのです」と言っているかのようにではないだろうか。

円盤ブームの到来

一年後の一九四七年六月、有名なケネス・アーノルドの空飛ぶ円盤目撃がその円盤ブームの扉を開いた。そして米空軍やコンドン・レポートがそれらの目撃の事実を神話や沼地のガスに転化しようとした努力にもかかわらず実際UFOの目撃は今日まで続いているのである。

宇宙人は明らかに準備のもと、このUFO目撃の大量作戦に着手したように思える。というのは人々の興味が衰えるとUFOはふたたびちよつと姿をみせるかまたは大量にやって来るなどのようにそのタイミングは薄気味悪い

程である。

一九四七年よりUFOが世界の各地で目撃されるようになって以来、人々が宇宙における他の世界を考えるように刺激されたという事は明らかである。それらは地道ではあるが着実に人々の心に浸透し、広まっていたように思える。

初期のV-2やバンガード実験から始まって月への飛行に到るまで、われわれの宇宙への発射は米航空宇宙局が強くこれを否定しているにもかかわらずたえずUFOが接近し監視していると聞く。しかしわれわれの宇宙飛行に同伴するUFOの「厳格な番人」としてのプランは驚くには当たらない。これは人類を宇宙へ、つまり惑星連合体における議席へと先導するUFO平和隊の任務のクライマックスとも言うべきものではないだろうか。

惑星連合体への参加は可能か？

宇宙人たちが六段階のステップを通してわれわれを宇宙へ先導した現在、次のステップは一体何であろうか？

確かにわれわれは科学的にはいかなる時代よりも進歩を遂げているが、果たして精神的にはどうであろうか。いうまでもなく現在の地球の諸状態は金銭、権力、戦争、貪欲等に心を奪われ

て墮落しており高度な精神状態からはほど遠い。そしてもしわれわれが宇宙の惑星連合体に加盟できるとすれば、まず地球の完全平和を達成した上でのことであることは間違いない、そのためにはどうしても地球上の全人類が個人、国家等という狭い見地からではなくいわば「宇宙船・地球号」という全体をまず第一に考えるようなより高い精神的レベルに到達する必要があるだろう。

今日、公害問題、食糧危機等の問題が世界的に取り上げられることはその意味からも非常に喜ぶべきことだと言える。また昨今日本でもブームとなっている超能力とかESP、心霊に対する関心の高さは物質的文明に対する反動と考える向きもあるようだが、とにかく人間を考え直すという点では大いに意義深いと言える。

果たして一般人のこれらへの志向はUFO同乗者たちからの影響を受けたものか？これに対して私はいかなる答も見出せないのだが、もし次のステップとして宇宙人がわれわれを援助するとしたらこの精神面以外はないような気がする。

しかし彼らは何らかの方法でわれわれに對しその模範を示すことができたにしても精神的向上をめざし実践するのは地球人自身であり、結局地球の向上という問題も各人に依存しているこ

●好評発売中！ なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

フレッド・ステックリング／久保田八郎訳

¥550 円80

●テレパシー●生命の科学

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

¥350 円80

¥480 円80

文久書林

東京都文京区白山1-29-12
振替・東京2521 Tel. (813)2495

◎円盤飛来の真相と
人間の真の生き方を
示す名著3点。

とになる。その点でわれわれは決して宇宙人の援助を当てにすべきではなく、今後はわれわれ自身が輝かしい宇宙の惑星連合体の議席にふさわしい人間に生まれ変わらなくてはならないだろう。

UFOは確かにわれわれを宇宙へと導いており、地球が惑星連合体に参加する日をわれわれと同じ程に待ち望んでいるに違いない。そしてUFOに対する地球人の態度がいかなるものであっても彼らはわれわれを導くことを止めないだろう。

なぜなら広大な宇宙を航行する彼らは地球人もまた宇宙の英知である創造主のもとにあって彼らと兄弟であり、いつの日か惑星連合体に参加することを知っているからである。

仏典の中にもあった

天空人の地球来訪

志田行賢



読者にはちょっと信じられないこと
かもしれない。実は仏典、つまりお経
の中にも、天空人の地球来訪の記事が
はつきりと載っているということであ
る。

私が今いう仏典というのは、例の
“法華経”と呼ばれているもので、サ
ンスクリットでは、“サツダハルマ・
ブンダリキヤ・ストラ”で、正しくい
えば、“妙法・蓮華・経”ということ
になる。

この経文は前後二八の章に分かれて
いるが、天空人の来訪に関する記事は
最後のほうの数章に限られている。

今その第二章“妙音菩薩品”につ
いて解説してみようと思うのである。
サンスクリット流に言えば、“ガドガ
ダ・スヴァアラの章”である。

「お経ってのは、人が死んだとき葬式
で読むアレだろう？ それに宇宙人の
ことが書いてあるって……？ マサカ

……」と言いたいところだが実はそれ
がほんとうなのだ。
お経なんて縁起でもない——といっ
ては困るのだ。その中には地球人類の
未来をかけたどえらい宇宙旅行理論？
が書かれているから驚きである。

法華経というお経はたいへん不思議
な経文で、これが書かれたのは釈迦が
亡くなってから五〇〇年後あたりとい
われているが、この経文はあの釈迦自
身の直接の説法を集録したものではな
いらしい。おそらくその当時起こり始
めた大乘仏教の思想の中に、これも数
万年以前からのヒマラヤあたりの伝承
を神話化して、あたかも釈尊自身の説
法の集録であるかのような叙述法でも
って書かれているのがおもしろい。

天空人來訪説などは、数万年昔の、
宇宙人が自由に地球を来訪していた頃
の伝承を経典集録の際にその中に取り
入れて後世に伝えたものと私は解して
いる。

お経が成立したのはせいぜい今から
二五〇〇年前ではあるけれども、宇宙
人來訪に関する記事などは、数万年以
前の事実の記録とみて差支えはないと
思うのである。

そうした古代における地球上の事件
の記録であると同時に、二一世紀にお
ける地球人の未来に対しても、ある重
要な示唆を与えるものが秘められてい
る。この宇宙人來訪の記録などはその

……」

最たるものであると思う。

少々ひねくった言い方かも知れないが、死んだ人にこのお経をあげてやるのも、あなたの死後にはこんなにもすばらしいあの世の世界があるんですよと教えてあげていることにもなる。というのは、人はだれでも死んだ後はまた必ずどこかの天体に生まれ変わらなければならぬようにできているからである。

さて、話を本筋にもどして、経文はご存じのとおり漢文で、極めて難解にできているので、ここでは現代語でわかり易く書き直したが、もちろん内容の筋については決して脱線していませんつもりである。

浄光莊嚴国とは？

——ガンジス河の砂の数にも等しい無数の天体の彼方に、ヴァイローチャナ・ラシュミ・プラティマンディター（浄光によって形成された世界）という名の天体がある。

そこには、カマラダラ・ヴィマラ・ナクシャトラ・ラージャ・サンクスマ・アビジュニヤという偉大なる指導者がいて、非常に長い寿命と崇高な精神をもつ多くの人々を統治していた。

ここで少し注釈を加えておくと、この浄光莊嚴国（**サハール**）とはかぎる、

装飾する、といった意味であるが、今は「形成される」という意味に解した方が適当」というのは、おそらく、光波に近いような高度の振動率の確保されている世界と解されるし、したがって、その住民が極めて高度の科学と精神をもち、驚くほどの長寿を保っていることも理解される。

——さて、そのヴァイローチャナ・ラシュミ・プラティマンディター世界にガダ・スヴァアラという偉大な人間がいた。

彼は、数限りない程の美德を備え、宇宙の真理を学び、すばらしい「瞑想法」を会得していた。たとえばあらゆる生物の言語を解する瞑想（つまりテレパシー）、宇宙のどこにでも自由自在に行くことのできる瞑想法（テレポーターション）、月、太陽の運行によって宇宙の動きを知る瞑想法など、その会得する瞑想法はガンジス河の砂の数にも等しいものだった。

ここで、「瞑想法」と簡単に書いたが、仏典にはこれを「三昧」といっている。

三昧は、単なる精神統一といったものではなく、ある種の「変身の法」ともいえるべきものだろうか。

一種の瞑想によって、宇宙の英知、または生命エネルギーと一体化し得る、いわば身体振動率の変換法なのである。

地球上からのテレパシー受信

——この地球世界の偉大な導師であるシャーキヤ・ムニは、このヴァイローチャナ・ラシュミ・プラティマンディター世界の偉大な修行者ガダ・スヴァアラにテレパシーを送った。

かの国でテレパシーを受信したガダ・スヴァアラは、座席から立ち上がって、かの偉大な統治者カマラダラに向かってこう言うのである。

「導師よ。私はかの地球世界における偉大なる指導者、シャーキヤ・ムニに見えるために、またかの国の多くの修行者たち（名は略す）に見えするためにサハール世界（地球）に行きたいと思えます」

この統治者は、この高潔な修行者に向かってこのように語るのである。

「良き息子よ。汝はかのサハール世界に赴いたとき、そこを軽く見て卑しむ心を起こしてはならぬ。息子よ、かの世界は土地もデコボコで高低が多い上に、不浄なものが充ち満ちている。

しかも、その上に住んでいる人間たちも身体が短小で精神も極めて幼稚である。

息子よ。汝の身体もわしの身体も実に堂々としてしかも光り輝いている。汝は容姿まことに端麗、眉目秀麗、あらゆる福相もそなえている。

だからといって息子よ。汝はかのサハール世界に行っても、指導者や修行者たちに対して決して軽蔑の心を持つてはいけない」

ガダ・スヴァアラは、この師のこゝとばに対して次のように答える。

「師よ。私は師のご命令どおりにいたしましう。師よ、私は宇宙の偉大な英知と力、そして師の加護のもとにかの世界に参りましよう」

この師弟の問答はたいへん興味深いものがある。まず考えられるのはヴァイローチャナと呼ばれる天体と地球世界との振動率（次元）の大きな差である。天体そのものを形成している地質、それに地形のちがいがまずあげられているし、更にそこに住んでいる人類の身長、容姿、寿命、精神状態にいたるまで、あらゆる面で二つの世界はくらべものにならない決定的な差があるようにみえるのである。

つまりそれぞれの天体固有の振動率がまるで違うということになろうか。わかりやすくいえば「次元」が違うということである。

振動率を降下させる

この指導者カマラダラが修行者ガダ・スヴァアラに言った訓戒の意味は高度の天体から低度の天体に降下する場合は、その固有の身体振動率のまま

では不可能で、あくまでも来訪する天体の振動率にその身体の振動を低下させて合わせなければならぬという、宇宙間の鉄則を表わしたものと考えられるのではないだろうか。

いわゆる「郷に入っては郷に従え」式に地球に来訪するには地球固有の振動率にその身を同調させなければならぬということである。

「汝、往きて彼の国を軽ろしめて下劣の想を生ずることなかれ」というかの統治者カマラダラの訓誡は如実にそのことを語っているものというべきではないだろうか。

ガドガダ・スヴァアラ 身体消滅す

偉大なる修行者、ガドガダ・スヴァアラは、たちまちその場で例の瞑想にはいった。ガドガダ・スヴァアラが瞑想にはいったとたん、不思議な現象がこのサハール世界に起こった。

シャールキヤ・ムニが法を説くグリッドゥラ・クータ山の近くに八万四千の数の「蓮華」が現われた。それらの蓮華は黄金の茎、白銀の葉をもち、花はダイヤモンドのようであった。

このところも多少の説明が必要であらう。例によって仏典では不可思議な現象、奇瑞といったものを蓮華をもって象徴するのが通例になっている。

この場合もご多分にもれず、八万四千の蓮華の座というのはおそらく地球来訪のための地ならしとして、何らかの科学的操作がなされたものと思われる。

たとえばそれが無数の偵察用円盤の飛来であるかもしれないし、または大型母船の飛来であったかもしれない。そういえば金製の茎、銀の葉、ダイヤモンドの台といった表現も、何か円盤そのものを思わせる節もないではない。

ここで地上の人間たちのそれを目撃した驚きの様が経文にものせられている。

「世尊よ。これ何の因縁にてこの奇瑞を現わすや」といったぐあいである。

波動帯に共振して飛来

——ここでのヴァイローチャナ世界では、修行者ガドガダ・スヴァアラの姿は忽然として消滅した。しかも彼一人だけではなく、彼をとりまく八万四千の修行者たちも同時に消滅したのである。

彼らが飛来するとき通過した宇宙空間や天体はそれぞれ六通りの振動によって震動し、またことごとく七宝の蓮華を降らし、百千の天衆がだれも演奏したわけでもないのに自然に鳴った。

そして七宝づくりの塔に乗り、地上

から七ターラの⁽⁸⁾高さの上空にやってきた。

このあたりの叙述は極めて興味深いものがある。

まず第一に、彼ガドガダ・スヴァアラの身体が忽然と消滅したということである。

高度な宇宙人は自分の肉体をある方法によって分子に解体することができるといふ説があるが、彼もおそらくその一人であらう。

宇宙空間を移動するいわゆるテレポーションの原理は、地球上のわれわれにはまったく未知の領域に属するものであるが、テレポーションは、一つの点から他の点へ想念のスピードでふたたび現われる能力のことだといわれている。

つまり、まず強烈な心の力で「肉体であるものは即ち精神である」と確認する。その瞬間肉体の原子は分解し、一瞬にして見えない影の体・電磁場によって取り囲まれ、瞬時にして目的地に達する。

そのとき更に心の力で、電磁場に包まれた見えないからだに具体化するよう命令する。その瞬間にその世界固有のバイブレーションに相当した表現形式、つまり地球人と同じ姿形をとって現われる、といった順序になっているようだ。

またガドガダ・スヴァアラが飛来した

とき通った世界がそれぞれ震動し、七宝の蓮華を降らし、その上、百千の天鼓が自然に鳴った、という象徴法もなかなか巧妙である。

これは、天体間の旅行をする場合ある種の波動帯に共振、同調することの意味するものだと思ふのである。宇宙間を移動する際には、宇宙間に無数に存在する波動帯のある種のものに共振させることによって、光速にも近いようなスピードで移動することができる。

いわゆるある種の電磁波の波に乗るのだと考えればよいだろう。

だれも演奏しないのに天の鼓が自然にとどろいたとか、宇宙が震動したとかと経文でいっているものは、おそらく電磁波の共振をさしたものと考えるとよいのではないだろうか。

そのすばらしい光景はあたかも「七宝の蓮華を降らした」ような壮観であったことも容易にうなずけるものがあるのではないか。

こう考えてくると、お経の文句などというものは極めて科学的で今日的なものだといってもよい。

サハール世界に到着

——彼ガドガダ・スヴァアラはこうして七宝づくりの塔に上がり、大勢の宇宙天使たちと共に、グリッドゥラ・ク

タ山の上空七ターラのところで停止し、やがて塔から降りて地上の偉大な指導者シャーキャ・ムニのもとに近づいた。近づいたのち、彼はシャーキャ・ムニに対して見事な頸飾を献上したのである――。

ところでのガドガダ・スヴァラを始め、来訪した宇宙天使を見れば、その容貌は得もいわれぬほどすばらしいものであったという。

彼らの眼はあたかも青蓮華の葉のように、身は金色に輝き、しかも彼の筋肉はナラヤナのようにひきしまり、その端正さといったらたえようもないものであった。

今でもしばしば宇宙人とのコンタクト例に見るように、彼らはおそらく紺碧の瞳を持ち、肌は輝くばかりなめらかで、その上一種の光輝をもつ衣服をまとっていたものと思われる。その色はやはり濃いオレンジに近いものだったろう。

さてここでのガドガダ・スヴァラは、自分の故国であるヴァイローチャナ・ラシュミ・プラティマンデイター世界の統治者、カマラダ王からのメッセージを、サハー世界の指導者シャーキャ・ムニに伝えるのである。

「尊師よ。わが師カマラダは、あなたがサハー世界において健康で起居の安らかであるかどうかをたいへん気にしております。



そして、サハー世界の人々が憎悪にかられたり、嫉妬に狂ったり、悪意をもったり、父母の恩を忘れたり、感情をうまくコントロールする方法を失ったりしてはいないでしょうか。

わが師はそれらをたいへん気にかけております」

このようにガドガダ・スヴァアラはシャーキャ・ムニに伝えた。

ガドガダ・スヴァアラの変身

——さてこの偉大な修行者であるガドガダ・スヴァアラは、今こうしてサハー世界の人々と同じように肉体をもつてここにいるように見えるけれども、実は彼は変幻自在の能力をもつものである。

あるときはもろもろの神々の姿を現わしたり、大將軍や大臣の姿をとったりするかと思えば時には僧になり、あるいは長者、女性、童男、童女になるなど数えきれないほどの姿を現わして時と所に応じて自由自在に宇宙の英知を示す能力をもつ超能力者である。

したがってこのサハー世界においても、彼ガドガダ・スヴァアラはこのように無数に変化して正しい宇宙の英知を説くのである。

そこで、やはり同じくサハー世界の修行者であるパドマ・シュリ⁽¹⁰⁾が、師シャーキャ・ムニに問う。

「導師よ。この偉大な修行者ガドガダ・スヴァアラはまことに尊い美徳の持主でありましょう。師よ、かのガドガダ・スヴァアラは瞑想による変身法によってあらゆるところに変幻し、世に存在する者を導いたということですが、その瞑想とはいかなるものでしょうか」

この問いに対し師シャーキャ・ムニはこのように答えた。

「息子よ、その瞑想とはサルヴァ・ルーパ・サンダルシアナ⁽¹¹⁾という瞑想なのだ。この瞑想に専念してガドガダ・スヴァアラは、この宇宙の中で計り知れぬ多くの人々に救いを与えたのである」

地球人に偉大な感化を与える

こうして、ヴァイローチャナ・ラジュミ・プラティマンディター⁽¹²⁾世界の人間ガドガダ・スヴァアラがサハー世界、つまり地球を来訪中に、彼の指導によって、サルヴァ・ルーパ・サンダルシアナ⁽¹³⁾という瞑想法を体得した人々の数は到底数えきれぬものではなかったのである。

サルヴァ・ルーパ・サンダルシアナ⁽¹⁴⁾という瞑想は、漢語では「現一切色身三昧⁽¹⁵⁾」と訳されており、これはある種の変身の術といってもよいだろう。

宇宙に存在する物質は種々雑多ではあるが、さて一旦その根源にはいれば元素であり分子である。それらの分子

は、地、水、火、風の四大原素、つまり、「宇宙の四大基礎エネルギー」によってさまざまな形態をとる。

四大基礎エネルギーのコントロールによって、固体を液体に変えることもできれば、気体を固体に変身させることも不可能ではない。

人間の肉体にしても、將軍から尼僧に変身することも乞食から国王に変化することもあながち不可能ではない。

要は、四大基礎エネルギーのコントロール法を会得するか否かによって決まるわけだ。

「現一切色身三昧」と呼ばれるサルヴァ・ルーパ・サンダルシアナこそ、この宇宙エネルギーのコントロール法にほかならないのではあるまいか？

宇宙天使、本国に還る

こうして偉大な修行者ガドガダ・スヴァアラはサハー世界に來訪して多くの功績を残してまた本国、プラティマンディター⁽¹⁶⁾世界へと還っていった。

そのときもやはりサハー世界に降下するるときと同じような奇異な現象が空間に起こった。

本国に着いたガドガダ・スヴァアラはかの国の偉大な統治者カマラダラ・ヴァイマラ・ラージャ・サンクスマタ・アビジュニヤ王⁽¹⁷⁾に対してサハー世界での己れの行動を逐一報告したのである。

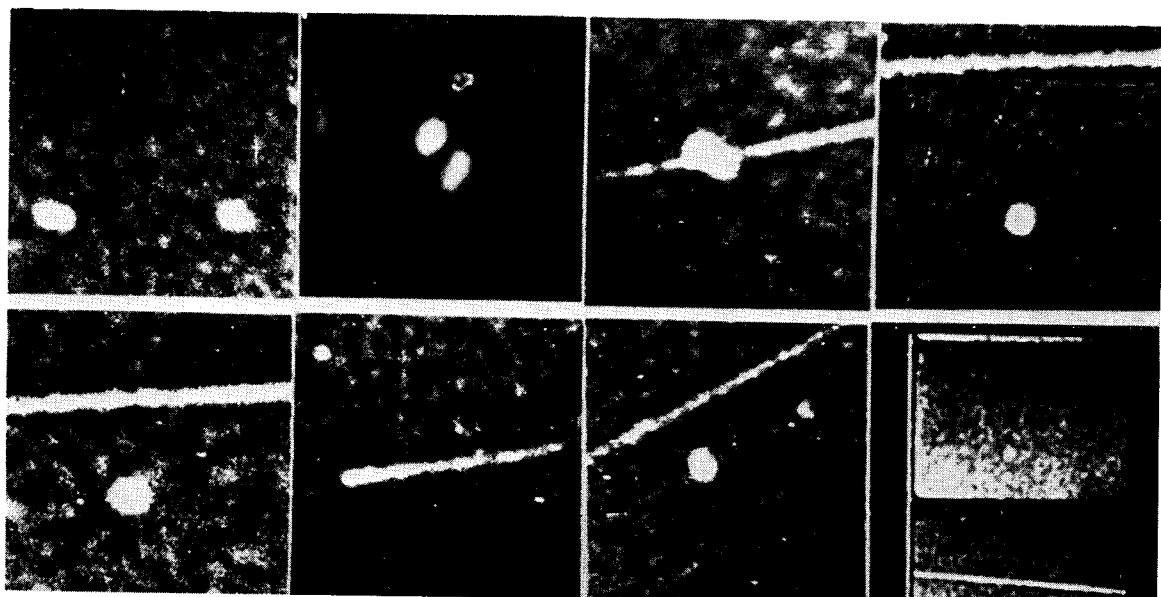
サッダルマ・ブンダリキヤ・ストラ（妙法蓮華經）の第二三、「ガドガダ・スヴァアラの章」によると、太古における宇宙人の地球来訪の有様が手にとるように理解されるのである。

高度に進化した宇宙の先輩たちは、太古からわが地球にたびたびこうして来訪を行っていたものと思われる。これら仏典の記録の中には、現代の円盤理論でもふれていないと思われる箇所が多く見受けられるのである。

肉体の消滅、宇宙空間の電磁場の波に乗る飛行法、テレポーテーションの原理、そしてある種の瞑想法（三昧）による変身の術、テレパシー問題などいずれも興味津々たるものがあると同時に将来のこの種の研究に対して重大なインスピレーションを与えるものをもっていることに気がつくのである。

(注) 漢訳

- (1) 淨光莊嚴國
- (2) 淨華宿王智如來
- (3) 妙音菩薩
- (4) 恒河
- (5) 釈迦牟尼如來
- (6) 娑婆世界
- (7) 耆闍崛山
- (8) 七多羅樹
- (9) 那羅延
- (10) 華嚴菩薩
- (11) 現一切色身三昧



大気圏内のUFOの速度

アイリーン・グランチ

筆者はブラジルの有名なUFO
研究家オスカー・アサントレス博士
と長く親交のある円盤研究家

この映画がほんものであることを示す証拠はたくさんある。ウレア地区の各テレビ局の放送が一時中断したこともあるし、テレビ局の職員二人は、何百人にもものぼる目撃者たちから現場に

のを、だれがほしがるだろう。二個の光が四個に分裂するところがある。それだけだ。こんなつまらないものを、だれがほしがるだろう。

一分三〇秒にわたって丸い光がふくれたり分裂したり、また一つになったりするだけのこの映画を見て、これが価値あるコレクションだと思ふ人は、当時は一人もいなかった。一方所だけ二個の光が四個に分裂するところがある。それだけだ。こんなつまらないものを、だれがほしがるだろう。

フライング・ソーサー・レビエール誌一九七二年二月号(八、九、一二頁)掲載のバートルド・E・シュワルツ博士の記事中の写真を見て私は、フェルナンド・クレイト・ヌネス・ペレイラ所有の映画から取った写真をすぐに思い出した。実によく似ているのである。写真を見て彼は私に同意して、フライング・ソーサー・レビエールに自分の写真のことを報告することにした。

呼び出された。このことは翌日の新聞が報じたとおりである。目撃者の一人セルジオ・ラウル・デ・バロス・レジナ教授はインタビュに答えて、最初是一個の光点が水平に空を横ぎり、つづいて二個が、さらにまた二個の光点が超高速でまずスマレ(コルコヴァド・クリストの付近)のほうへ、それからレブロン郊外めざして飛んだと語った。彼がふたたびスマレの付近で巨大な閃光を見たのはもう真夜中に近かった。これらはすべて、リオデジャネイロにあってコルコヴァドのほうに面している彼のアパートの窓から目撃されたものである。

この短編UFO映画は、意外な新事実を明らかにすることになった。フェルナンド・クレイトの研究によれば、この映画は、地球大気中でUFOが達しうる速度を解明するための重要な記録なのである。

このフィルムを検査したところ、数百人の目撃者同様、カメラマンも明るく輝く物体を常に画面の中心に来るよううにカメラを動かしていたことが明らかになった。フィルムをゆっくりまわして個々のコマを調べると、他の光点が画面にはいつてくる様子もわかってきた。

使用カメラはベル・ハウエルだが、製造年代はわからない。オルティス・ルビオが死亡しているので実際のフィ

ルム速度も不明だが、一六分の一秒(二四分の一秒だったかもしれない)くらいと思われる。したがって、個々のコマに示された物体の運動は、一六分の一秒間に行なわれたことになる。

つまり、一つのコマに新しく出現した光体が次のコマにもその次のコマにも姿を見せていないとすれば、その移動は一六分の一秒(か、または二四分の一秒)以下というわずかな時間で行なわれたことを示す。

映画は、夜のメサ・ド・インペラドールを背景に撮影された。メサ・ド・インペラドールは名高いリオデジャネイロのコルコヴァードとベドラ・ダ・ガヴェアの間にある、海拔約七〇〇メートルの高さである。UFOはさらにその上三〇〇メートルの高度を飛行していた。物体とカメラとの距離は約三〇〇メートルで、カメラの望遠レンズの視野は約一二〇メートルである。一秒間に一六コマの写真が撮影されるわけだが、物体が視野を横切るにはただ一コマの写真が撮影される時間しかかかっていない。大きな光点は常に画面中央に来るよう、カメラマンがカメラを操作している。したがって、UFOが一コマのフィルムを横切る速度は最低時速六九、一二〇キロメートルということになるが、これは控え目な推定なのである。すべてのコマを同様なやりかたで検査してみても結果は

同じだった。作業計画のためカメラからUFOまでの距離を三〇〇〇メートルと推定したが、実際は四〇〇〇メートルだったかもしれない。その場合には時速は九二、一六〇キロメートルということになる。一九五七年に地球大気中でこのような高速が出せるとは考えも及ばないではないか。

フェルナンド・クレイト・ヌネス・ペレイラは最近、このフィルムを焼増してブラジル空軍に送付した。彼によるとその研究結果は、科学にとって計りしれぬ価値があるという。そこで彼は何らかの研究成果が公表されることを期待して、今では、世界中がこの科学者でも自由にプリントできるように、このフィルムを公開している。

一九七一年一月、タクソンのアリゾナ大学でAPPROがUFOシンポジウムを開いたとき、私もこの映画のプリントを持参して参加し、ローレンゼン宅で行なわれたシンポジウムに出席した科学者らに上映してみせた。だがこのプリントはただちにブラジルに持ち帰ってクレイトに返すように指示されていたので、現地で焼増する時間的余裕もなく、それ以上つっこんだ研究を行なうひまもなかったのである。以上、この問題に対するフェルナンド・クレイトの熱の入れたたも、さらに注意深い研究が必要であることもおわかりいただけたことと思う。

私人としては、もっと別の角度からこの映画に関心を寄せている。パトリック・シュワルツ博士の写真とよく似ているので驚いたことは最初にお話ししたとおりである。

自分の主張を立証するため私は、F・クレイト・ヌネスがフライング・ソーサー・レビューに提供した引伸し写真のいくつかに番号をつけてみた。そこで第一番と二番は第二図と、三、

四、五番は第四図と六図(すべて同誌一九七二年一月二月号八ページ)と比較できることになる。二個ならんだ光点は明らかに、第四図と六図の、細胞分裂のように重なりあって今にも割れそうな一個の光点と同種のものだ。それぞれ輪郭と形もそうである。シュワルツ博士の文章を引用しよう。「……空は、白っぽいオレンジ色に輝く円盤が一個、つづいて二個と不意に出現したため、あかあかと照らしだされた。怪光は脈をうつように形と色を変化させ、一つにとけあい、やがてまた二つに分かれた……」

クレイトの写真のうち、六番と七番に見られる数個の光点は、シュワルツ博士の記事の第三図、一一図、一二図と同様である。小さな光点も見えるけれども、もっと重要なのは、第一一、一二図のほとんど真直な線であり、これはクレイトの引伸し写真第四、五、六、七番の直線と対応するものだ。四

コマの連続写真(八番)も同様だ。これが飛行中の物体をあらわすものであることはまず間違いない。もう一度シュワルツ博士を引用するが「……フィルムを一コマ一コマ検討すると、青色の小円盤や丸い物体が見られる……これに注意していただきたい。というのは、スローモーション映画のように光をチラつかせて遠慮がちに出現するこれらの物体は……」

しかしながら、もっとも目立った類似点は、二つならんだ光点が二組、数コマにわたって見える四本のネガ・フィルムの中にある。これらのフィルムから四〇枚のステール写真を作ってシュワルツ博士やステラ・ランシングのフィルムと比較したところ、いっそう強力な証拠が発見された。だがこれももっと科学的に研究する必要がある。

だが、私のような素人にとって、もっと重要な意味を持つよう見え、また想像力を刺激するのは、撮影された場所も時間も大変に相違したこれら二本の映画がかくもよく似かよっているということである。

この事実こそはやがて、私たちの周囲にあらながら、まだだからも気づかれていない大きな大きな類似点の発見へと、私たちをみちびくものではないだろうか。

狛江市で 撮影された UFO



オレンジ色の光体が上昇して、やがて消滅…
別な目撃証人も出現して存在が確認された。

今年九月三〇日の夜九時三〇分頃、東京都狛江市に住む会社員、宮嶋一雄氏（二五歳）が同市内の多摩川土手で突如出現したUFOを他の数名の人とともに目撃し、即座に連続撮影に成功した。同時目撃者の証言もあり、同氏の数度にわたる来社の際の説明などから判断して、真びょう性の高いものと思われる。以下は同氏の手記である。

「九月三〇日の月見の夜、私と同行の高田政美さん（女性・会社員）と月面観測の目的で、多摩川の土手まで車で反赤を運び、観測を始めようと反赤をセッティングしていたところ、ほぼ東の方向、仰角十3°ぐらいの目前の民家『写真』の屋根越しにUFOを発見。色は明るいオレンジ色、強く発光していて、一目で星とは違うことが理解されたが、動いていないのじばらく見えていた。よく見ると横長の光体に見えるので、反赤のガイドスコープ三〇倍で見ると、「へ」の字に三つの光体が目についた（図1）。そこであわてて①の写真を撮った（f2、一五分の一秒）。

第1の写真を撮った直後より光体は急に上昇を始め、高度（見かけの）を上げて、わずかに右にカーブをしながら接近してくる。そこで②の写真を撮る。

次の写真を撮るまでの間に反赤の本

体一六〇倍を向けたが、あわてていたせいか視界に入れることができず、失敗。あきらめてすぐに③、④の写真を撮る。その後シャッターをバルブにして六秒ほど光跡写真を二枚取る（⑤、⑥）。一枚は失敗（⑤）。この間、高田さんと話をしながら眼視でも観測。かなり接近してきて大きく見えてきた。そこで⑥と⑦の写真を撮る。そこで再度反赤の接眼レンズを九ミリから二五ミリに変えて四〇倍にし、ガイドスコープで追いつながら観測。次の図2のように見えた。

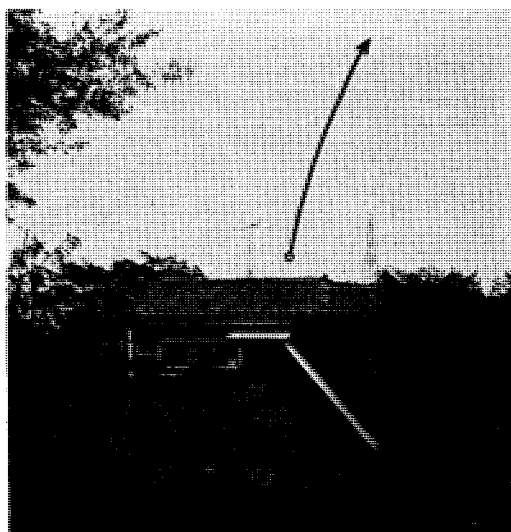
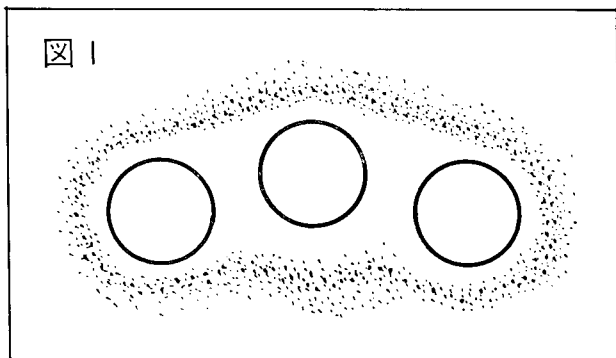
正直に申し上げて、このときは光体の状態からもしや航空機がエンジン音を下げて飛んでいるのではないかと考えたが、反赤の四〇倍で見える場合、航空機ならば、窓や形も見えるはずなので、半分信じて半分「あるいは」と思うような心理状態だった。その間に川崎方面に飛び去ろうとするので⑧の写真を撮る。このときには、というよりわれわれの上空に来たときには最初のような光度はなくなり、全体に消えかかった。電気のタマのようであった。その後⑨の写真を撮ったが、完全に消えてしまって写っていない」

●撮影者 宮嶋一雄（二五） テイジン

・タイム社員

●住所 東京都狛江市岩戸四八一

図 1

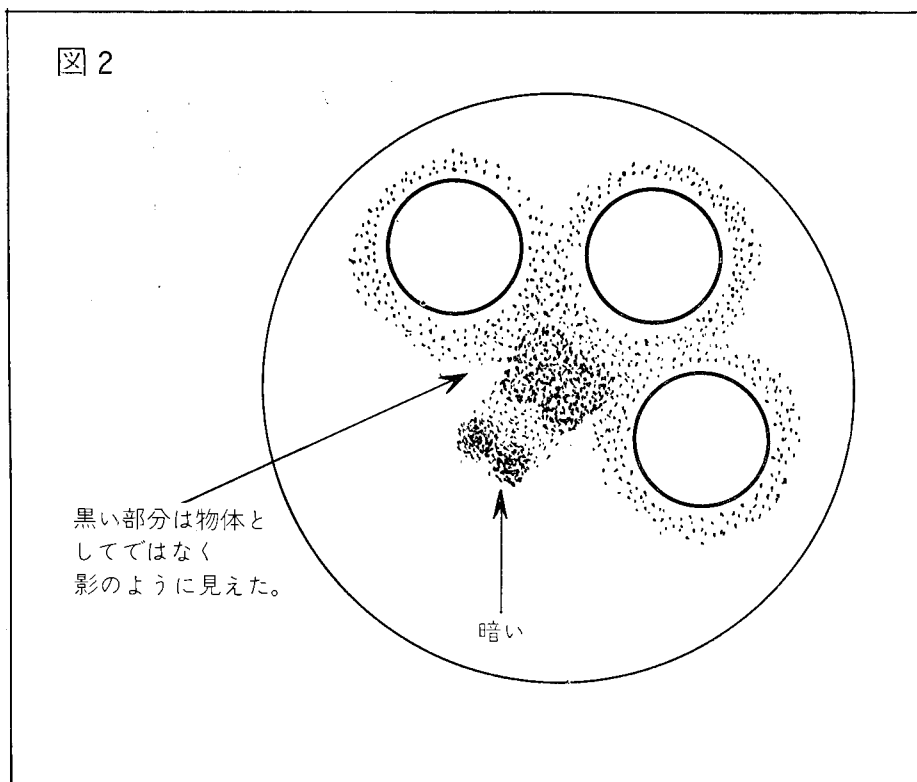


●撮影現場よりUFOの出現位置を示す写真。実際にはもう少し家に接近して撮影したので、右側の塔は樹木の陰にかくれて写っていない。矢印がUFOの航跡。

- 同時目撃者 高田政美ほか氏名不詳の高校生二名
- 目撃地 狛江市内、猪方地区の土手
- 時刻 九月三〇日午後九時三〇分頃から四十五分頃まで
- 望遠鏡 ビクセン100mm反赤・F1000mm・40倍・160倍・ガイド用フアインダー30mm・30倍
- カメラ ニコンF・ニッコール50mm F1.2・開放・ $\frac{1}{16}$ 秒・連続光跡は約6秒・ネオパンSSS
- 天候 快晴、無風

なお、当日現場付近で工学院大学電子計算センター職員米沢宜美さんも同

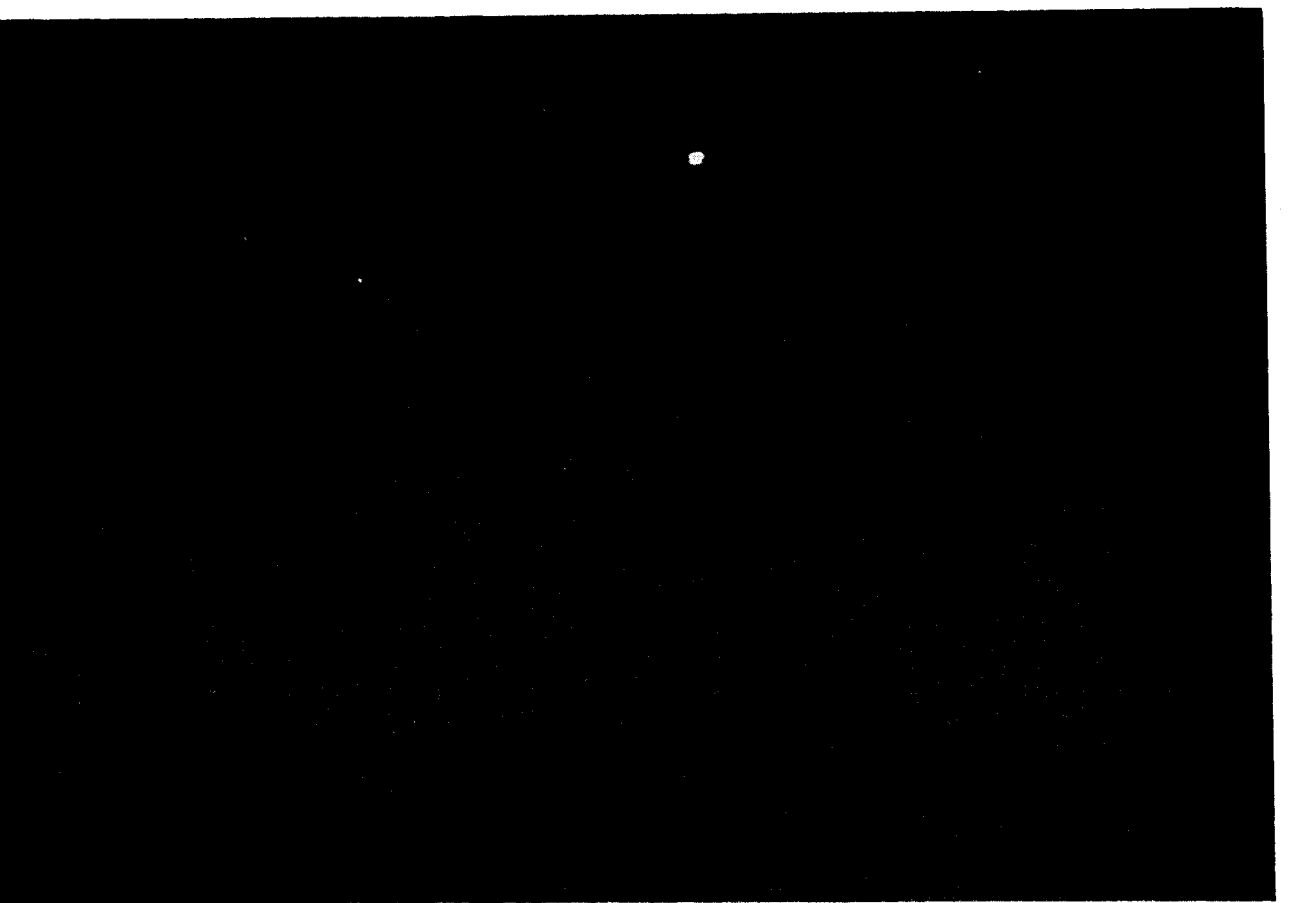
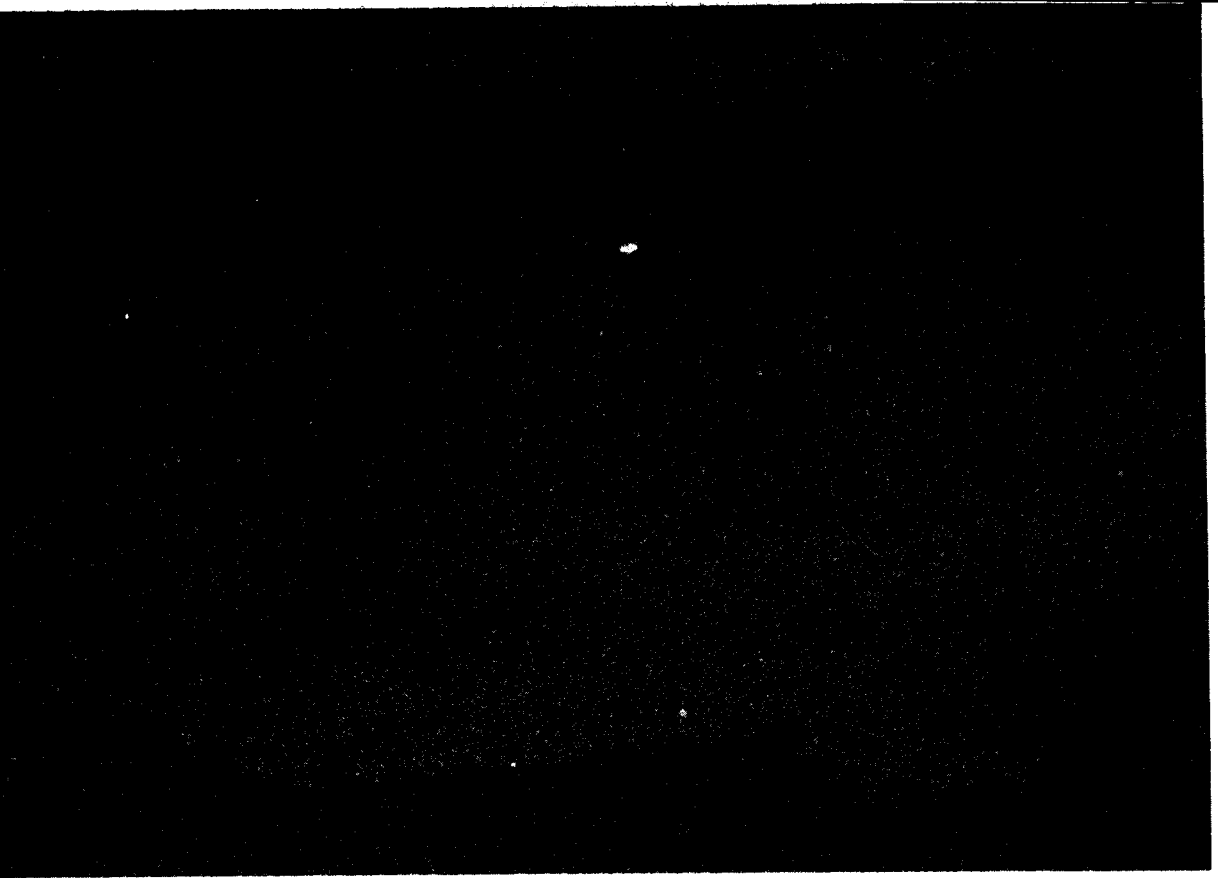
図 2



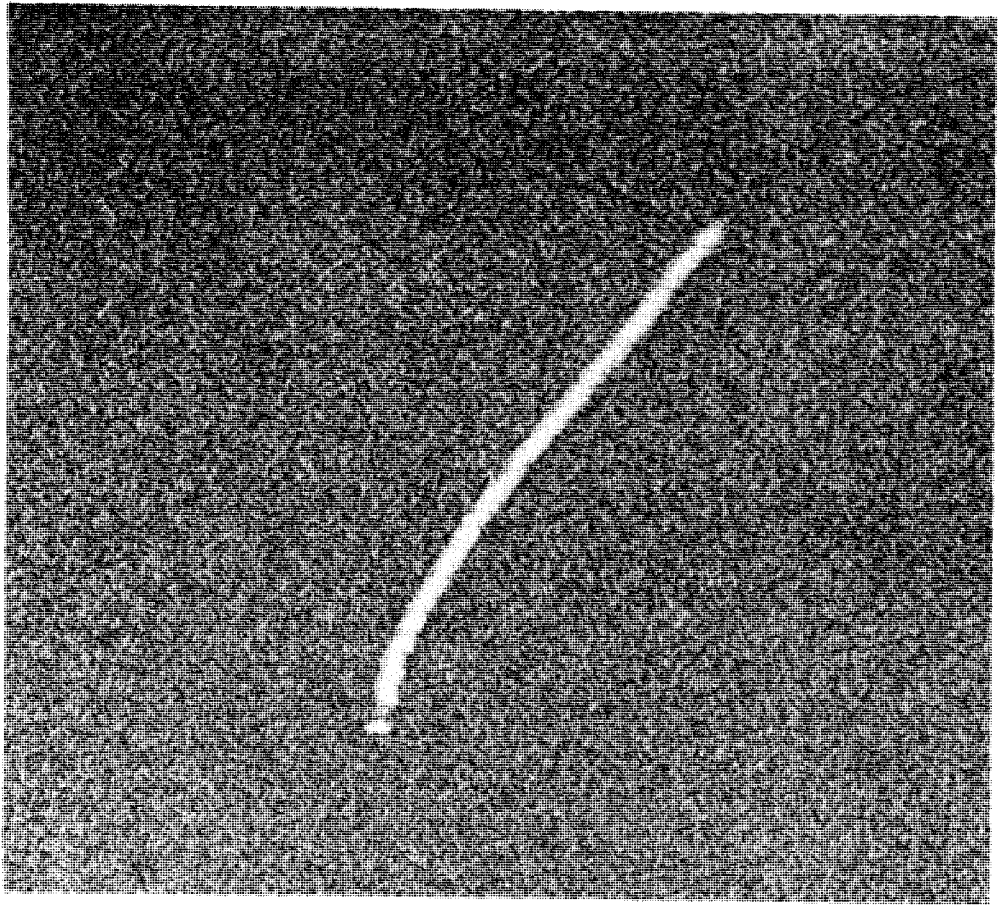
一のUFOと思われる光体を目撃したことが後日判明し、その証言を録音したテープを宮嶋氏を通じて本社へ送られた。

この証言は詳細をきわめたもので、目撃内容に関して科学的客観的に微に入り細をうがった説明がしてあり、貴重な資料として役立った。

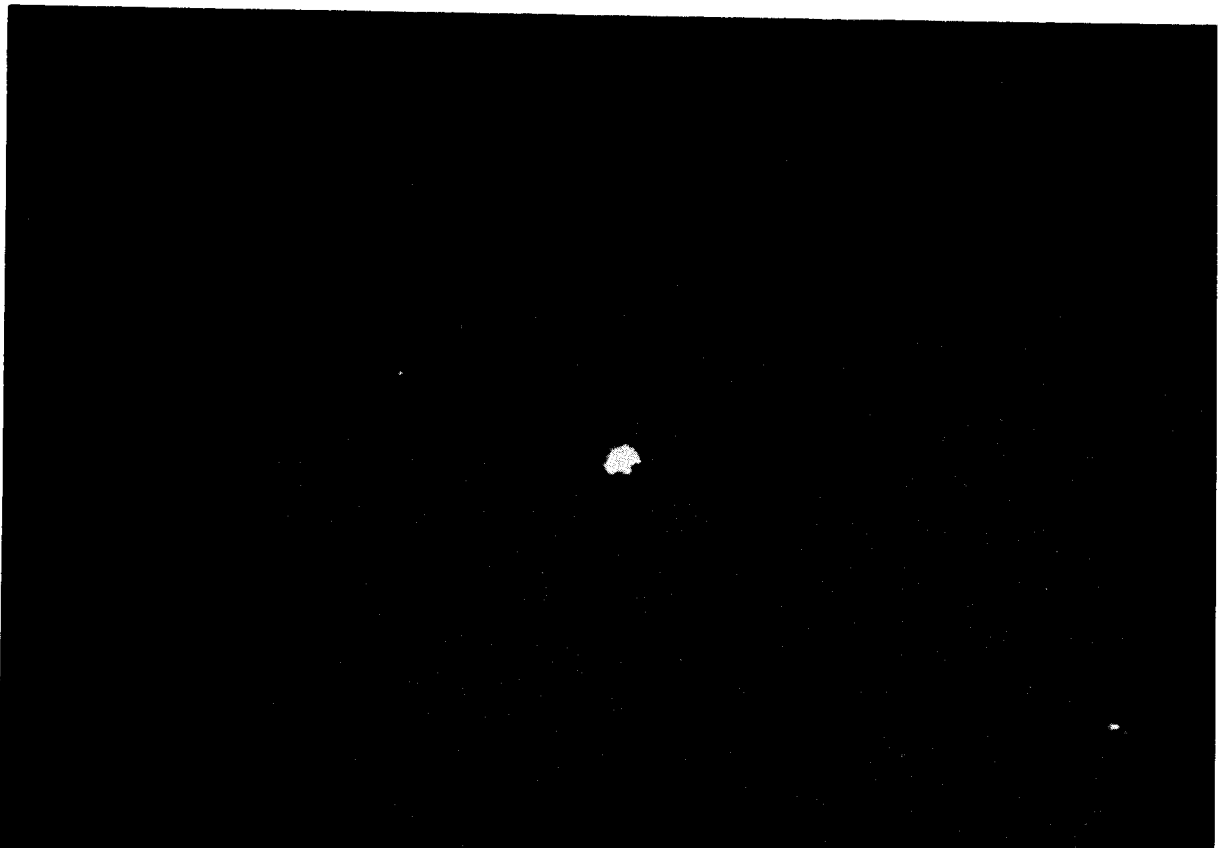


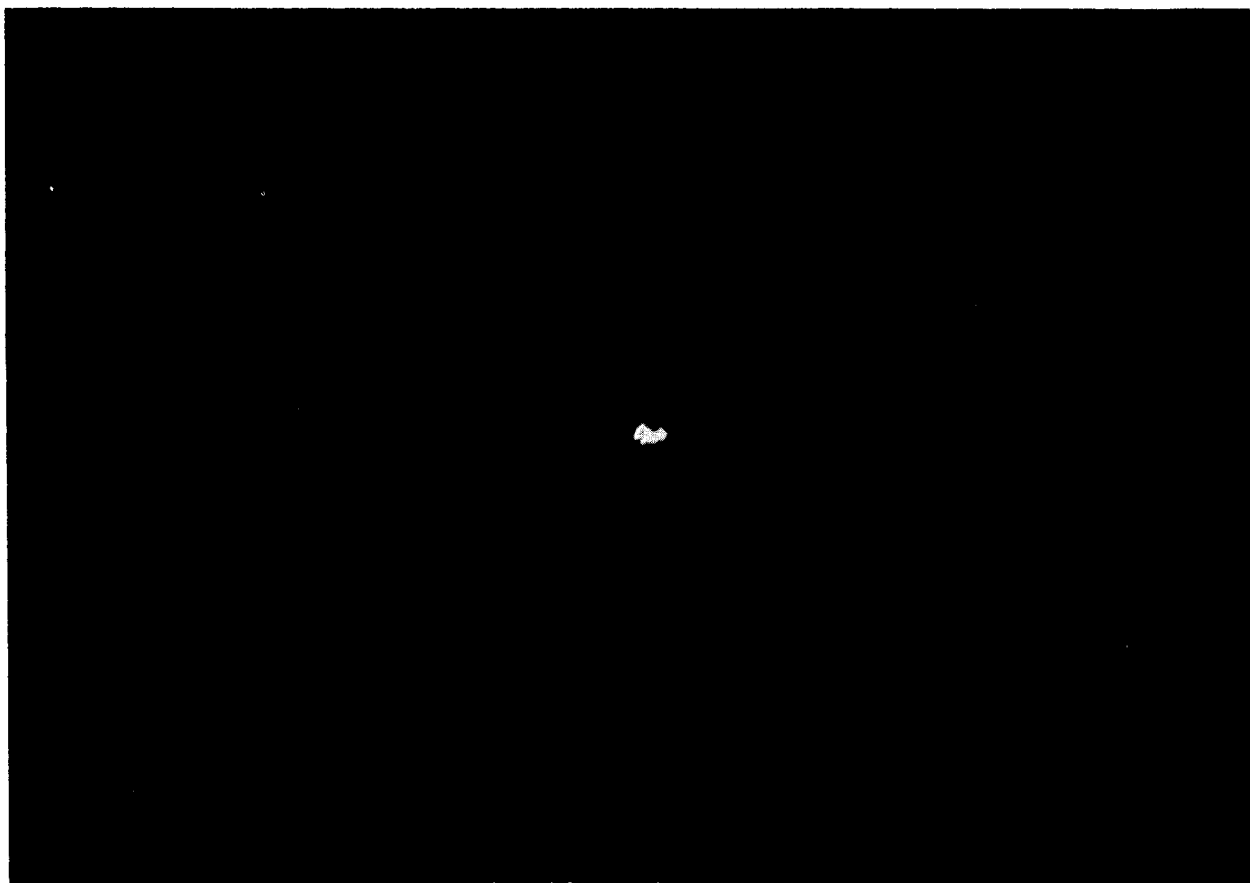


⑤



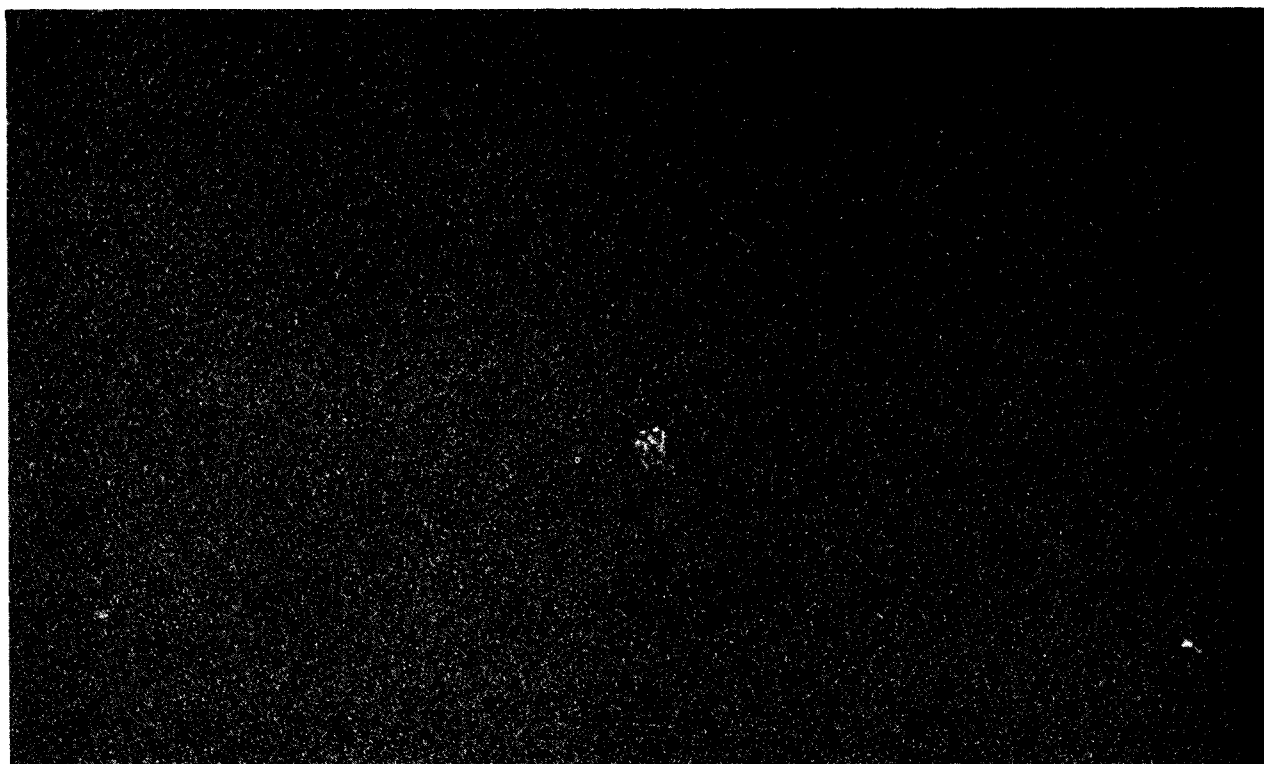
⑥





⑦

⑧ 消滅直前



テレビカメラマンが鮮明な UFO カラー写真撮影

●フランスでテレビ放送、反響を呼ぶ

「世界でこれまで見つかつた UFO (未確認飛行物体) のもっともよいドキュメント」と専門家の科学者が折紙をつけた「空飛ぶ円盤」のカラーフィルムがフランスで撮影、放映された。

ORTF (仏国営テレビ) のカメラマンが撮影したフィルムは3月29日夜、テレビニュースの時間に数回にわたって放映されたが、この種のフィルムによくあるほんやりとした映像と違って、専門家がとつたものだけに、動きのよくわかる鮮明なカラーフィルム。天文学者、航空力学の専門家も強い関心を示しており、空飛ぶ円盤はこの夜のテレビの人気を独占した。

ORTF の話によると、フィルムは同月23日夜、東部フランスのボージュで劇映画を撮影中のカメラマンが偶然撮つたものという。

画面にはまず夕暮れのボージュのなだらかな山なみが映る。その遠景の中に突然うすく光るオレンジ色のボールのような物体が現われ、画面の上から真下の山に向かつてほとんど垂直に降下する。地表にぶつかろうとする直前、物体は急に動きを止めて静止したため、周囲の山や木々、草花が、斜めに急上昇して姿を消す。

この間せいぜい2、3秒。ORTF は同じフィルムを繰り返し放映したが、よくみると「物体」は上空では丸のボール型だったが地表に近づ

くにつれて扁平ないわゆる円盤に変形する。

カメラマンのミシェル・ボンヌ君は「フライングに突然なか飛び込んできた。あわててフィルムを回したが、現像してみても驚いた」と語っている。専門家は「映像があまり鮮明なため光線の作用とは考えにくい。また物体が刻々大きさを變える点、気球とも考えられない」と首をひねっている。

(一九七四年4月1日付、毎日新聞、パリ三十日諺訪特派員発)

朝の皇居上空にあやしげな物体

●築地市場でヤジ馬総だかり

「アリヤリヤ、円盤だ、空飛ぶ円盤だぞ」——2月26日朝の東京・築地の中央卸売市場は、はち巻き姿にゴム長くつた従業員たちが一斉に空を見上げて大騒ぎとなつた。午前11時前、築地方面から見上る皇居上空に浮かんだ小さなあやしげな物体に見とれたヤジ馬は、あつという間に数百人にふくれ上がり魚河岸のあちこちには50、60人ずつ固まっていた。なんだ、なんだ。

読売新聞本社社会部にも、同日正午までに20人近くの「目撃者」が通報してきたが、これらの話を総合すると、ナゾの物体は楕円型でオレンジ色、かなり小さく見えるところから高度は高く、10分間近く上空に停滞したあと、あやしげな光のようなものを放ちながら、西の方向にゆっくりとした速度で消えて行った。

これについて日本であつた一つの飛行船を持つオリエント飛行船(東京都港区浜松町)で「飛行船を飛ばすには、運輸省航空局の許可が必要だが、今日はその予定もなく許可もとつてない」と否定した。

続いて、運輸省航空局航務課でも「こちらにも十数件の問い合わせがありましたが、今のところ該当するものがなくて……」といっている。

そのころ、警視庁にも「一〇番の問い合わせがあり、同庁通信指令室の係員が屋上に出てみたところ、確かに築地方面から南の方へ流れているオレンジ色の「飛行船らしい」ものを見た」と報告した。

結局、このナゾの物体、ナゾのままヤジ馬の推理だけを乗せて正午すぎにことごとく消え失せた。(一九七四年2月26日付、読売新聞)

中学校内で目撃者続出

●取手市でこの3年間

茨城県取手市の中学校で、一昨年から今年にかけて、夜空にひとときわ輝く未確認飛行物体(UFO)を見たという生徒が続出。一人がそれらしい物体の「証写真」まで撮り「はてなんだろう」とこの話題で持ちきり。

写真撮つたのは、取手1中1年の柳田洋一君(13)。親友の同級生から月に2、3回は見るという話を聞き、連日ねむい目をこすり待機しているうち、昨年12月21日夜ついに発見、3分間露出させて撮影した。

この物体は楕円でオレンジ色の光を出し、卵大に見えたという。目撃者はこの2人のほかに、同中だけでも10人を下らず、物体の形色のほか、いったん現われると10分間ぐらゐる飛んだり、空中に停止する様子も同じ。生徒に教えられた先生の中にも「雲や飛行機とは違う。UFOに違いない」と太鼓判まで押し、いまや市民総ぐるみで「夜空を見よう」——。

(一九七四年1月19日付、読売新聞)

周囲にふち状の輪のある円盤

●宮崎市で現われる

「たつた今、東南の方向に空飛ぶ円盤らしい物を見つけた」4月27日午後6時半過ぎ、宮崎市恒久城ヶ崎、宮崎中央高校2年岩切孝次君(12)が宮崎日日新聞社報道部に息をはずませて通報。

天体望遠鏡でのぞいたところ、突然に空飛ぶ円盤が飛び込んだ。銀色で周囲にはふち状の輪もありオレンジ色の光を放っていた。約3分間静止したあと飛び去ったという。

北海道では「宇宙人の円盤で月旅行した」という人も現われているが、すでに確かめようもない。宇宙人や、地球はインフレと交通事故で住みにくいぞ——。(一九七四年4月28日付、宮崎日日新聞)

銀河系から地球に生物を派遣

●シカゴ大のフリードマン博士が語る

「銀河系から地球を監視のための生物が派遣されている」——米シカゴ大原子物理学のフリードマン博士は、全米空飛ぶ円盤シンポジウムを前に、14年間に及ぶ研究成果を披露した。

地球人以外の銀河系生物は、銀河系の「国際連合」を結成、互いに連絡を取りあい、探検家を派遣している。

彼らは地球をしばしば訪問しており、銀河動物園に収容する動物物を採集しているフシもあるという

がその内容。同博士によると、こうした宇宙からの来訪者たちは「地球は決してみることはいやが、住むには値しないところだ」と言っているそう

ダイヤモンド形の UFO 出現

●ハミルトン・ミシガン州

アレガンの一住民と彼の息子はグランド・ハブンの旅行からの帰路、月曜日の晩(6月10日)、ハミルトン近くのM-40アンド89上空でUFOを見たかと報告した。アレガンの理髪師であるジェームス・シルスと彼の息子、モーガン(15)は最初その物体が空に停止しているのを彼らがマイケルトンの北3.5キロのハイウェイを南に走っているときに見つけた。シルス氏はその物体が飛行機かヘリコプターか、あるいはテレビ塔だろうと思つていたので最初、彼らがその物体について注意を呼び起こしたのは物体の停止位置であつたと述べている。

彼らはハミルトンに近づくにつれてますますその物体に近づき、ハミルトンの北西先端地に来たときはほとんどその物体の真下に近かつた。シルス氏はUFOは無音で大体ダイヤモンドの形をしており、赤や青そして白色の光がその表面で輝いていたと述べている。

好奇心が起こつてシルス氏は車の方向転換をし物体に向かって北へ下った。物体は数度ゆっくりと道路を横切つたが、それから北に向かつて速度を増していった。彼は物体を追跡しようとしたが、丘の頂上の向こう側に消え去つた。彼が丘の上に着いたときは物体はどこにも見当たらなかった。

シルス氏は空軍を退役して4年になるが、種々のタイプの飛行機に詳しい。同氏はこの事件をアレガン地区保安局に報告した。

ルディ・ウィットニー大尉はシルスの報告を受け取った後、ボーランド警察とオタワ州保安局と連絡をとったが、どちらもこれと似たような報告はなかったと述べている。

ウィットニー氏は事件を「説明

情報

UFO

不可能とし、さらに曇った夜一日の報告を受けたのは異例である、と述べた。またこの種の報告は星や他の空中現象が非常によく見える澄んだ夜にまとまって報告されている。

シルス氏は彼の息子が「お父さん、この事は家族以外の誰にも話さないことを約束して！」と言ったという。
(一九七四年六月十三日付、ニューズアンドキャザンペーパー紙「アメリカ・ミシガン州」)

星の4倍大の明るい 光体を3時間目撃

●レキシントン・モントナ州

「それはおよそ星の4倍位の大きさに非常に明るく北七星を一点に集めたように見えました」とレキシントンのジョー・スノーバ1夫人は昨日(7月22日)早朝、約3時間目撃した上空の光体について述べている。

「それは不思議でした。午前0時15分頃に仕事から帰った主人が最初にそれを目撃しました。主人は私を起こした上で私が光体を目撃したのは、大体0時50分頃でした。光体は飛行機よりかなり遠く、非常に暗い光が輝き、時々赤く輝く光もありました。そして明るくなった」と夫人は述べている。

夫人はジョー・ファーソン通り2213にある彼女の敷地から光体を目撃した。夫人とその夫が双眼鏡でその光体を目撃したとき、夫人

は、彼らは光体から雲のような白い水蒸気が出てきて、それが出てくるのが光がさすんだたびごとだったという。そして夫人は「私はいつもこのような事に興味をもっているが、自分の目で何かを見るだろうとは思っていませんでした。もし私の他に目撃者がいなかったら、私は何も言わなかったでしょう。という人も人々が私を気遣い扱いするでしょうから」と述べている。

その光体を目撃したのは彼女と近所の人々合わせて7人である。最後に彼女が「私は午前3時までそれを見つめていましたが、しばらく消え去りしばらくは戻ってきませんでしたので、そのまま寝てしまいました」と語っている。
(一九七四年7月23日付、アドバタイザー・ニューズ紙「アメリカ・モントナ州」)

大学ノートを2つ 重ねたような物体

●前橋(群馬県)で小学生が目撃

「ぼくも空飛ぶ円盤を見たよ」と、松井田町の小学生が名乗り出た。碓氷郡松井田町新堀の中山正道君(12)は「松井田第一小五年」で中山君が見たのは7月24日午後10時3分頃。同町上増田の篠田三郎(56)が家族3人と一緒に見たのは28日より4日早い。さらに篠田君が見た物体が「たばこのパイプに似ていた」というのに対して中山君は「大学ノート」を2つ重ねたようなものだった」と説明している。

中山君の話によると、2本の電線の間を、大小2冊の大学ノートを重ねたような形をしたものが黄色い光を放ちながら夜空を斜めにのびていった。その間、わずかに3秒ほどだったが、一帯は明るく感じたといい、
(一九七四年7月30日付、上毛新

聞(前橋)

群れをなした数個 の物体が現われる

●滝川付近(北海道)で確認

8月21日未明滝川市内でUFO(未確認飛行物体)らしい物体が確認された。数個が群れをなした紫色で突然輝いたり、上下運動をしたという。

同日午後11時30分頃、滝川市明神町「ホテルスウェー」の9階にある、スカイラウンジ「ボルス1」の従業員平山善雅さん(22)と石垣雄雄さん(29)が閉店後の後片付けをしていたところ、東方の歌志内市神威山の上に星とは違う物体を発見した。物体は数個の群れで一番右上の光がもっとも大きく鮮明で、ほかは途中から見えなくなったという。

しばらく見ていたところ、最初のうちはフラフラとしていたが、やがて右に動きついで一斉にそのまますり上がった。そして形も似ていに変化し、突然光が出現する場面もあった。しかし同4時近く夜明けが迫るとともに静かに消え去った。同3時すぎから同ホテルのフロント従業員吉見敬三さん(31)のほか数人の泊まり客も平山さんたちのそばで確認した。雲が見られたところは部分的には雲が見られたがほぼ星空だった。目撃者は「光が弱まったのは雲の影響かもしれない。しかし明らかに特異な運動をしており絶対に星ではないと思う」と話している。

平山さんは、中学一年の頃にも同市内で同じような体験をしているが「今回は前ほどはっきりしていません」と言っています。一方、空知地方では今月15日に美瑛市の住民が「星とは違う物体が6個そろって同じ運動を繰り返している」と岩見沢市に届け出た

こともあった。
(一九七四年8月22日付、北海道新聞「札幌」)

青白く光る血を伏 せた形の物体発見

●津島市と滝川市に(愛知県)

8月25日未明と26日夕方、津島市と刈谷市で「UFO(未確認飛行物体)」を見たというひとが相次いだ。

25日午前4時15分頃津島市大塚町字福部郷の6、成蹊大電気工学科一年田尻敦夫さん(18)と弟の郁夫さん(18)は愛知高3年「ら」が発見、ちょうど交信中だった同市内のアマチュア仲間2人に連絡した。田尻さんの話だと東の空に初め血を伏せた形の青白く光る物体を発見した。この物体はだんだん丸く小さくなって10〜15分後に雲に隠れた。

26日の場合は刈谷市井ヶ谷町大白3の1、農協職員近藤晃治さんの長男・秀樹君(11)「富士松北小学校6年」と、長女・初美ちゃん(9)「同小4年」が、午後7時20分頃発見、近藤さんも確認した。この話に北設楽郡東栄町の、みその天文台では「刈谷市の場合には目撃者でしよ。飛光機のように見える」と話していた。
(一九七四年8月27日付、中日新聞「名古屋」)

定時にきまつた場所に出現

●岩見沢上空が航路か

愛知地方ではこのところUFO(未確認飛行物体)を見たという人が相次いでいるが、1日夜も岩見沢市内の中学生が上空をかなりスピードで飛んでいく物体を確認。8月30日夜には市民数人も同じような飛行物体を見ている。この中学生は岩見沢市有明南、

小西倫展君(15)は「岩見沢光陵中3年」で天文マニア、兄の一晃君(18)は「三高等3年」や数人の友達と昨年秋から集光万20倍の天体望遠鏡で晴れた夜空を眺めているが、一年足らずの間には午後7時30分から同8時までに限って東空に強い光が走って行くのを何10回となく見ているという。

この物体はかなり強い光を放つらしく、肉眼でも鮮明に見える。突然現われ相対的スピードで運動するがいつも小刻みに振動しており、消え去る直後に大きく振動するのが特徴。最近では8月30日と9月1日に確認。8月30日はまったく別の岩見沢市民数人も肉眼で約20秒間、小西君のいうのとはほぼ一致する物体を確認している。

このほか8月中旬には美瑛市と滝川市の市民数人も特殊な運動をする物体を見たといっている。どちらも数個のグループで急に方向を変えたりオレンジ色を発したといふ。小西君らは「岩見沢上空が航路になっているのではないかと」話している。
(一九七四年9月2日付、北海道新聞)

星の3倍大の光る物体が通過

●岡岡市で目撃者が続々

岡岡市上空に円盤が現われた。8月28日夜、奇妙な光の物体が通過したところから大騒ぎとなった。目撃者も続々と出て「マンガの読みすぎ」とは片付けられない信ぴょう性を帯びたものだ。円盤が現われたのは午後7時45分頃、子供たちの騒ぎで飛び出したという同市白金町の鮮魚商開発雄次さん(37)の話では「月が照っていたが星の3倍はある光の物体が西から東へゆっくり進み、月か約15メートル付近で真っ赤に燃えつきるようになつた。あんな大きな星は流れて星とは見え

ない」という。

この物体は付近の人たちも同様に、口々に「最近にないミステリーだ」と、市民は興奮気味。特に子供たちにとっては夏休みも終わりに近いだけに何よりのプレゼントとなった。

(一九七四年八月30日付、富山新聞「富山」)

2.5/3等星大の飛行物体が上空を移動

山口県の大天文同好会が捕える夏夜の澄んだ夜空の星座を毎晩のように写真観測して来た秋天文同好会(永尾富士子会長)のカメラが何とも解明できない飛行物体を捕えた。人工衛星でもなく、さしてはナゾの飛行物体F.O.と会員たちは大騒ぎ。天文協会もネガ・フィルムから再度検討する。

撮影したのは同高校2年、梶尾豊君(16)。8月16日午前0時から秋市郷土博物館の天文台ではほぼ天頂にある白鳥座のアルファ星「デネブ」の周辺の「北アメリカ星雲」を望遠鏡で追ったフィルムの中に、2.5/3等星位に光る物体がわずかに尾を引きながらデネブの近くからしだいに移動、午前1時30分には画面から完全に姿を消していることが捕えられていた。

物体のスピードは距離がわからないので計算できないが、一時華やかだったナゾの飛行物体「F.O.」の話題が最近、再び高まってきているだけに会員たちも「お盆に帰ってきた霊魂では」と冗談を混じえながら首をひねっている。

ただ一つ残された可能性はASA3000という高感度のフィルム上を走った静電気の傷か望遠レンズのフレームによるゴースト現象なども考えられるが同会ではさらに撮影回数を増やして不明体を捕えようと思気込んでいる。

(一九七四年八月29日付、毎日新聞「山口版」)

北極星大のオレンジ色をした物体出現

●北海道・砂島管内で一月間道内各地でナゾの飛行物体、F.O.を見たという騒ぎが起きるが、波島管内砂原町でも一ヶ月位前から目撃者が続出し、「眠れない夜(ッ)」を過ごす町民たちの間でこの話が持ち切れた。

同町の駒ヶ岳山頂付近の上空にナゾの飛行物体が現れるといううわさが流れ出したのは8月10日ごろ。森著砂原駐在所の永岡昭俊巡査部長(48)の話によると「最初に発見したのは小学生で初めはだれも信用しなかった」という。水岡さんもその一人。このため駐在所は最近「観測ステーション」に変わり、飛行物体の出発時刻帯といわれる午後7/9時頃にかけて付近の商店主、主婦、消防署員、小・中学生が詰めかける。

目撃者の話を総合するとナゾの物体の大きさは北極星位。オレンジ色のチラチラした光を発し同町東南の横津岳方面から現われ、約50秒かかって北西の駒ヶ岳山頂に消える。仰角はおおよそ30度で予想外に低い感じという。

水岡さんたちの話によると、これまで函館空港の管制塔、自衛隊日航、全日空などの航空会社などこの物体に関連するところには幾度も連絡、確認したが、ナゾは解けていないとのこと。

(一九七四年九月8日付、北海道新聞「札幌」)

野球のボール大の黄色い物体目撃

●群馬県勢多郡の梅沢さんが「私も自宅の庭で境町の武井義典さんと同じような「光る物体」を

見た」と、勢多郡宮城市市ノ関の農業、梅沢敏雄さん(20)は報告してきた。

梅沢さんは7月31日午後8時45分頃、友人を迎えるため自宅の庭に出たところ、南南東の大胡町の上空に野球のボール大の物体が黄色の光を放ちながら上昇するのを目撃したという。

武井さんが見たのは同日午前1時頃で、おぼんの大さきだったが、夏の夜、私は見た」というナゾの光る物体の話題はまた一つ輪を広げた。

(一九七四年8月2日付、上毛新聞「前橋」)

変則的な動きをするUF.O

●北海道のハム仲間が連絡し確認「再盤が飛んでいる」7月22日夜、札幌市や隣の広島町、さらに砂川市など道央のかなり広い地域の人たちから毎日新聞報道部に「UF.O発見」の電話がたくさんかかって来た。

午後10時頃、まず砂川町輝美町、会社員、林待子さん(22)から第一報。林さんはアマチュア無線家で同日午後10時すぎ「UF.O」らしい物体が飛んでいる」というハム仲間の無線を傍受、母親の恵美子さん(49)といっしょに外に出てみると西の方で「等星大」の「物体」が横に動いたり円を描いたり動くたびにオレンジ色から青白い色に変わったりして2時間近く飛び回っていたという。

また林さんの父林猛さん(50)も午後11時頃、抗虫作業から帰宅し、この「物体」を見ている。次いで同日11時20分、今度は広島町の公務員、横山哲雄さん(23)が林さんの流した無線を聞いて方角に出てみたところ、やはり西の方角に肉眼ではっきり見た。広島町地方はあいにく曇空で同日11時半すぎに雲の中にはいつても見えない

なくなってしまうという。砂川市上砂川の青年からの電話では「雲がなかったので23日午前0時すぎまで見えた」と言ってきた。

この夜の「UF.O」騒ぎはアマチュア無線家たちが「こちらへ発見」と各地に伝えたので札幌はもちろんだ道中地区のかなり広い地域で目撃したらしく、後述くまで電話が鳴った。しかしUF.Oが流星か、他の物体かはこの夜も確かめられなかった。

(一九七四年7月23日付、毎日新聞「札幌」)

3つの物体が三角状に飛行

●仙台市のバスの車掌が目撃

「空飛ぶ円盤らしいものを私も見た」と仙台市長町4丁目7の45市バス車掌、亀谷成治さん(21)が通報。星雲がよく見えた8月2日の午前0時頃、友達と遊んで遅くなり自宅近くまで帰り何気なく上空を見上げると白っぽい光を放つ3つの物体が三角状になって北から南へ音もなくかなりのスピードで走ったという。目撃したのは、3/5分。

飛行機とは違うが翌日、念のため航空自衛隊松島基地に問い合わせたところ、その時間に飛んだ飛行機はない、といわれたという。亀谷さんは家族や職場の友だちに話すと「錯覚だろう」と相手に朝日新聞で「今年9月9日付けの情報が全国各地で急増、このため『日本空飛ぶ円盤研究会』が『全日本空飛ぶ円盤研究連合会』を結成する」という記事を読み、確信を持ったという。

「静まり返った真夜中なので近くにはだれもいなかった。こわくなくて家に帰るなり布団をかぶって寝てしまったほどで、バカげた話だと半信半疑だったが、最近全国各地に目撃者がいる以上やはり本

物だろう。私はこの視力だから絶対に錯覚なんてあり得ない」と亀谷さんはいう。

(一九七四年9月10日付、朝日新聞「宮城版」)

幽霊円盤か、宇宙の神秘か

●阿蘇山火口で撮影

阿蘇山火口で「空飛ぶ円盤」が飛来。熊本県阿蘇郡阿蘇町観光課にこのほど、火口見物した登山客の一人が、四次元世界の物ともいえる空飛ぶ円盤が火口上空に写っていた、とカラー写真と説明を添えた手紙を送ってきた。送り主は、岡山県赤松山陽町西中四九二、建築士木業秀勝さん(43)がその人。森さんは地元の高校の先生に写真の鑑定を依頼、まだ結論は出ておらず、野視光課も首をひねるばかり。

以下、森さんの手紙から。5月13日午後2時頃、九州旅行中だった私は修学旅行生などの団体として、阿蘇山山頂に上った。この機会にぜひ噴火口を写して帰らねばと思い、一番火口に近い部分の丘に立って、もうひとつ立ちのぼる噴煙をながめてシャッターを切った。そのとき私の目には自然以外の物体は何もはいらなかったし、数千人の目にも疑う余地はなかった。数日後フィルムを焼き増してアッと呼んだ。なんと円形の物体がクッキリ写っているの、それとも宇宙の幽霊円盤なのか、それとも宇宙の神秘か。森さんは合成写真かと疑いを持って、瀬戸カメラ店に聞いてみると、「確かに私が写真を処理しましたが、四つ切りに拡大して焼くだけでみたらまさに円盤らしいので驚きはない」という。

(一九七四年8月14日付、読売新聞大阪版)

宇宙人特別講演会



東京で「宇宙人特別講演会」開催

ヒューマノイド

若いUFOファンで超満員の盛況！

最近アメリカをはじめ日本にも「宇宙人（？）」と接触したという事件が続々発生しているの、これらの事件が果たして真実なものであるのかどうか、その科学的認識を深めるとともに将来起こる可能性のあるこれらの問題

についての講演会が東京の品川文化会館小ホールで九月一五日（日）に開催された。主催者は日本における円盤研究会の草分け、日本空飛ぶ円盤研究会（代表・荒井欣一氏＝写真）で会場には定刻前から多数の聴衆が押しよせて

場内はたちまち超満員となり、熱気がムンムンと場外にまで溢れていた。

講演者は、円盤や宇宙人について多数の著書を出されている平野威馬雄氏や、本誌ともなじみの深い荒井欣一、高梨純一、斉藤守弘氏等で、相次いで登壇、興味ある講演をされた。

なお当日は講演の他に北海道北見事件を直接取材したNHKのテープ（未発表）を流したり、「宇宙石（？）」の展示等も行なわれたが、この事件の真憑性については疑問に思っている人が大

多数のようだった。
また会場ではアンケート用紙が配ら

れ、コズモの購読状況についてもデータが集められた。

更に翌一六日には同所において「日本空飛ぶ円盤研究連合」と「宇宙人対策委員会」設立について五時間におたって熱心な討論が行なわれた。その後各団体、グループから連合会へ参加希望の申込が続々発起人の荒井氏のもとに届いているとのことである。

日本でこのような会合が実現したことは画期的なことであり、わが国UFO研究界の熱意のほどを示すものといえるだろう。今後の進展が期待される。アンケートの結果は次の通り。

1. 宇宙人（ヒューマノイド）は本当にいると思いますか

- いると思う = 117 ● いないと思う = 1
- わからない = 19

2. 北海道北見事件について

- 本当と思う = 12 ● 本当かもしれない = 55
- 信じられない = 41 ● デタラメと思う = 29

3. 宇宙人対策委員会が近く設置されますが

- 丁度良い時と思う = 48 ● まだ早い = 16
- バカバカしい = 4 ● 期待したい = 71

4. 昭和47年6月の第1回円盤講演会について

- 出席した = 11 ● ハガキ出したが満員 = 3
- 知っていた = 12 ● 知らなかった = 106

5. 今回の講演会は何で知りましたか

- 新聞名 = 朝日 = 41、読売 = 5 その他

6. UFOの雑誌「コズモ」を読んでいますか

- 毎号読んでいる = 69 ● たまに買う = 20
- まだ読んでいない = 45

来会者の年齢及び職業別分類

10～20歳	66	中学生	= 9	公務員	= 3
21～30	38	高校生	= 32	会社員	= 34
31～40	9	大学生	= 31	その他	= 18
41～50	12	教員	= 4		
51～	5				

●〈天空と大地〉科学シリーズ(7)

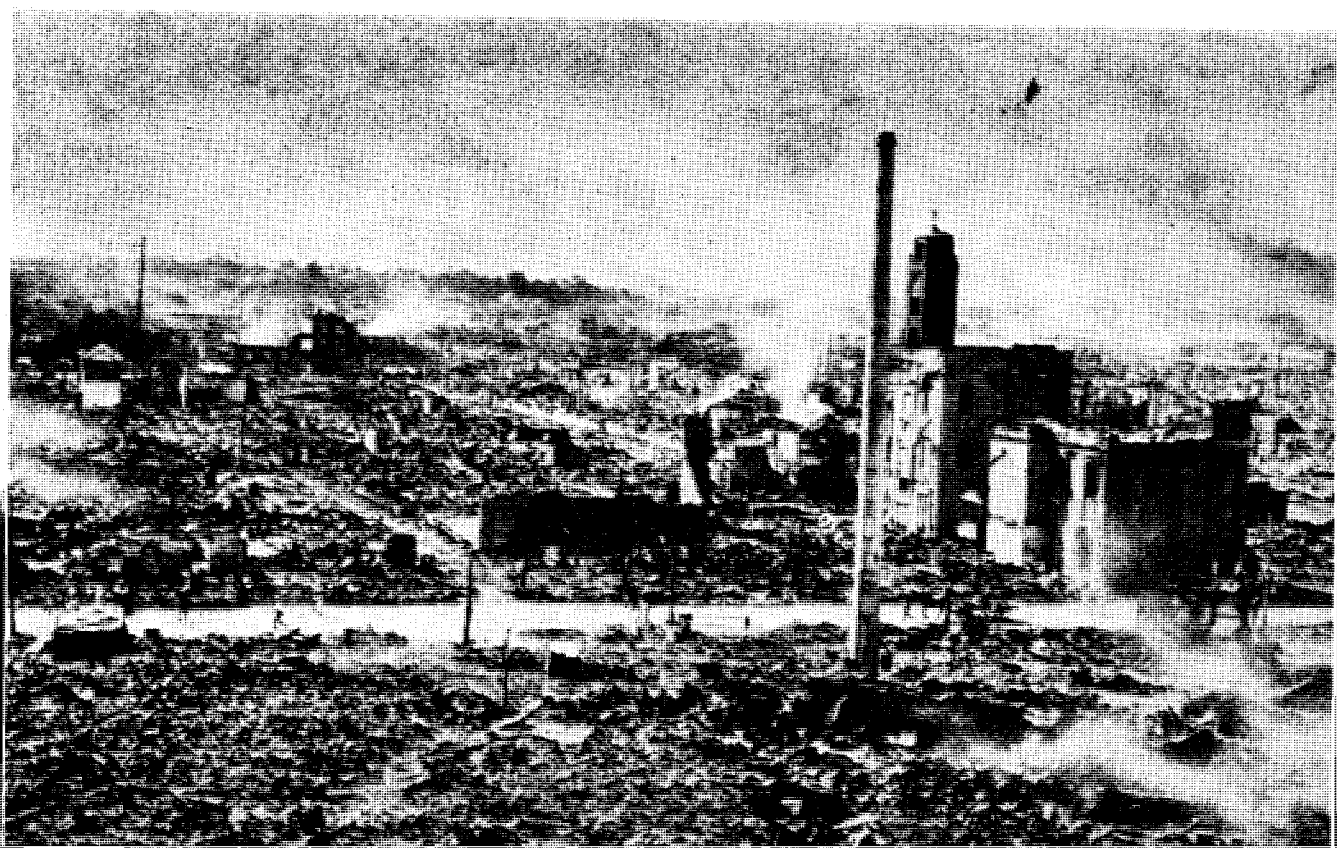
地震の鍵をにぎるマントル対流！



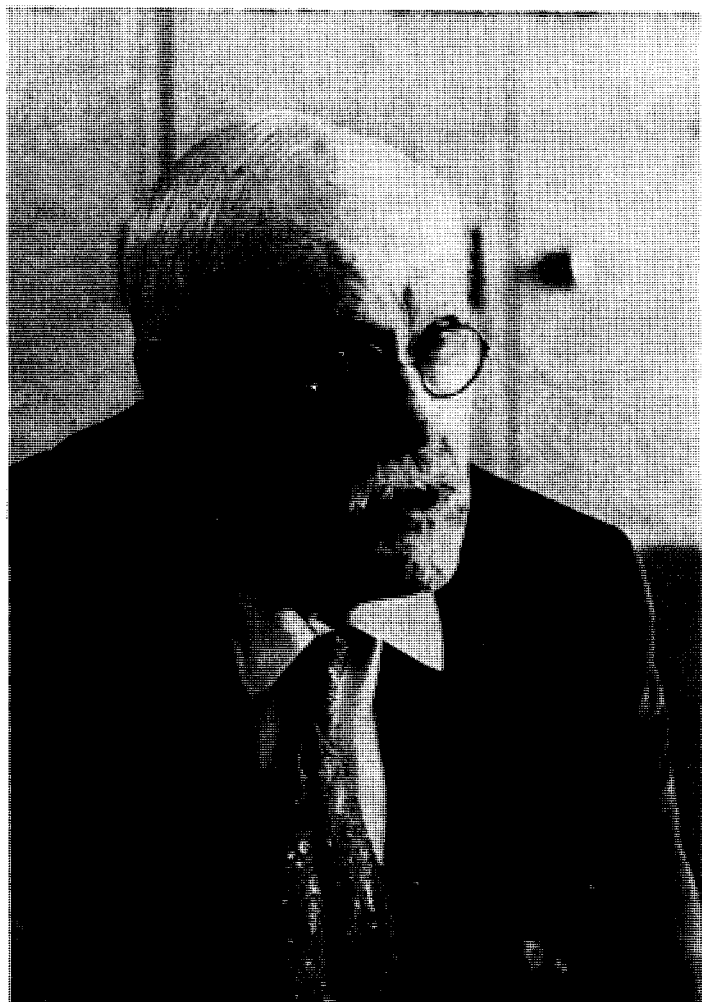
日本列島はどうか？
頻発する地震発生の原因を
究明、ユニークな理論を平
明に解説する

東京大学教授
理学博士

竹内 均



●ハロルド・ジェフリース卿



●日本は特有の
地震の多発地帯

日本ではよく地震がおこります。地震に慣れっこになった私たち日本人の中には、世界中のどこでも、日本と同程度に地震が多いと思っている人がいます。これはたいへんなまちがいです。まずそのことと関係したおもしろい話を一つしておこう。

一九五三年から五四年へかけて、私はケンブリッ

ッジ大学で半年間を過ごしました。ケンブリッッジ大学での私の先生はハロルド・ジェフリース卿でした。ジェフリース先生は地震の研究で有名な地球物理学者です。そのジェフリース先生から「自分はまだ地震を経験したことがない」と聞かされて、私はまったくびっくりしました。

しかしこれは無理からぬことです。イギリスは地質学的に見てたいへん古い島です。古い地質時代の呼び名にカンブリア紀というのがあり

ます。このカンブリア紀という名前は、この頃の地層がよくあらわれているケンブリッジからきたものです。これほどイギリスは古い島なのです。ジェフリース先生の告白（？）に驚いた私は、さっそく「先生、いつの日にか日本へやってきて下さい。地震が先生を歓迎するでしょう」と述べました。この先生との約束は、それから約二〇年後の一九七一年五月に果たされました。この時盛岡で「地球の自転」に関する国際シンポジウムがおこなわれ、ご夫人同伴のジェフリース先生がはるばる日本へやってこられたのです。その時私は先生ご夫妻の接待役をおおせつけられました。八〇歳を超える先生の接待は困難をきわめました。私はよくその責任を果たしました。そして日本の地震もまた私によく協力してくれました。先生ご夫妻を驚かすような地震が首尾よくおこってくれたのです。

そもそも大陸は、核と呼ばれる中心部のまわりに、木の年輪のように成長します。アジア大陸の成長の中心は、シベリアのアンガラランドと呼ばれているところにあります。そして、日本のような大陸と海との接する部分は大陸成長のフロントであり、日本に地震や火山活動がさかんなのはこのためです。このような地震や火山の活動によって、大陸と海との接する部分に新しい山脈ができ、それがこれまでの大陸につけ加わって、その分だけ大陸が成長するというわけです。山をつくるという意味で、このような活動を造山作用あるいは造山活動と呼び、こ

のような造山作用のおこっている場所を造山帯と呼んでいます。ともかく、このような造山帯に生まれあわせた私たちは、どうあっても地震や火山を避けることができないのです。

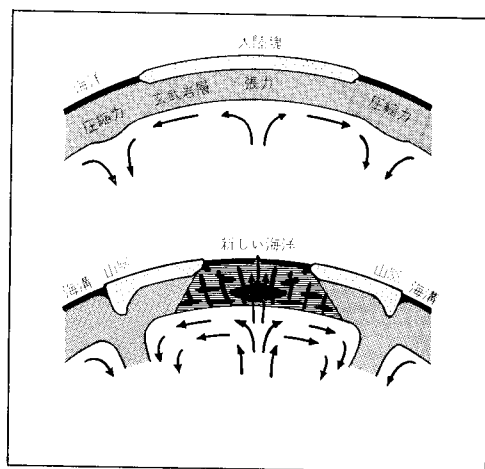
イギリスも立派な島であり、大陸と海との接する部分にあります。それなのに、イギリスはその地質が古く、したがって現在造山活動がおこっていないのはおかしいではないか、といわれるかもしれない。まったくそのとおりであり、実はかつてイギリスは、ある大陸の中心部に近いところにいたのです。皆さんはきっと大陸移動説の話を聞かれたことがあるにちがいない。その大陸移動説によれば、今から約一億五千万年前には、大西洋のどまん中で、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸とがくっついており、イギリスがその間にはさまっていました。その証拠には、今から三ないし四億年前にできた山脈が、スカンジナビア半島からイギリスを経て、これまた三ないし四億年前にできたアメリカのアパラチア山脈へなめらかにつながっています。しかし現在これらの間をつなぐ大西洋には、これのつながりになるような山脈が見つからない。それはともかく、イギリスの地質が古く、またイギリスに地震や火山の活動がないのはこのためです。

●一億五千万年前

四大陸は一つだった

ここで大陸移動説について少し詳しく説明し

●エンジンハラ大学のホームズ教授は初めて「固体、的マントルの熱対流によって大陸移動説の説明を試みた



ておこう。大西洋のほぼ中央部を南北につらぬいて、大西洋中央海嶺と呼ばれる海底山脈が延々と走っています。実は現在この中央海嶺があるあたりで、大西洋をはさむ四つの大陸である南北両アメリカ大陸とユーラシア及びアフリカ大陸がくっついていた。これらの四つの大陸だけでなく、オーストラリア大陸もまた南極大陸も、このあたりで一つに集まって、パンゲアと呼ばれる超大陸をつくっていた。今から一億五千万年前のことです。したがってその頃には、まだ大西洋はなく、地球上にはただ一つの超大陸であるパンゲアとただ一つの海である古太平洋とがあった。

その後この超大陸パンゲアの中心部の真下へ向けて地球の内部からマントル対流と呼ばれる流れがわき出してきて、中心部からパンゲア大

陸の周辺部へ向けて水平に動いていた。このマントル対流は超大陸をひき裂くような働きをします。このためにまず、超大陸の表面に割れ目のはいり、その割れ目に沿って超大陸が六つの大陸に分裂し、その六つの大陸のおののがマントル対流に乗って移動し一億五千万年をかけた移動の後で現在の位置へ落ち着いた。これが大陸移動説のあらましです。大陸移動のスピードを求めるには、大西洋の幅の半分を一億五千万年で割ればよい。たとえば北アメリカ大陸は、一億五千万年の時間をかけてこの距離だけ移動したからです。このようにして求めた大陸移動のスピードは一年に数センチメートルの程度となります。

大陸が移動するといっても、移動のスピードはこの程度です。しかし、地球の持ち時間は長い。地球の年齢は四五億年であり、大陸の分裂と移動が始まったのは今から約一億五千万年前のことです。仮に一年に一センチメートルずつ移動したとしても、その移動を一億年続ければ結果は一〇〇〇キロメートルとなる。このように地球上では、「塵も積もれば山となる」という諺どおりのことがおこっているのです。

現在の大西洋中央海嶺の上にあった超大陸パンゲアの中央部の真下へ向けて地球内部から上がってきて、その上にあった超大陸を分裂し移動させたマントル対流は、今もなお動き続けています。その証拠には、海嶺のてっぺんに割れ目の谷ができ、その谷の幅が年々広がっています。

す。これは超大陸パンゲアの分裂の初期におこったこととそっくりです。また割れ目の谷にあたる部分の海底の温度は高く、割れ目の谷の下では地震や火山活動がさかんです。火山の噴火の際の溶岩と似た高温のマントル対流があたりをかきわけて上がってくるために、この部分の温度が高くなり、また地震や火山活動がさかんになってくるのです。この六月の中旬から下旬にかけて、SF作家の小松左京さんたちといっしょに、私はアイスランドへ行ってきました。

このアイスランドは、大西洋中央海嶺が陸上へ乗り上げた部分であり、地震や火山活動もさかんです。アイスランドのほぼ中央部を南北につらぬいて、幅数一〇キロメートルの割れ目の谷が走っているのを見てきました。この割れ目の谷は、大西洋中央海嶺のてっぺんにあるのと同じものであり、大西洋中央海嶺に關係したマントル対流が今なお活動を続けていることをこの上もなくよく物語るものです。

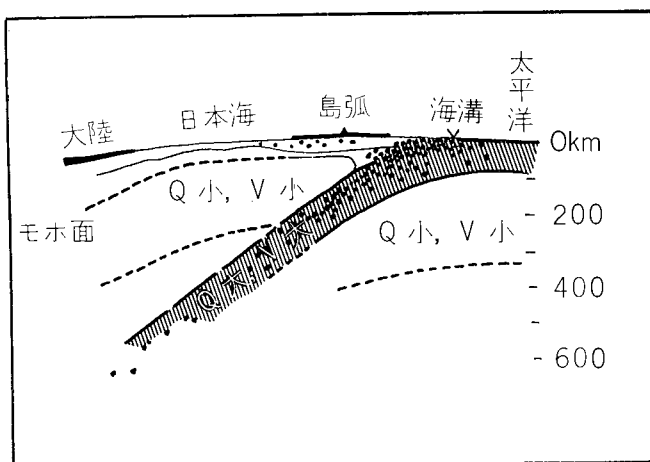
海嶺は大西洋の中央部だけを走っているのではない。インド洋にも太平洋にも海嶺が走っており、海嶺の総延長は六万キロメートルにも達します。地球をその赤道部分でひとまわりすると一万里、すなわち四万キロメートルになります。したがって海嶺は「一・五万里の長城」ということになります。

●大陸成長のフロントにあたる日本

太平洋ではその東南にかたよったところに、東南太平洋海嶺と呼ばれる海嶺があります。この海嶺の部分へ向けても、地球内部から高温のマントル対流が上がってきています。上がってきたマントル対流は、ここで左右に分かれて水平に進み、やがてどこかでもう一度地球内部へ沈みこんでゆきます。そのどこかがどこであるかを知るには、太平洋の周囲を見渡してみればよい。太平洋の周囲には、最初に述べた造山帯が走っています。日本をもその中に含む造山帯は、大陸と海との接する部分であり、大陸成長のフロントでもあります。もう一つ、太平洋の周囲、特にその西側と南米に近い東側には、深さが七キロメートルをこえるもっとも深い海の部分が海溝と呼ばれています。日本の太平洋沖に日本海溝と呼ばれる海溝があることは誰でも知っているだろう。実はこの海溝及び造山帯こそが、マントル対流の沈み口なのです。すなわち、海嶺部分へ向けて地球内部から上がってきたマントル対流は、そこで左右に分かれて水平に進み、やがて海嶺及び造山帯の部分から、地球内部へ向けてもぐりこんでゆくのです。昨年からは今年へかけてベストセラーになった小松左京さんの「日本沈没」は、このマントル対流とともに日本列島を地球内部へもぐりこませようとする雄大なSFだったのです。

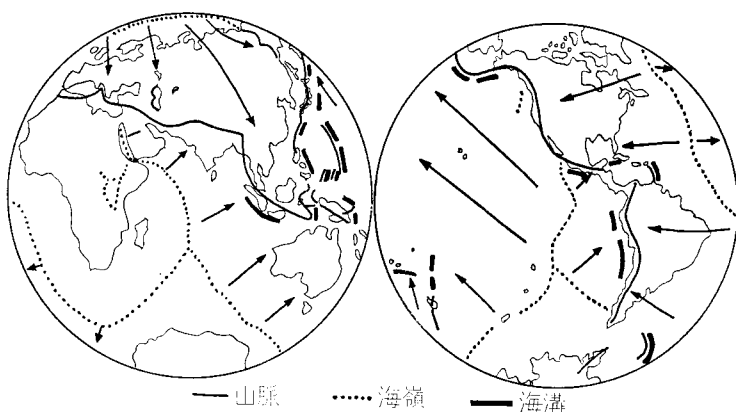
地球の表面でもっとも低い部分である海溝ともっとも高い部分である造山帯とをひとまとめにして、海溝及び造山帯と呼ぶことは、ちょっと

●マントル対流の沈み口（宇津モデル）



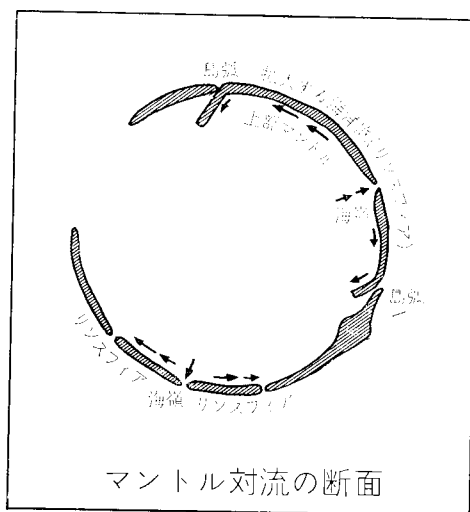
と乱暴だと思われるかもしれない。しかし、これには理由があります。実は造山帯は海溝のなれの果てと考えられるのです。ここで私たちは「山がどうしてできたか」という昔からの大難問に直面します。この問いに対して、現代の地球科学は次のように答えています。くり返し述べたように、大陸と海との接する部分にある造山帯が大陸成長のフロントです。ところで、そのフロントのそのまた先（海側）に地向斜と呼ばれるくぼみができる。この地向斜へ、大陸側及び海側から運ばれてきた堆積物がたまる。しかし、この埋め立て工事はいつかに進まな

山脈・海溝・海嶺の分布とマンテル対流



い。せっかく堆積物がたまっただけで、その分だけ地殻が沈降してしまうからです。この沈降の原因が何であるかはまだはっきりしていません。しかし、造山帯の部分から地球内部へもぐりこんでいるマンテル対流がその原因だとも考えられます。ともかく、このようにして埋めた工事がいっとうに進まないままに、堆積物の厚さがどんどん厚くなります。そして、堆積物

の厚さが約一〇キロメートルに達したところで、地殻の沈降がとまり、また地殻の中で火山活動がおこり始める。そしてやがて地殻が隆起して立派な山脈となる。アルプスやヒマラヤ山脈の研究によって、このような「山脈をつくるにはまずくぼみ（地殻斜）をつくれ」という原理が明らかにされたのです。ところで、地殻斜と海溝とは似たところがあります。両者とも海底のくぼみであり、くぼみそのものの深さは一〇キロメートルにも達することがあります。また地殻斜も海溝も大陸成長のフロントをこえた海側にあります。そういう意味で両者はよく似ています。ただ地殻斜には堆積物がたまっており、海溝にはそれがたまっていないという違いがあります。この違いを無視して言えば、地殻斜は海溝のなれの果てと考えられるの



マンテル対流の断面

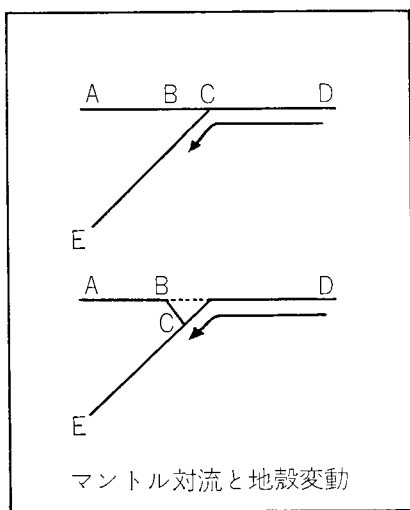
です。

太平洋では、その東南にかたよったところにある東南太平洋海膨へ向けて、地球内部からマンテル対流が上がってきます。そしてそこでマンテル対流は左右に分かれて水平に進む。西北へ向けて水平に動き出したマンテル対流は、日本海溝のあたりから地球内部へ向けて沈みこんでゆく。また一方東南へ向けて水平に進み出したマンテル対流は、南米の沖にある海溝部分から地球内部へもぐりこんでゆく。日本付近で地震や火山活動をさかんにしているマンテル対流が、このうちの前者であることは言うまでもありません。それでは次に、このマンテル対流が日本でおこる地震にどういった影響を与えているかをみてみよう。

●マンテル対流の地球内部への沈み込みが地震の原因

日本の太平洋岸には太平洋へ向けてつき出した幾つかの半島がある。房総半島、三浦半島、四国の室戸岬などがそのよい例です。ところでこれらの半島は奇妙な動き方をしています。

地震と地震の間の時期には、半島の根もとに対してその先端が、一年に一センチメートル程度のスピードでゆっくりと沈降するのです。これらの地域では、約一〇〇年に一回ずつ大地震がおこっています。したがって地震と地震の間の時期の長さは平均して約一〇〇年で、その間の沈降量は一メートルにも達します。そして沈



降量がこの程度に達したところで大地震がおこる。大地震がおこってからはかってみると、地震に先立つ約一〇〇年間の沈降がほぼご破算になっている。すなわち、地震の際に、半島の根もとに対してその先端部が約一メートルはね上がるのです。太平洋へつき出した日本の半島では、このようなことがくり返しておこっている。どうしてこのようなことがおこるのか、その理由を一九六八年に最初に明らかにしたのは私と現在カリフォルニア工科大学の教授をしている金森博雄さんです。以下に述べる現象の説明は今ではたいへんポピュラーになり、新聞やテレビなどでも常識としてとり上げられています。また映画「日本沈没」の中では、私自身がその説明をしています。日本の太平洋沖にある海溝の近くからマントル対流が地球内部へ沈みこむために、それに引っ張りこまれて半島の



先端が沈降する。沈降量が一年に一センチメートル程度になるのは、マントル対流のもぐりこみのスピードがこの程度だからです。根もとに対してその先端が沈降する半島は、その一方の端を固定し他端に下向きの力を加えて押し下げた子供の学習用の下じきのようなものです。力を加えて他端を押し下げれば下げるほど、もとの位置へ戻ろうとする下じきの反撥力が強くなる。そしてやがて反撥力が押し下げの力を上まわった時、下じきは反撥してもとの位置へ戻る。このような下じきの押し下げと反撥とが、そのまま地震と地震の間の時期及び地震の時の半島の先端の沈降及び隆起に対応するのです。これまでのところでは、太平洋に近い日本の陸地の上下方向の動きについてだけ説明しました。地震と地震の間の時期及び地震の時に太平洋に近い日本の陸地は水平方向にはどういう動

きをするのだろうか。これまでに説明したマントル対流論に基づいてその予想を試してみよう。太平洋の海底が日本へ向かって押しよせるために、地震と地震の間の時期には、太平洋に近い日本の陸地は太平洋から押されて圧縮されるだろう。しかし、圧縮されればされるほど、もとへ戻ろうとする陸地の反撥力もまた強くなります。

そしてこの反撥力が太平洋の圧縮力にうち勝った時、陸地は反撥してもとへ戻る。すなわち、地震の時には太平洋に近い日本の陸地は太平洋に向かって背のびをする。このように考えると、三角測量その他をおこなって日本の各地の水平方向の動きを調べた時、太平洋から押されるような動きが目立つ場所ほど、その場所で大震災の危険が迫っていると考えてよいことがわかります。そのような場所が、現在の日本には三カ所あります。北海道の根室及び釧路の近く、東北の三陸地方及び駿河湾付近です。南関東では、一九二三年の関東地震によって地面の上下及び水平方向への動きが一度ご破算になったために、危険性はそれほど迫っていません。

●地震予知に必要な 3つの要素

日本の地震の大部分は太平洋岸でおこっています。また太平洋岸には東京・大阪その他の日本の中枢都市があります。したがって、これらの地域でおこる地震の予知ができるということ

●ことし5月9日に起きた伊豆沖地震。くすぶり続ける現地・南伊豆中木では雨が降り止まず救出活動も難航した（共同通信提供）



であれば、その利益ははかりしれません。これまでに説明した太平洋に近い日本の陸地の上下及び水平方向の動きの特徴が、このような地震予知に役立たないだろうか、とは誰でも考えることです。

いったいこのような地震予知の可能性は、現在どの程度なのだろう。

地震予知が意味をなすためには、地震の大きさ、おこる場所及び時についての予知がなされなければならぬ。地震の大きさにかまわなくて予知をすれば、その予知は必ずあたる。人体には感じないような小さい地震ならば、日本全国で四六時中おこっているからです。また地震のおこる時を問題にしない予知であれば、その予知も必ずあたる。くり返し述べてきたように、大陸と海との接する部分にあり、大陸成長のフロントである日本では、かなり大きい地震がいつかは必ずおこるからです。これらのことを考え合わせて、一般市民にとって意味のある地震予知のサンプルは次のようなものであると私は考えています。「ここ二年内に、南関東で、関東大地震級の大地震がおこる」。地震予知の意味がこのようなものだとすると、そのような意味の予知は、現在それができないだけでなく、将来ともできないだろう、と私は考えています。これまでに述べたことから明らかなように「大きさ、場所、時」という地震予知の三要素のうち、最初の二つについてはある程度の予知ができます。たとえば「駿河湾付近で、関

東大地震級の地震がおこる可能性が高い」という予知であれば、日本の地震学者の誰でもが賛成するだろう。しかし、これでは予知としての意味をなさない。つまり、地震予知の三要素のうち、最後の「時」についての予知がもっともむずかしく、将来ともその予知は不可能であろう、と私は考える。

先にも述べたように、日本の太平洋岸の各地域では、一〇〇年に一回程度の大地震がおこっています。また南関東については、河角広博士の六九年周期説なるものがあります。これらを用いて、地震のおこる「時」の予知ができるのではないか、という人がいるかもしれない。これは地震の周期に対する誤解からきた考え方です。六九年周期説といっても、それは正確に六九年ごとに南関東で大地震がおこっていることを意味するものではない。南関東で大地震がおこったその翌日に次の大地震がおこるかもしれないし二〇〇年も三〇〇年も次の大地震がおこらないかもしれない。このような不規則な大地震の間隔を平均したものが六九年なのであって、それは地震がおこる「時」の予知にはほとんど役立たないものです。大地震が明日おこるかもしれないし、一〇〇年先におこるかもしれないといわれたのでは、一般の市民はどうしてよいかわからない。彼らはその一生の間、大地震の到来におびえなければならぬからです。地震は活断層に関係しており、その活断層がどこにあるかはある程度たどられている。それ

らの活断層に四六時中注意すれば、地震の予知ができるはずである、という人もいるだろう。しかし、活断層は日本中のほとんどいたるところにあります。したがってそれらのすべてに監視の目を光らせることはできない。仮にそのようなことができたとしても、ある活断層がいつ動き出して地震をおこすかを予知することにはできないだろう。活断層が動き出すことによって地震がおこるのであって、たとえば地震のおこる一日前から活断層が動き出すというようなことはないからです。

大地震がおこるとその後でこれより小さい地震がひき続いておこり余震と呼ばれています。

もし大地震の前に、それよりも小さい「前震」とでも呼ぶべき地震がおこるとすれば、それは大地震の予知に役立つはずですが、このような前震をともしなった地震がないわけではないが、その数は極端に少ない。また前震をともしなかった地震の多くはいわゆる群発地震です。松代地震のように、これはそれほど大きくない地震が数多くおこるものであり、そのうちのどれを他のどの地震の前震と呼んでよいのかわからない場合が多い。このような群発地震では、地震の予知はほとんど意味をなさない。同程度の大きさの地震が引き続いておこるからです。

●地震予知は

将来とも不可能

このように地震の予知が困難なのは、地震が

地殻の破壊に関係した現象であり、また破壊は確率統計現象だからです。この場合、われわれの手中にあるのは、たとえばサイコロをふって六の目が出る確率が六分の一であるというのと似た統計的な法則であって、サイコロの次の目が丁と出るか半と出るかを言いあてるのに役立つ法則ではない。先に述べた南関東における地震の六九年周期も、これと似た統計的な法則であって、来年関東大地震がおこるかどうかを言いあてるのにはまったく役立たない法則です。

しかし、人間には未来を盗み見たいというもって生まれた欲望がある。そのためであろうか、町の古い師から専門の地震学者まで、地震の予知をしようとする人や、したと称する人々が次々に現われます。ついこの間も、何月何日の何時に大地震がおこると予知した新興宗教の教祖が現われた。しかし問題の時間に大地震はおこらず、その責任を感じてこの教祖が割腹自殺を企てた。この人のように責任を感じるのはまだましな方で、大多数の古い師も、またそれを報じるマスコミの方も、あたらない地震予知のアフターケアーをしにくれたことがない。こうなれば何でも言ってみた方が得ということになって、それでこの種の地震予知が後を断たないのだろう。一〇年ほど前に、私はこの種の町の古い師につきまとわれて困ったことがあります。その人はほとんど毎日のように私へ葉書をよこして、今日こそは地震がおこると言ってくるのです。東京では数カ月も待ってい

ば必ず人体に感じるような地震がおこる。そのような地震がおこった時に、それを自分が予知したという証人に私になつてくれるとも思つたのだろう。実際、そのような地震の後に、この人は必ずこの意味の葉書をよこしました。しかし、私はこの種の手紙や葉書には一切答えないことにしている。この場合にも、私はかたくなにその原則を守った。しびれをきらしたこの古い師は、やがて私へ葉書をよこさなくなりました。

大地震がおこると間髪をいれずその地震の予知をしたことをにおわせるような手紙や葉書をマスコミあてに送り出す地震予知マニアもいます。

こうなると郵便局での消印の日時までが問題になる。言うまでもなく、地震の予知は地震がおこる前になすべきものであつて、地震がおこってから予知をするのでは話にならない。

町の古い師や地震マニアだけでなく、専門の地震学者と称する人の中にもこの種の予知をする人がいて、それで問題がますます混乱します。たとえば地震の前に異常な地殻変動や電気抵抗の変化があつたことを、地震がすんでから言い出す人がいます。しかしその人は、これと似た異常の後で地震がおこらなかつたたくさん例をまったく無視し、いつも都合のいい例だけをとりあげています。また一昨年の釧路沖地震の際に、この地震の予知めいたことを議会の証言の中で述べたと主張する地震学者が現われ

ました。この場合にも彼は、巧妙な言葉のすり替えをおこなっています。彼は問題の釧路沖地震がいつおこるかについてはまったく述べないで、このあたりに大地震の危険性が迫っていることだけを主張したのです。先にも述べたように、このような予知ならばいつでもそして誰でもできる。根室釧路沖、三陸沖及び駿河湾がこのような大地震の迫っている場所です。しかし、いつ地震がおこるかについての予知がない限り、それは地震の予知としてはまったく意味をなさないのです。

昨年（昭和四八年）の春頃に、地震予知に関するシュルツ理論なるものがマスコミでとりあげられ大騒ぎになったことがあります。地震波には縦波と横波と呼ばれる二つの波がある。このうちの縦波の速度が減少し、その減少がある期間続いてもとに戻つた後で地震がおこるといふのです。そして縦波速度が減少している期間が長ければ長いほど、これに引き続いておこる地震のマグニチュードが大きいといふのです。マグニチュード七・九の関東大地震級では、それに先立つ縦波速度の減少期間の長さが約三〇年です。このことだけからでも、このシュルツ理論が大地震の予知には役立たないことがわかるだろう。ここで必要な精密観測を続けるには、三〇年という月日が長すぎるのです。こういうこともあつて、最近ではより小さい地震の予知にシュルツ理論を使う試みがなされています。たとえば今年のはじめ頃に、カリフォルニ

ア工科大学からウィットコムという学者が、シュルツ理論に基づいて「近いうちにマグニチュード五・五程度の地震が南カリフォルニアのリバサイド付近におこるだろう」と予知した。そして予知したのとはずつと小さいマグニチュード四・一の地震が二月におこつたと報じられている。ここでもまたちよつとずるい話のすりかえがおこなわれています。

すなわちマグニチュード四・一の地震のエネルギーは五・五の地震のエネルギーの約一〇〇分の一であつて、これでは「大きさ、場所、時」という地震予知の三要素のうち「大きさ」の予知をミスしています。

●ポイントは災害を 最少限に食いとめること

以上、ややぐどぐどと地震予知の現状について説明しました。地震の予知、特にある場所ですべて「いつ」大地震がおこるかについての予知が絶望的に困難であることを知ってほしかったからです。このように、いつおこるかについては何も言えないけれども、大地震は必ずやってくる。それは大陸と海と接する部分にある日本に住む私たちのいわば宿命と言つてよいものです。それでは、私たちはただ手をこまねいて地震がやってくるのを待たなければならぬのだろうか。そんなばかげたことはない。問題のポイントは、大地震と大震災とを区別することである。仮に地震の予知ができて、その地震の

発生をくいとめることはできないし、そのままぼんやりしていたのでは地震にともなう災害を減らすこともできない。これを逆に言えば、地震に備えて平生から準備をしておけば、地震の予知などはしてもらわなくてもよいし、さらにさかのぼって言えば、地震はおそれるにたりないものです。

このところをもう少し詳しく説明しておこう。日本の震災の大部分は実は火災によるものです。たとえば一九二三年の関東大地震で約一〇万人の人が亡くなっています。本所被服廠跡で約四万人が焼け死んだことはよく知られている。ところで、この地震の際に、家がつぶれてその下敷になって死んだ人の数は約一〇〇〇人であったといわれている。すなわち、地震にともなう火事で死んだ人の数が地震そのもので死んだ人の数の約一〇〇倍になるのです。関東大地震の物的損害は、当時の金にして約五〇億円であった。そしてこの場合にもまた、損害の大部分は火災によるものであり、地震の直接の損害は火災による損害の数一〇分の一であった。つまり、地震にともなう火事の発生さえくいとめられれば、地震の災害は一躍数一〇分の一になる。数一〇分の一でもゼロではないが、数一〇に比べては一はとるにたりないものです。

くり返し述べたように、地震の予知は将来とも不可能です。しかし地震にともなう火災をなくすことは今すぐにでもできます。学問的に言えば、火災を防ぐ問題は、自然科学的な問題

というよりもむしろ、社会科学的な問題であるといった方がよい。もっと端的に言えば、地震にともなう火災をなくす問題は結局は都市問題です。さらに問題を日本一の大都市である東京に限り言えば、結局は江東地区での火災の広がりをおさめたいといふことである。関東大地震の際にも、東京大空襲の際にも、火災は江東地区に集中していた。そして二度あったことは三度ある。「江東地区の不燃化」こそが国における地震対策のポイントである、と私は考えます。政治と科学の総力をあげて、われわれは即刻この問題ととりくむべきです。このモデル地区での経験はわが国における地震対策を地についたものにするだろう。その時になって初めて、われわれは地震の予知計画や地震の際の緊急避難地の設定などがいかにばかげた地震対策であったかを知るだろう。

以上のような主張を、私はことあることに叫び続けてきたし、これからも叫び続けるだろう。しかしこの叫びが実行に移される日はまだ遠い。それまでの間にも地震は容赦なくわが日本列島を襲うだろう。その時にわれとわが身を守るために、私たちが平生から心がけておくべきことがいくつかある。それらについて以下で述べることにしよう。

(1)あわてて外へとび出してはいけない。屋根瓦などが頭の上へ落ちてくるからです。家の中の安全な場所をさがし出してそこへ身をよせるのがよい。天井や壁が落ちてきても大丈夫なよ

うな、大きくて丈夫な机の下などが安全です。本箱のように中身が重くてすわりの悪い家具のかたわらは避けた方がよい。窓ガラスやタイルの破損にも注意せよ。このようにして最初の一分が過ぎたらまず安心です。どんなに大きい地震でも、最初の一分を過ぎれば、地震による直接の被害は去ったと考えてよい。(2)くり返し述べたように、地震による被害の大部分は実は火災によるものです。したがって、大地震だなど感じたら、まず火の始末をすることが大切です。石油ストーブを消し、ガスの元栓をしめよ。地震が少し落ちついたら、めいめいで家のまわりを調べてとび火に注意する。近所の人と声をかけ合って火もとの注意をし、また火をほやのうちに消しとめるべきです。

(3)平生から食糧その他の準備をしておき、また家族がおちあうための場所をあらかじめうち合わせておくのがよい。またトランジスタラジオを用意し、ラジオを通して流される情報に注意し、秩序正しく行動せよ。(4)自動車に乗って避難するというようなばかげたことをしてはいけない。このような自動車でいっぱいになったハイウエーは新しい火もととなり、消防活動もこれによって妨げられるだろう。

(五八ページの写真は、大正一二年九月一日東京・神田神保町付近の焼野ヶ原風景 共同通信提供)

(この記事中の図版はNHKブックス「地震の科学」「地球の科学」から一部引用しました)

久保田社長、熱海でUFO講演

熱海ワイズ・メンズ・クラブ月例会で

去る一〇月二八日、静岡県熱海市のニューフジヤホテルで開催された熱海ワイズ・メンズ・クラブの月例会で、コズモ出版社久保田八郎社長はUFO問題について講演を行なった。このクラブはキリスト教の友愛精神に基づくYMCAの協力奉仕機関であり、毎月例会を開いて会員の親睦をはかっている。

当日は沼津ワイズ・メンズ・クラブと合同で行なわれ、出席者は約一〇〇

名。和気あいあいたる清純な雰囲気の下にプログラムが進行し、六時半からの「卓話」で久保田社長が登壇。スライドを映写しながら「UFOへ空飛ぶ円盤」とは？と題して約四〇分間UFO問題について熱弁をふるい、多大の感銘を与えた。特に旧新約聖書に出てくる古代のUFOの出現に関する記述の説明は出席者の関心の的となったよう、聖書の解釈に新たな視野を開きかけとなった。

日本超科学会雑誌

超科学

第2号「スプーン曲げの実証」送料共500円

遂に日本にも学会誕生！

各権威執筆＝関 英男・政本和三・内田秀男・市村俊彦
橋本 健

今なら入会金1000円、年会費3000円で誰でも入会できます。

●会員は下記の品1割引／

超心理学実験用機械器具

- 四次元波受信機(4Dメーター) サボテンの歌が聞け、ウソ
定価39,000円 送料1,000円 発見機としても使用できます
- 超心理学実験機(念力測定器・サイメーター)
定価15,000円 送料1,000円 (小型)9,500円 送料500円
- ESPカード 定価500円 送料55円
- 魔法の振子 定価400円 送料55円

〒248 鎌倉市小町1-15-17 TEL 0467(25)3035
(橋本電子研究所 所長・橋本 健)

日本超科学会

〈口絵カラー写真説明〉

東京中野区上空のUFO

撮影者中道了丈氏(五五歳)は元NHK調査室長・現NHKサービセンター専務理事。中野区東中野にお住まいのUFO研究者。むかしからUFO問題に多大の関心をよせてこられたが、はからずもUFO撮影というチャンスにめぐまれた。以下は同氏の手記である。

「いつも貴誌に恵投ありがとうございます。御礼の微志にもなりません。去る九月三〇日夜、小生がはじめて撮影に成功したUFO(まさにUFOで円盤かどうかはわかりませんが)のスナップ二葉、昨日写真屋からプリントが出来てきましたので、何かの役立てばと存じ、とりあえず謹呈申し上げます。私自身のアルバム用もこれから焼増しを頼むぐらいですから、他誌、他者には一切提供しておりませんので、ご自由にお使い下さって結構です。

●撮影日時 昭和四十九年九月三〇日午後九時三十分頃 約二分

●場所 東京都中野区東中野二丁目三十八、中道了丈自宅

二階の窓から光体を目撃。二〇倍の双眼鏡で見ると四つの光点の集合。一

機の四光点が四機の近接編隊か不明確であるが、通常の航空機として見ると光点の点滅が全くないのと、光点の配列がスクウェアであり、かつ中央の光点が赤味がかっており、翼端灯として胴体灯としても、いずれも不自然。

東南方の水平視線から約三〇度上空に発見。コダカラーIIフィルム装填のニコンF2に急拠ニッコール二〇〇ミリ望遠を装着し、東方から南西方に横移動する光跡をF4開放、シャッターはバルブで約一〇秒ずつ二回撮影したが、東側窓からの追尾が死角になり、南側窓に移動して更に一枚同様の方法でシャッターを切った。ただし三脚を用意する時間的余裕がなく、窓枠に肘を固定したものの、望遠レンズの手持撮影であるので(かつシャッターBのためファインダー視野暗黒であるから、ブレ確認不能)かなり手ブレを起こしていることは否めない。

得られた映像は微震動運動のように見えるが、目視像はかなり安定した飛行で、ほとんど直線航跡であったので念のために申し添える。

同夜ボラロイドカメラによるライティング・ライツ写真も撮れた

科学トピックス

宇宙から

年10キロのダイヤ

●いん石と共に降下

ソ連の地質学者ユーリー・ポルカノフ、宇宙物理学者エドワード・ビトリチェンコ両氏は毎年10キログラムのダイヤモンドがいん石に混じって地上に降ってくると8月5日発表しました。両氏によるとこのダイヤは直径0.3ミリ以上でいん石が破壊したあと地上の岩石の一部となりチタニウム鉱床に多くくっついているだろうといっています。

それというのもソ連の地質

学者が最近カザクスタンや西シベリアなどでこうしたダイヤを発見した事実によって裏付けられたという。大きさは小さいが個々のいん石中の含有率は大体2%ぐらいで地上で通常採掘されるよりはるかに高率です。

博士らは地上のダイヤと宇宙のダイヤとは含有物に差があるので、生成年代がわかつている岩石中の宇宙ダイヤの含有率は、地球の地質時代にどのくらいいん石が降っていたかを知るうえで貴重な指標になるといっています。

2万年前の人骨？を発掘

●「原人」の大腿骨

中国山地の国定公園帝釈峽の観音堂洞穴遺跡（広島県神石郡神石町永野）で8月12日2万年前近くと推定される旧石器時代の「原人」の骨の一部とみられる骨片が発掘されました。発掘に参加した新潟大医学部の小片保教授（解剖学）は「人骨にまず間違いのない」と断言しており、牛川人（愛知県）、三ヶ日人（静岡

県）など旧石器時代の人骨発見に匹敵する考古学上の画期的な発掘として注目を集めています。

広島大学を中心とした帝釈峽遺跡群発掘調査団の団長・松崎寿和・広島大学文学部教授は「旧石器時代末期の人類の部類にはいるざっと2万年前近くの人骨で、大腿骨の部分とみられる。現生人類（ホモ・サピエンス）の祖先であり、ここで20万年前の人骨が出ることは間違いないと確信している」と説明しています。

冬虫夏草の新種を発見

●小笠原で米沢の清水氏が

冬は虫に、夏はキノコになる冬虫夏草（とうちゅうかさう）が、これまで分布しないとされていた小笠原の母島、父島でこのほど発見されたと7月、山形県米沢市熱帯植物園の清水大典園長（51）が発表しました。

これはオガサワラハナゼミタケとオガサワラクモタケと呼ばれる新種で、同島でこれまで数多くの学術調査団がは

いつているが発見されず生物分布地理学上で空白地帯となっていました。

オガサワラハナゼミタケはオガサワラハナゼミに寄生し高さ5センチ、茎が樹枝状の淡黄色をしている。6月28日父島の初寝山（海拔20130メートル）のモクタチバナ、コゴガシなどの茂る森の中で発見しました。

オガサワラクモタケはトルビエラ属のクモに寄生し、代表は白色の菌糸膜で覆われており、7月1日、母島の石門山（海拔30メートル）のオガサワラブワ、ウドノキ、モクタチバナが茂る森で見つけられました。

冬虫夏草はこん虫、クモ類に寄生するキノコ的一种で冬は虫として活動し、夏はその虫の形を一部に残したままキノコとなるもので、古くから中国で研究され薬に用いられてきました。この発見は世界で二、三番目の発見として話題になっています。

大型望遠鏡を衛星軌道に

●80年代にNASA打ち上げ

巨大な望遠鏡を人工衛星に打ち上げてこれまで見られなかった宇宙を観測しよう、という「大型宇宙望遠鏡（LSI）」計画が米航空宇宙局（NASA）の手で進められています。その目標に向かってこのほどボーイング社との間で計画の一部の契約がまとまり具体化へはまりました。計画によるとNASAは長さ約13.5メートル、直径3.6メートルの、「巨大な望遠鏡」を80年代に軌道に乗せるというものの。

これまでは地上の光学望遠鏡が見られる最も遠距離の星は20億光年先のものと推定されており、これより遠くのもののは地球の大気などが邪魔をして観測不可能となっていました。これが軌道に乗ると予測もしなかった世界が開かれると期待がかけられています。

沈没した

巨大大陸の残部発見

●英米調査団が発表

米国と英国の科学調査団は7月18日、2億年前に南半球

の大部分を占めていたと信じられる巨大な大陸の残塊をフオー克蘭諸島（南米の南端マゼラン海峡の東約80キロにある諸島）近くで発見したと発表しました。

米コロンビア、英パーミンガム両大学の科学者によるとアフリカ、南米、オーストラリア、ニュージーランドおよび南端までその一部だったゴンドワナ大陸と呼ばれた巨大な大陸の大半が移動を開始したとき、今回発見された残部が沈没したといわれます。

米英科学者は音響調査を行なってフオー克蘭諸島から東1200キロメートル地点、深さ300メートルのところで、堆積物でおおわれた沈没した大陸の一部を発見したといえます。ボーリング探査の結果、これまでのなかで最古のものは6億年前の岩石があったとのこと。

この大陸は沈没する前5000年間、地中海のような暖かい気候に恵まれていたすばらしいところだったとスボークスマンは、当地オー克蘭ドで語っています。

核融合実験装置が完成

●茨城・東海原子力研究所
茨城県・東海村の日本原子力研究所東海研究所は新しい核融合実験装置（JET-2a）の建設を進めていたがこのほど完成し8月21日公開しました。

核融合炉は水素など軽い原子核が結合するさい出る膨大なエネルギーを発電などに利用しようというもので、燃料となる重水素は海中に無尽蔵にあるため実現すれば人類に無限のエネルギーを供給することになります。この原子核がバラバラの状態になったプラズマを摂氏一億度の高温のまま一秒間閉じ込めておくこの装置が必要とされてきたので、この装置への期待がかけられています。

突発性難聴に新療法

●X線造影剤で5割完治

九州大学医学部耳鼻科教室の森満保・助教授と平島直子助手は、実態不明の難病「突発性難聴」の患者に、X線造

影剤をごく少量注射し、約5割の完治率をあげることに成功しました。この病気は「現代病」の一種で、ある日突然健康な人から聴力を奪い障害者にしてしまう恐ろしいもの。新しい治療法は、森満助教授が患者を検査中、偶然に発見したのですが、他の治療法に比べてきわめて簡単といえます。

突発性難聴はストレスのある人にかかりやすい病気で全国で毎年20000〜30000人、とくに働き盛りの人に多い病気といわれます。対人的な職業の場合、発病後、転職に追い込まれる人が多く、しかも原因や根本的な治療法が不明で昨年、厚生省が特定疾患（難病）に指定された程。そのため同省の突発性難聴研究班（班長、三宅島・名古屋大学教授）が実態や治療法の研究に当たっています。

森満助教授もその研究班の一員で、昨年9月、耳の血管のX線撮影のためある患者にヨード化合物の造影剤「アミドトリゾアート剤」の注射をし、そのあとオージオメータで聴力を計ったら、ろう状態

が少し回復していることに気づいたのがきっかけ。

そのあと平島助手と共同し治療に同剤を使うことを検討し、昨10月、57歳の男の患者に7日間1〜2ccずつ静脈注射した結果、80デシベル以上（ろう状態）だった右耳の聴力が15デシベル以内（正常）に回復しました。以後30人に適用中16人が元通りに回復しました。

造影剤の特徴は完治率が高く即効性があること、人体に無害であることから副作用の心配がないことなどきわめて有用なものとされます。ただ今のところ国家公務員共済組合連合会浜の町病院（福岡）の安田宏一博士ほか一、二の大学がこの治療法を採用して効果を調べていますがアミドトリゾアート剤がなぜ効くのかはまだわかっていません。

耐性菌に効く

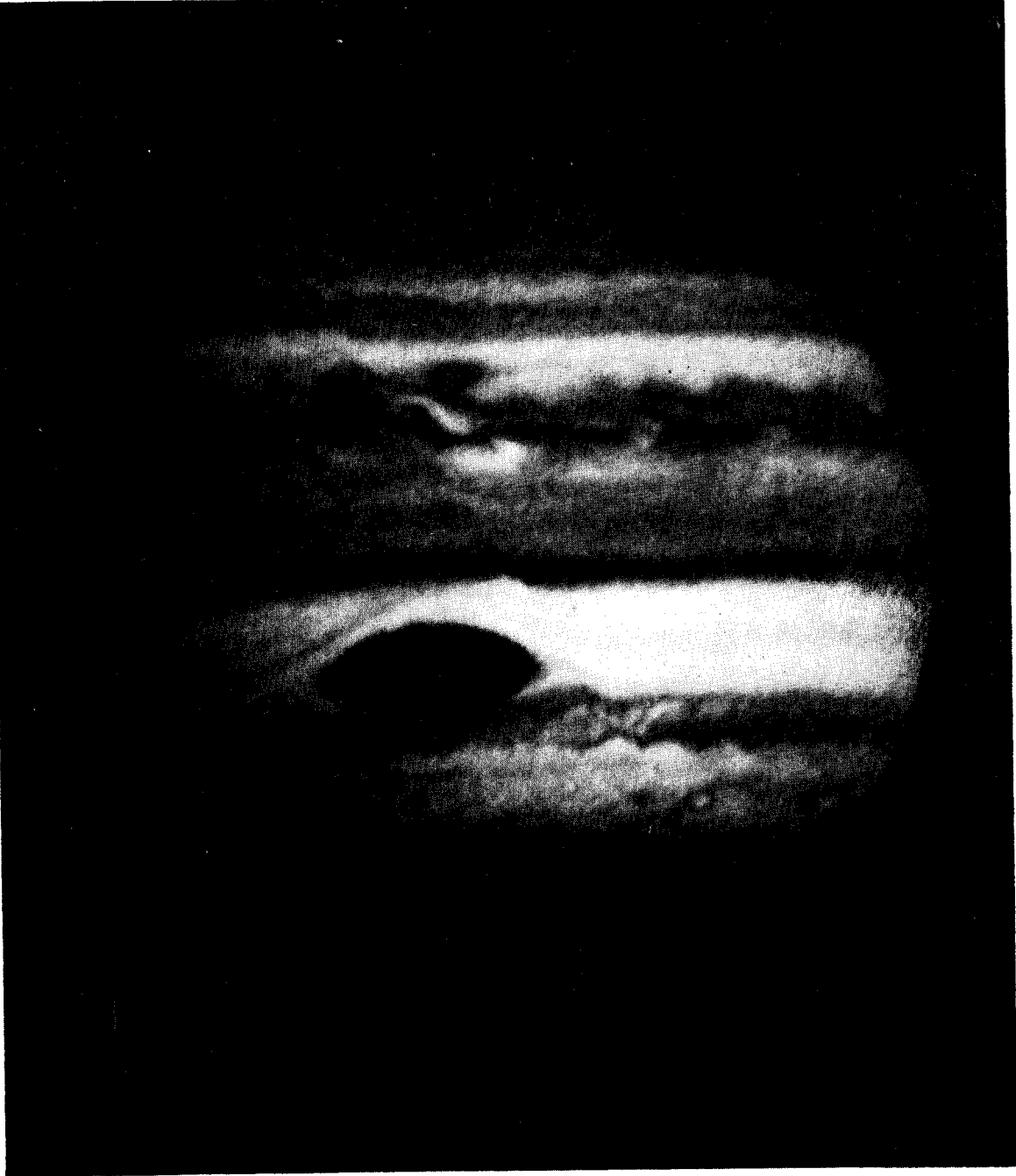
新カナマイシンを開発

●梅沢純夫教授、緑膿菌にも効果

抗生物質のカナマイシンは結核、肺炎、ジフテリアなど

広い範囲の病気の治療に使われ、数多くの患者を救ってききましたが、最近これらの病原菌がカナマイシンに対する抵抗力の強い菌（耐性菌）に生まれ変わったためカナマイシンの効き目が失われ、治療がむずかしくなっています。そのため世界中の抗生物質研究者は、現在耐性菌をやっつける抗生物質の研究を進めています。が、慶応大学工学部の梅沢純夫教授（応用化学）は、このほど耐性菌に効く新しいカナマイシンの製造に世界で初めて成功しました。この成果に薬学、臨床医学者は「実用価値の高いすぐれた研究」と高く評価しています。

カナマイシンは梅沢教授の弟である梅沢浜夫博士（文化勲章受賞者、現在微生物化学研究所長）が18年前に発見、抽出した抗生物質。梅沢純夫博士は「なぜカナマイシンが効かなくなるのか」という問題の研究を進め、7年前にその理由をつきとめました。それによると耐性菌は従来の菌が持っていなかった特殊な酵素を持っており、その作用でカナマイシンの化学構造を壊



●木星は巨大な液体ボール

●NASAは9月10日、木星探査機パイオニア10号の観測結果をまとめ発表した。木星はぐるぐる回る巨大な液体水素のボールだといっている。内部は高圧高温でわかえり、表面を彩る白や茶色の横じまは液体水素の対流で生まれた雲であり、大赤斑は数百年前に生じたあらしの渦だという。

してしまうことがわかり（専門的にはある特定の部分についている水酸基をリン酸化することという）この特定部分の水酸基を化学的に取り除いてしまえば、耐性菌の酵素作用を受けないだろうと考え、イソプロピリデンなどの化学薬品を使ってこの特定部分の水酸基だけを取り除く手法を開発しました。この手法で作った新しいカナマイシンは、実験の結果、予想通り耐性菌によく効くことが実証され、安全性も確認されました。

この新カナマイシンは「3'、4'-ジデオキシカナマイシンB」と呼ばれ、臨床試験の結果、耐性菌ばかりでなく、従来、抗生物質では退治できないといわれていた緑膿（のう）菌にも効くことがわかり、またすでに厚生省の製造認可もおりています。

巨大な液体水素 になっている木星

木星はぐるぐる回る巨大な液体水素のボールだとNASAは9月10日、木星探査機パイオニア10号の観測結果をま

とめて発表しました。その根拠はバイオニア10号の重力、熱放射、磁場測定の数値によるが、重力測定では木星が流体力学的平衡状態を保っているがそれは木星がやわらかい液体であることであることを示すというものです。

また木星の磁場は薄いドーナツ形をしておりその中心が木星の中心より2200キロも離れていることから木星内部の物質が活発に動き回っていることが推察されます。磁場の強さは雲の上層で地球の10倍以上という予想をはるかにしのぐほど強く、磁場エネルギーは地球の4億倍もあるということです。

内部は高圧高温でわきかえり、表面を彩る白や茶色の横じまは液体水素の対流で生じた雲であり、大赤斑は数百年前に生じたあらしの渦だとい

います。高圧高温でわきかえっている内部の構造は中心部には岩石や金属の核はないらしく、あってもごく小さいものであり、半径約4万2000キロまでは液体の金属水素といわれています。またその上層の

厚い2万2000キロの層は液体水素の深い「海」です。ほり覆われています。

この「海」の上空約2000キロはアンモニア、水、硫化水素アンモニアの水や液滴からなる雲の層です。

温度は中心部が3万度、表面が5500度と太陽の温度に匹敵する高温になっています。

夢の無公害車へ一歩ノ

●電磁波が動力源

英サセックス大学応用科学研究所のバルチャンドラジャヤワント教授(44)は、目下車輪のない電車の開発に進めています。同教授の研究チームの10年近い実験の末4人乗りモデル・カーを完成しました。

動力源は電磁波で特殊レーザに直流の電気を流し、そこに出来た磁場の力で車体をレールに浮かして走らせるとい

うもの。車輪はないから騒音がないうえ、磁力で動くから排気ガスの心配もないという「夢の無公害車」としてこの実用化が期待されています。

米ソ協力して原子状酸素を測定

●来年7月ドッキング飛行

アメリカのアポロ宇宙船とソ連のソユーズ宇宙船のドッキング飛行実験が来年の7月半ばに行なわれますが、その実験中二隻以上の宇宙船を使用しないといけない計画が8月下旬米航空宇宙局から発表されました。

実験とは上層大気中の原子状の酸素と窒素の量やエネルギー状態を調べようというもので、通常の大気なら宇宙船内にすえつけた質量分析計に大気を導入すれば分析できるが上層大気中の原子状の酸素と窒素は、太陽光線のエネルギーによりこれらの分子が解離して生まれるもので、できたとしたらすぐ元の分子へもどる性質があるため通常の分析器では測定できかねます。

そこでソユーズの機体に反射鏡を取りつけアポロから発

射した光を反射させて、これのスペクトルを分析することになりました。両船の間を往復する間に特定の波長の光が原子状の酸素や窒素に吸収されたり逆の光を発するのを図るため鏡を正しい方向に反射させる必要があります。そのために二隻の宇宙船が正確な角度を保ってランデブー飛行をするというものです。

これによって天気を左右する上層大気と下層大気の反応や、星の大気中での進化などを解明する手がかりが得られるのではないかと期待がかけられています。

地震予知を宇宙電波で

●NASAなどで研究

米航空宇宙局(NASA)のジェット推進研究所(JPL)は、銀河系の外側から放射される強力な電波信号を手がかりに地震を予知しようとの研究を行なっています。これはカリフォルニア工科大学地震研究所と協力して進めているもので天文電波干渉地球調査計画(ARIES計画)と呼ばれています。

方法は100キロ間隔に直径9メートルのアンテナを設置し

それに超高感度の無線地震機をつないで10億年も離れたラジオ衛星から放射される電波信号を受信するという。この2つのアンテナで受信した時間の差で10億分の1秒まで測定でき、受信時間のズレがそのまま地殻の変動を示すわけで、アンテナを地震多発地帯にいくつか設定すれば地殻変動によって地震エネルギーが蓄積されていくさまを立体的にキャッチでき、地震の発生を予測できるといふわけ。

JPLの科学者たちはこのARIES計画によって地震が起きる前にその付近の地表がふくれあがるという岩石膨張説が正しいかどうかの証明が期待されています。

最大の天体を発見

オランダのウェスターボークの電波望遠鏡を使用して研究している人の若い科学者からなる国際的なチームは8月30日、今まで宇宙で知られているいかなる天体よりも6倍以上も大きい天体を発見した

と発表しました。

天文学者のリヤード・G・ストローム(米)、アンソニー・G・ウィルス(カナダ)アンドリュース・ウィルソン

(英)の各氏は電波で銀河をとらえたところによるとその天体は長さが1800万年、地球から1兆8億光年の距離にあると述べています。

コードネームは3C236。同天体は両側に巨大なプロペラの翼のように広がる希薄なガスからなる広大な放射性物質で囲まれ中心部は光を発している星々が集まり、一つの銀河を構成しています。

ストローム氏(30)は3C236の2つの電波源のうち1つはわれわれの天の川を含めて8〜10個合わせた銀河系グループよりも大きく、また肉眼でみるとしたら満月より大きく見えるという。

ストローム氏はガス状の放射性物質は主に陽子と電子であり、それが電磁場の中を非常に高速で運動し、この放射性物質は広範囲に及び近隣の銀河に突き当たっているが、それが大変希薄なガスなのでたとえわれわれの銀河系に突

き当たったとしても地球の 대기圏に影響を与えることはないだろうと述べています。ただ電波干渉をして通信不可能になるとのことです。

またこの天体の年齢、形成の方法などは説明できずこれ、まで発見された3万の電波源の未来の予測は難しいといわれます。ただ、三人の科学者の集めたデータからこの天体は少なくとも1000万年でありあるいはその10倍の時間たっているだろうと信じています。

たばこを吸う人の方が健康？

●世界心臓学会で発表

9月初めブエノスアイレスで開かれた世界心臓病学会でデンマークの医師が、幾人かの喫煙家はたばこを吸わない人より身体の調子がよいかもしれないと発表しました。コペンハーゲンにあるビスベジャーク病院のフィン・ゲンデルバーク博士は40〜59歳の5249人を調査し、冠状動脈に異常のある心臓病と身体的活動との関連についての研究

の一端として結論に達し発表したもの。

その中で最も具合のいいのは適度の喫煙家とパイプ愛好家で、最も悪いのは葉巻や両切りタバコを吸う人であり驚くべきことにたばこの煙を肺まで吸い込む喫煙家の方がそうでない人より良い結果を生んでいるということです。

原始人「アルマス」

生け捕りへ

●ソ連コーカサスで

9月8日付けの英国の日曜新聞サンデー・エクスプレスによると、ソ連はコーカサス地方に住むと伝えられる幻の原始人「アルマス」を生け捕りにするため近く史上最大の探検隊を派遣することになりました。アルマスは背丈が2メートル以上あり、厚く黒い毛で全身が覆われていてヒマラヤ雪男そっくりといわれ目撃者も多くいるという。また足跡があったり、カボチャ、トウモロコシ、ジャガイモを蓄えているらしいという。探検隊はこれがいずれも原始人の生き残りであろうという

けか20世紀まで生きのびたと確信しているという。探検隊は来年半ばまでがんばると意気込んでいます。

糖尿病の謎を解明

糖尿病の謎がわかった、と米国立衛生研究所(NIH)のノトキンス博士が発表しました。発表は9月7日、東京・帝国ホテルで開かれた国際微生物学連合会議のシンポジウムで行なわれたもので「スライムがウイルスに感染すると糖尿病になることがネズミの実験からわかった」と述べています。

ノトキンス博士はネズミにEMCウイルスというウイルスの一種を注射すると、このウイルスにベータ細胞が集まってこれを破壊し、インシュリン分泌を止めてしまったために糖尿病が起ることを確かめました。

また同博士はウイルス注射ですべてのネズミに糖尿病を起すわけでなく、あるネズミの系では100%糖尿病になるが、別の系では発病しにくいという区別がありました。こ

れは遺伝的な差によるものとみられ、人間でも家系があることが知られていることからこの実験結果と符合するといえます。

国立予防衛生研究所の甲野礼作ウイルス中央検査部長は「人間の糖尿病患者のスライムには、カゼの原因になるコサッキー・ウイルスの抗体が多いことは以前から知られているが、このウイルスはEMCウイルスとよく似た性質を持っている。ノトキンス博士の実験から、コサッキー・ウイルスが引き金となって人間の糖尿病が起るのとは類推できる」と話していました。

馬王堆第2、3漢墓 発掘写真公表

●新華社通信が10枚を

中国の新華社通信は9月10日、2100年前の湖南省長沙の馬王堆第2、3号漢墓の発掘現場と出土文物の黒白写真計10枚を発表しました。それには初公表の2号墓出土の印章など貴重な考古写真が含まれています。

さきに日本考古学者代表团

員として訪中した関野雄東大教授(考古学)はこの種の写真から次のような見解を語っています。

たに発見されている――。

アルコール中毒は遺伝

●ドナルド博士が発表

アルコール中毒の原因は社会環境にあるのではなく、遺伝によるものとみられる研究結果が9月20日発売の全米医学界刊行の一般精神医学誌8月号に発表されました。

この研究はワシントン医大のドナルド・W・グッドウィン博士がオランダおよび米国の心理学者と共同で行ないました。アル中のオランダ人の両親を持つ男の子供とその兄弟がその対象となりましたが、子供たちは幼い頃他家に養子になり、その後異なった環境で育っていきました。ところがアル中の生みの親を接触がなにかかわらず、もう一組のアル中の両親をもつ子供とほぼ同パーセントのアル中を起こしていることがわかりました。

また、生みの親がアル中で養子に行った男の子は、アル中でない親から養子に行った男の子に比べ、アル中の発生率は約4倍であることが判明

しました。

調査によると、他家に養子に行ったアル中患者の息子20人とアル中の生みの親といっしょのままの兄弟30人を比較したところ、アル中発生率は前者の25%、後者も17%あり両親がアル中が重症なほど息子がアル中になりやすいこともわかりました。

要するに、アル中の息子はアル中の親にそのまま育てられた場合と、出生後アル中の親と別れ他人に育てられた場合はアル中発生率に大差はなかったといえます。

これらの結果からグッドウィン博士らは「私の発見はアル中は社会的、心理的、生物学者など多くの原因によるものだとする従来の学説に反ばくするものといえる」と述べています。

ソユーズ15号とサリュート3号がドッキング?

ソ連は8月27日(火)、初孫のある宇宙飛行士を含む2人の飛行士を乗せたソユーズ15号を打ち上げたと発表しました。タス通信者はジュナデ

イ・サラファノフ(32)とレフ・デミン(48)の両飛行士はさる6月25日打ち上げられた宇宙実験室、サリュート3号とドッキングする予定をほのめかしました。

先月他の2人の宇宙飛行士パベル・ポボヴィッチ大佐とユリ・アルトキン大佐は軌道上で16日間過ごしたがその大部分の時間をサリュート3号内で過ごしました。タス通信はソユーズ15号が彼らに就いては初めての宇宙飛行士である2人の飛行士を乗せて、月曜日午後10時58分(グリニッジ標準時、同日午後7時58分)打ち上げたと発表しました。デミン飛行士は成長した2人の子供と一人の孫があり世界初の初孫のある飛行士となったと伝えられます。

ソユーズ15号がスペース・ステーションとドッキングするだろうということをほのめかしたタス通信は、このドッキングによってなお一層これまでの研究や実験が継続されるだろうと発表しています。

アメリカの宇宙研究者たちは2年間の休止し昨秋から再開した有人飛行シリーズは、

来年6月に予定されている米ソ合同の宇宙飛行に備えての部分リハーサルとみなしています。

宇宙飛行士たちの体調はきわめて良く、軌道にはいりしだい直ちに飛行プログラムに取りかかったということです。また、宇宙船内の飛行士とは絶えずラジオとテレビでつながれていてつねに連絡がとられていたとのこと。

ところがヒューストンのスペースセンターが伝えるところによると9月中旬ドッキングに失敗したようです。

水星は生成初期イン石の“爆撃”を受けた

米国の無人探査機マリナー10号が9月21日再び水星の南極地域を通過し、最近接時には水星表面から4万7000キロまで近づき、4時間にわたって写真を撮影しました。マリナー管制センターのロバート・ストローム研究員によるとその生成初期にイン石の“爆撃”を受けたことが確認され、太陽系の誕生の説明に役立つといっています。

●連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤

イギリス工業デザイン協会会員
レナード・クランプ (4)



I 慣性と遠心力
H 空中浮揚現象の謎

慣性と遠心力

この記事の基本的なテーマはいわゆる重力の“力”であるが、その“力”に密接な関係をもつのは慣性の性質である。先の章で示したように、この二つは不可分の関係にある。もしわれわれが慣性（これは科学界で認められた法則となっている）の性質の存在を研究できるとして、それによって宇宙空間にもっと高度な次元の何かがあることを示し得るとすれば、今後の説明は更に寛容の精神をもって読めるだろう。慣性のもつ性質のようなものは存在しないとさえ、それは長く認められ証明されてきた種々の法則を否定しているように見える。つまりこのようなことを言えば科学の冒瀆になるかもしれないが、「慣性」という言葉はわれわれがまったく理解していないある状態のために生じたという事実を目をふさいではならない。

慣性とは何か？ われわれはそれを扱うことができるか？ 金を出して買えるのか？ それを見た人があるか？ 教科書によれば、それは一物体が“持つ”性質であるとされ、静止状態から動かされまいとする性質でもあるし、また“はずみ”をもっているときに静止状態にさ

れまいとする性質だということになっている。

高度な次元の物質のようなものが存在する、と物理学者に言えば、相手は眉毛を逆立てるだろうが、一物体が慣性のごとき触れることのできないものを“持っている”と言うとき、驚く人はいない。だが実際には前者も慣性と同じほど触れることはできないものである。ちょっと考えてみよう。一物体が他の物体に対して相対的な運動をしていないとき、それは静止の状態にあるといわれる。だがそんな状態があるだろうか？ 私はそんな状態を知らない。なぜなら知られている宇宙空間で何らかの相対的な運動をしていない物体を示すことはできないからである。

宇宙空間に一物体があるとして、他に惑星や恒星などは存在しないと仮定しよう。この物体にかかわりのある物は何もないことにする。このような物体は他の物体に関係してこそ運動できることは明白だが、他に何もない。そこで物体は運動していない。しかし物理学者はこの物体が慣性を“持つ”と言う。何かの“力”がそれに加えられるまではその位置にとどまるから

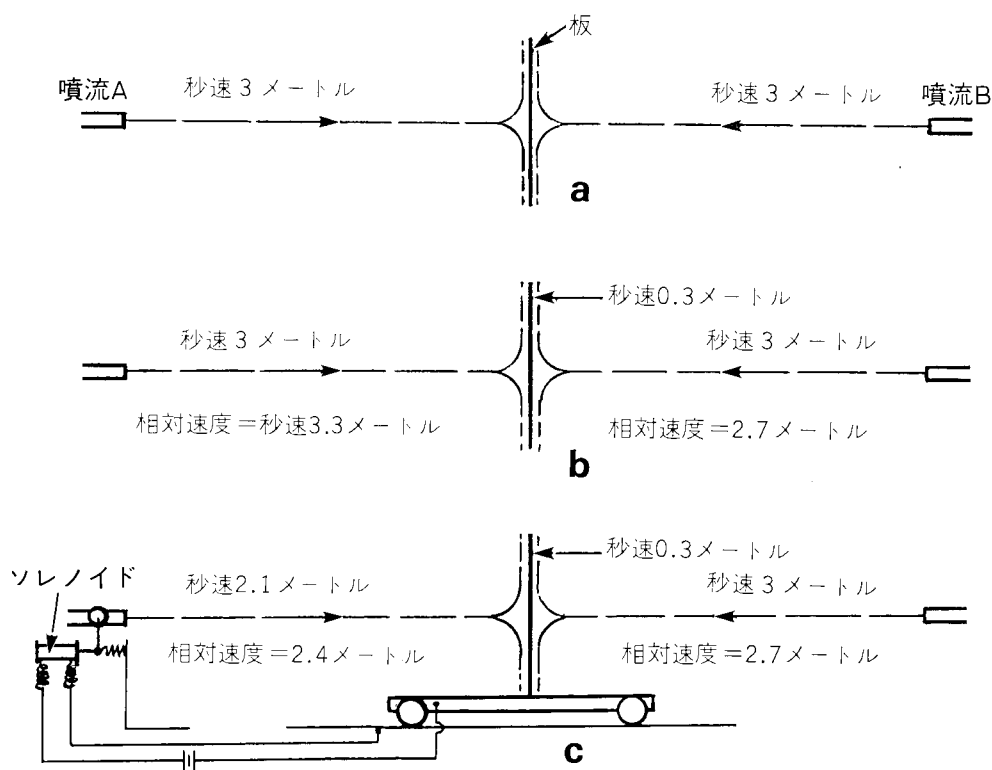
である。

さて、その物体の周囲には何もない。ここで当分の間、エーテルのようなものは存在しないという現代の考え方を認めることにしよう。そうすると、一物体が固定されない限り動きたがらない性質をもつという仮説をどうして認めればよいだろう。そこで人は周囲の空間が“他の”何かであるということに気づくかもしれない。そうすると次のようになる。もし物体が（これは原子と呼ばれる、非物質的な“力”＝複数）の集合体に対して私が与えている名称である）空間から影響を受けるとすれば、その空間は高次元“次元”の物質から成り立っているにちがいない。

ここで別な譬えを持ち出すことにしよう。これならば慣性に関する限り、数種の興味ある可能性を見出せるかもしれない。

第9図の(a)は中心に一枚の板があり、それにむかって両側から等しい力をもつ水流がつきあたって、そのために釣合がとれている状態を示している。これで明らかなのは、板に作用する力は水の噴流に比例しているということ、し

第9図 慣性と遠心力



たがって噴流の増大または減少によって力の大小が変化するということである。

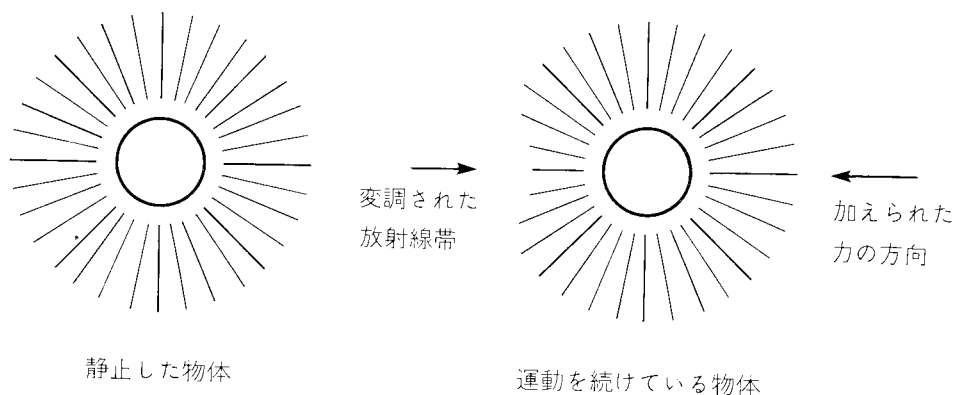
次に第9図の(b)のように噴流のいずれか一方の方向へ板を動かすとすれば、その結果、その動いた側の噴流の速度は相対的に増大し、他の側の速度は相対的に減少する。そこで板はアンバランスな圧力を受けることになり、「動きたがらなくなる」のであって、これが慣性なのである。

しかし空間の物体は最初動きたがらないで、あとで動き続けるだろう。したがって、ここにあげた譬えをこの条件に合うように調整しなければならぬ。これは第9図(c)における噴流Aをソレノイド・コックを用いてコントロールすればよい。すると今度はソレノイドが、車とレールの間に設けてある接点によってコントロールされることになる。

さて、運動を始めさせようとすると、第9図(b)に見られるようにまだ動きたがらない。しかしこの段階に達したあと、車は電気回路を完全なものにするので噴流Aの速度は減少するが、図のように噴流Aの相対速度は噴流Bの相対速度よりもまだ遅い。したがって最初の「慣性」を経験したあとの板はひとりでに動き続けるだろう。

この譬えには限度があるので、もっと複雑な説明をしなければ完全にはならないが、どのみちそれは不要である。なぜならこの場合は慣性の条件を分析する立場にあるからだ。第10図

第10図



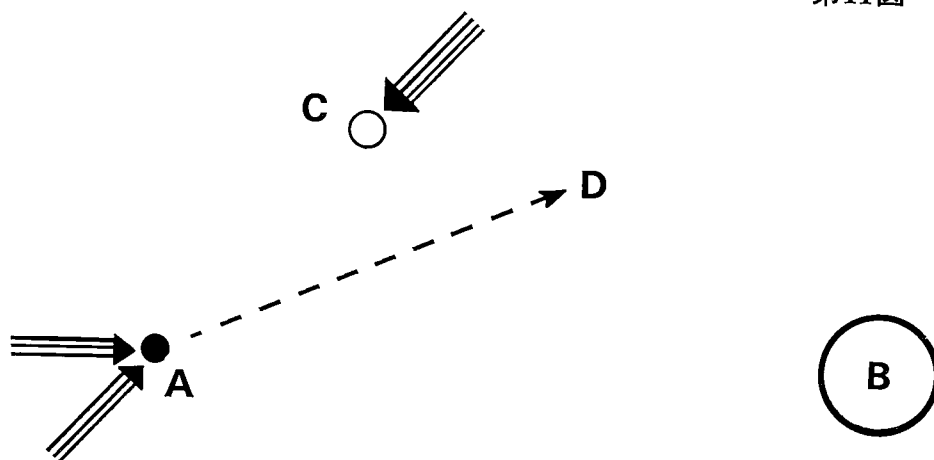
は自由空間内にある物体を示す。放射状の線はエーテル的なもの、すなわちアヴェネル氏が言っている創造波（放射線）をあらわす。

この物体が運動に対して示す抵抗は、その物体が起こすのでもなければ周囲の波動が起こすのでもない。この現象は両方に共通したもので水の噴流と板の場合にたとえられる。板を動かして続けようとして噴流の源をコントロールするのと同様に、創造波の変調によって——これは力を加えることによる——アンバランスな状態をひき起こし、その結果、物体は運動を続けるのである。

われわれは“一定の質量”と“一定の時間”における一定の圧力を得れば、一物体はある速度を得ることを知っている。この速度はただアンバランスな状態の度合の結果にすぎないし、慣性とは創造波が変調されることによって生じる抵抗にすぎないことを、この理論は示している。圧力が大であればあるほど変調も強くなり、そのため、生じる抵抗も大きくなる。しかも、圧力に正反対のこの放射線だけが変調されることは明らかである。ゆえに物体はその圧力の方向に運動を続ける。同様に重要なのは、その物体はニュートンの第一法則に従って、変調された放射線にそって動き続けるということである（私の推測によれば直線運動であろう）。

これと同じ理論は力学のあらゆる面にあてはまる。いわゆる遠心力の現象もこれで明らかになる。

第11図



第11図のAはBの「重力の」またはアンバランスにする影響によってすでに運動を起こしている物体である。しかしそこには干渉があり、そのため、Cに関してもアンバランスになる。この種の間変調の結果、BとCによって引き起こされたアンバランス効果と同一の効果をもつことになり、新しい波動がDの方向に変調されるのである。

さて、その物体は、それによって運動するための新しい種類の変調波をもっている。そしてそのように運動しようとするが、ふたたびCのアンバランス効果が存在するので、またもそこに中間変調が起こる。

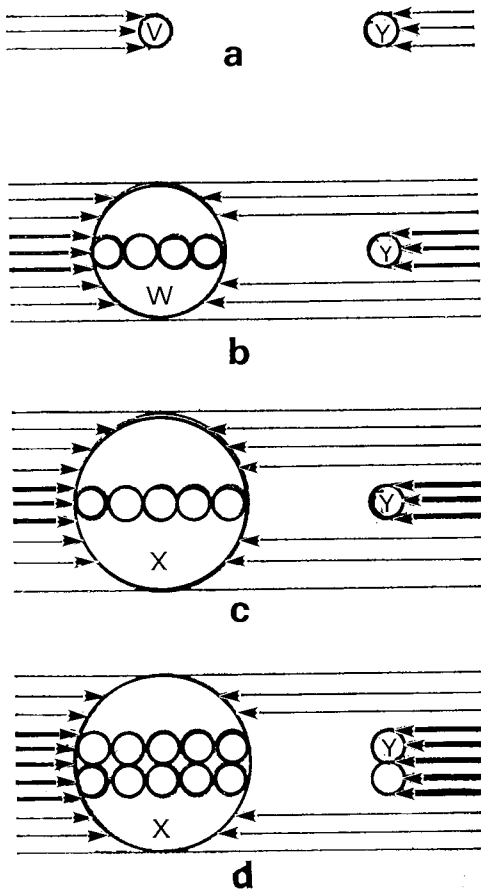
Aが渦巻状に進行してCになるか、衛星の場合のように——この場合は力や変調波が釣合を保っているのだが——それがどこまでも軌道を動き続けるようになるまでは、前記の過程は続けられる。

要点は結局、物体は進行することに新しい放射線をたえず変調させられるので、そこにはいわゆる遠心力という抵抗が示される。というよりも遠心力に対する反応が示されるのである。

これとほぼ同じ状態が原子においても存在するだろう。陽子はアンバランスな状態によって電子を捕捉する。電子同士の反発はおそらく逆の意味で起こるアンバランスな状態のためである。

この理論の重要点は、エーテル的な放射線を変調することはむずかしい、という点にある。

第12図



る。われわれは日常生活で自分の体や無生物を動かして、このことをやっている。アヴェネル氏は、懐中電灯のボタンを押すことによって同じことを行なうのだと述べている。これはきわめて簡単なことだが、奇妙にもわれわれはそれに気づかない。ロケットのごとき爆発の方法によらなくても、地球の表面から飛行体を動かすのはまったく簡単なことなのかもしれない。現在は飛行体を「浮揚」させるのに望みの方向へ、つまり上方へ、力を加える。そうすることによってわれわれは飛行体を元の状態（重力）の中に保っていた波動そのものを変調することになるのである。このエーテル的な放射線を理解することによって、われわれは他の方法を応用し

てその放射線を変調し、ごくわずかなエネルギー消費量で同じ結果を得ることができるようになる。ここでアヴェネル氏の重力に関する基本的理論について少し考えてみる必要がある。もちろん私自身の理論はある点でアヴェネル氏の理論とは少し異なるかもしれないが、その相違（があるとすれば）はささいなこと、この理論に関して根本的に重要なことではない。

重力の問題は根本的に重要であるけれども、高度な理論はこの記事の範囲からはずれることになる。しかし重力について既知の事柄を全体的な理論に結びつけることはできる。要約すれば次のとおりである。

慣性Ⅱエーテル的な放射線が変調されること

によって示される抵抗である。質量が大になればなるほど、変調される放射線の数も大となる。よって、抵抗も大となる（第10図のaとbを参照）

速度 変調波が共振によって交差線に移ってゆく割合。

はすみ 運動の方向に変調される放射線の数 $\times$ 変調波が交差線に移る割合。

加速度 連続する干渉または圧力によるアンパランスな変調波。

重力 第12図(a)の二つの等しい質量 V と Y の場合、干渉による相互のアンパランスの結果、連続的に速度の増大（加速）が起こる。

これは均等にかかる。

質量の異なる二個の物体 W と Y （第12図(b)）

の場合は、変調される放射線の数はより以上大となり、干渉によって相互のアンパランスもより以上に大となる。したがって、均等化されていない速度の連続的な増大が起こるが、これは W の中に生じる「慣性」の抵抗のためである。

もし W の質量が X にまで増大すれば、より大なる数の放射線が変調され、したがってアンパランスの度合は大きくなり、加速度も大となる（第12図(c)）。 Y の質量がいま(d)図のごとく倍になっても、それは半分の質量のときと同じ加速度で X の方へ進行するだろう。こうしたこと

はすべて日常の物理現象で見られるのである。

今述べた譬えはわざと簡単にしてある。複雑に説明することはできるけれども、深い思索をするための基本的な理論は含まれている。この理論に真理がひそんでいることを示し得るとすれば、宇宙船推進に関する他の理論の可能性を判断するのに好都合となるだろう。そうすると、これはわれわれが解決を追求している魅惑的な問題ということになる。われわれはしだいに空間と物質に関する真理に気づこうとしている。気づいたならば解答が出てくるだろう。ただしわれわれを縛りつけている古くさい考え方を捨てて、新しいアイデアの挑戦を受ければだ。

J 空中浮揚現象の謎

多数の人にとっては「神秘的な」話題の導入がなければ円盤を認めることはむづかしいと言っている。このような疑う人たちに對しては謝らねばならぬ。また、円盤マニアに對しては、次に述べる事柄を認めるのが困難であっても、忍耐強く読まれるようお願いしたい。

ロケットによる宇宙飛行の本においては、次の事柄は問題外であろうが、アンパランスなGフィールド（重力場）による宇宙飛行において

は、最も重要なことである。そこで私は自分で徹底的に調べたテーマの一部分をあえて含めたのである。そして円盤の推進法の背後にある基本的原理と今述べられる現象とは一致すると固く信じている。

この現象こそ、私が説明する基本的な理論の形成に幾分関係があるのである。私は長いあいだ熱心な宇宙飛行マニアであり、ロケットや宇宙船の設計を徹底的に研究してきた。しかしス

ムーズに、無音で、優雅に飛ぶある反重力的な力を示す現象を目撃したのである。しかもこれは驚くほど強力な力なのだ。疑う人はこの現象をインチキと片づけるだろうが、超能力現象を徹底的に調査したあとで、なおかつ納得のゆかない人はいないと言っておく必要がある。高度な科学研究を行なう価値のある諸問題がまだ残されている。それらが科学的に研究されさえすれば、現代の諸問題の多くが解決できるだろう

う。研究はしばしば勇氣と信念のある人によって行なわれてきたが、資金不足のために不十分な設備で耐えねばならなかった。そのために業績を上げるのに長年月を要するのである。もし助成を受けて十分な設備を与えられるならば、難儀な長年月をすごすことなく数週間で進展を見るだろう。こうした状態はこの科学的発見の、原子エネルギーの時代にも存在する。ハーヴェル、ロスアラモスなどの原子力研究所にいる専門家の理解を超えたある「現象」を日撃した人は世界中にいたのである。人間は理解の対象になる事象を見てきたし、研究設備を与えられて理解を試みてきたが、彼らの報告は多数のいわゆる科学者によって嘲笑されている。科学者は理解できないと言うのだ。

「空飛ぶ円盤」という言葉が聞かれるようになると、無生物の完全な空中浮揚現象をたびたび日撃した。この物体(複数)は目にも見えず触れることもできない何らかの方法で空中に静止していた。糸や磁石が隠されていたのではない。こんな状態のもとならインチキはまったく関係ない。自己暗示、幻覚なども問題外である。この現象を記録し、測定し、撮影するために科学装置が用いられた。ハーヴェルやロスアラモスで行っているのと同じことである。われわれが好もうが好むまいが、こうした現象は発生したし、今も発生している。この現象が調べられたような環境は別な事象をも含んでおり、この記

事とは関係ないが、重要なのは、忍耐力をもって調査の労をとろうとする人には、一般の科学はこの生命現象の調査において一方的にすぎないということである。たぶんそうだろう。しかし今日の物理学者が直面している諸問題の多くは、少し異なる角度から現象を研究すれば解答が出てくるだろう。彼らは研究所で見ることのできない物を見るだろう。私が見たような一トンも重量のある物体が空中に何の支えもなく浮かんでいる光景をロケットマニアが見たならば、いったい何人がそのままジッとしているだろうか？ 彼らがこれまでとってきた態度よりももう少し綿密に円盤関係の報告類に目を通すことは不自然ではないだろう。物体のいわゆる超自然的な浮揚現象でよく知られているさまざまな状態は、一般人の円盤目撃で観測されている。

われわれは理解していない物事に直面するとき、魔術的なものを期待する必要もない。万物は自然の法則に従っているのである。長い時代を通じて人間はゆっくりと自然の諸法則を理解するようになってきた。偉大な科学的発見の行なわれる現代においても、まだ宇宙の壮大な機構について学ぶべきことが多くある。

真の哲学的な科学者は自分が理解していない物事を不可能事としてすぐに無視したりすることはない。むしろ説明できない事象を説明できるように努力するのである。世の中には「少数の人」から与えられた知識情報があるにもかかわらず、みずから調査研究しようとしな

ならず、みずから調査研究しようとしな物事を不可能視して否定する人があまりに多すぎる。オリバー・ロジ卿やウィリアム・クルックス卿は自分の力で研究した卓越した科学者である。

(注)オリバー・ロジは英国の物理学者で、無線電信を含む電磁気学の研究で名高く、そのヘルツ波(電磁波)研究によりマルコーニの無線電信発明の道を開いた。晩年は心霊術に凝った。ウィリアム・クルックスも英国の化学者・物理学者で、真空放電を研究し、陰極線が電氣的な微小粒子からなることを発見し、これを放射体あるいは物質の第4態と考えた。彼も一時心霊現象の研究を行なった)

ところが、この両名がいわゆる神秘的現象に大胆に取り組んだときも学者仲間から非難されたのである。その結果、一八七四年にクルックスが円盤に応用されているかもしれないある現象を観察したというのに、われわれはいまだに花火のロケットをいじりまわしているというありがたい一九五四年を迎えているのである。私は無生物ばかりでなく人体も完全に浮揚したという例を述べたい。以下は当時の有名な超能力者ダニエル・ダグラス・ホームによる数度の浮揚実験を目撃したウィリアム・クルックス(一八三二—一九一九)が書いた記事である。

「ホームの浮揚実験の最もすばらしい光景は私の家で展開した。彼は室内の広い場所に行き、ちよつと立ってから「これから浮揚します」と

言う。すると彼はゆっくりと空間へ上昇してゆき、数秒間、一五センチばかりの位置に停止して、それからゆっくり降下した。このときは参会者のだれ一人として動いた者はいなかった。別なとき、今度は彼が私にむかって「こちらへ来なさい」と言う。そのとき彼は床から約五〇センチ空間に上昇していた。私はその間彼の足もとの空間や体の周囲、頭上などを両手でさぐってみた。また別な数度の機会に、ホームの体とすわっている椅子が床から持ち上がった。これは非常に慎重に行なわれた。それからホームは椅子の上に両足を上げてひざを組み、全員に見えるように両手を高く上げた。私は体をかがめて見たが、椅子の四本足すべてが同時に床から離れていると思った。ホームの両足は椅子の上にある。たびたびではないが、この浮揚力は参会者にも及び、一度私の妻は椅子に腰かけたまま床から浮揚した」

ホームの体が窓から出て行って路上の空間高く浮かぶという「奇蹟」が、一八六八年（明治元年）十二月十三日に、ロンドンで三名の目撃者の眼前で発生した。この目撃者とはアデア卿（後のドゥンラヴン卿）と、そのいとこのC・ワイン大尉、リンゼイ卿（後のクロフォード＝バルカレス伯）で、伯は一時英国学士院の会員であった。リンゼイ卿が書いた次の記事は興味深いものである。

「私はホーム氏とアデア卿、そのいとこと共にすわっていた。すわっているあいだにホーム氏

が催眠状態になり、その状態のまま隣の部屋の窓から外へ出て、こちらの部屋の窓からはいってきたのだ。各窓間の距離は約二・三メートルあり、足場は全然ないし、花の鉢を置くための棚が各窓から突き出ているが、この棚の幅は三〇センチしかない。

隣の窓が開かれる音がして、ほとんど同時にホームがこちらの窓の外の中に浮かんできているのが見えた。

月光が室内を照らしており、私は背をあかりに向けていて、窓台の壁に影があるのを見た。ホームの両足は窓台から約一五センチ上方にある。彼はその位置に数秒間とどまってから窓を上げて室内へ足の方からゆっくりとすべり込み、そしてすわった。

そこでアデア卿はホームが抜け出た窓を見るために隣室へ行った。それは約四五センチ上げられていた。そんなに狭い隙間からどうしてホーム氏が抜け出たのだらうとアデア卿は不思議がっていた。

ホームはまだ催眠状態のまま「お見せしましょう」と言う。そして窓に背を向けたまま仰向けになり、頭の方から間をぐり抜け、また静かにもとへもどってきた。

窓の高さは地上約二メートルである」

ホームの驚嘆すべき浮揚能力は決してユニークなものではない。東洋では人体の浮揚は公然たる事実となっている。ヒンドゥー教徒はこれがやれるという。彼らは深いリズミカルな呼吸

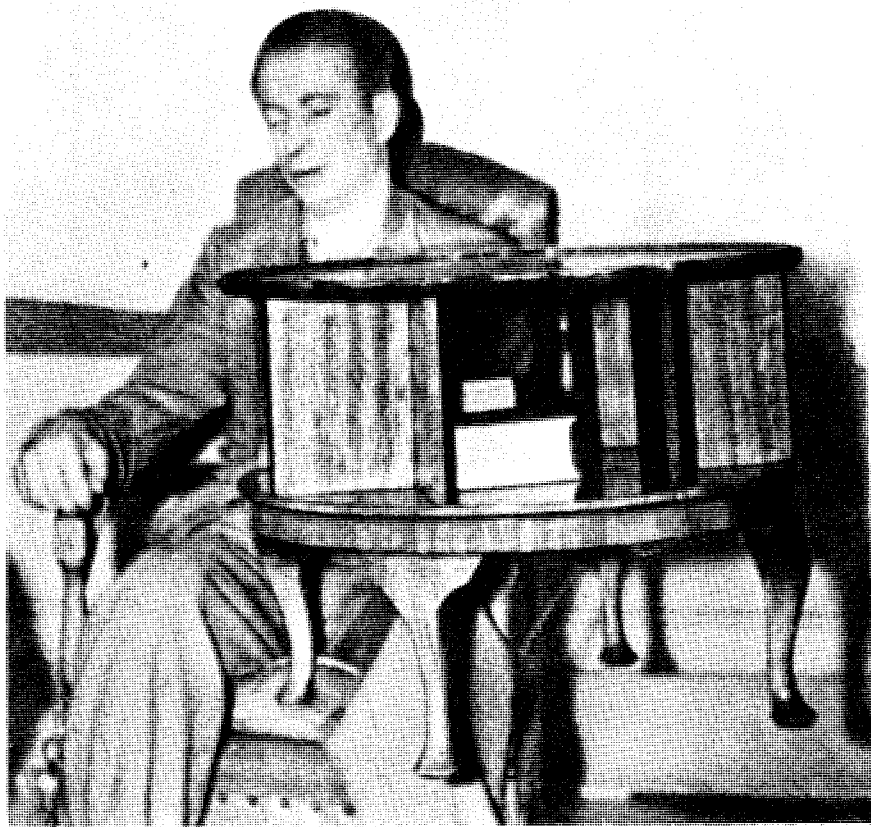
その他の特殊な運動とともに適当な精神的態度の重要性を強調している。

その道の達人の言葉によると、一定の行法をよく観察すれば、重力に反するある種の「生命力」が発生するのが見られるという。

自動浮揚を行なう人々のことが長く語りつがれている。フランスの僧院長オーガスチン・カルメが一七五一年に次のように書いていた。

「熱烈な祈禱を行なっている信心深い人々が空中に上昇して、しばらく静止した。われわれはある立派な修道士を知っているが、彼は地上からしばらく浮揚し、空中に静止する。自分でそうしようとも思わないのに、特に何かの敬けんなイメージを見たり、エクセルシス・デオのグロリアのような熱心な祈りの言葉を聞いたりすると、そうなるのだ。また、自分の意志でもないのに地面から空中へ浮かび上がる一尼僧を私は知っている。彼女自身もまったくわけがわからないのだ」

カルメはサン・ヴァンヌ・ド・ヴォルデュムの僧院長、聖リカルドの物語を述べている。この人は一〇三六年に地面から浮き上がったが、その間、ガリズン公、その息子たち、多数の将兵の面前で歌をうたっていた。また一六〇一年にはマドリッドでドミニク派の神父カルモ・ド・ショーが、スペインのフィリップ二世、王妃、文武百官の前で空中浮揚をやったのけた。「そこで一同はシャボン玉みたいに動きまわる彼の体を見て驚きの声をあげた」のである。これは



●超能力者によるテーブルの浮揚実験。ただしホームではなく別人である。

慣性がなくなっていることを意味しないだろうか。

自動浮揚について書かれた最も完全な書物の一つは、フランスの大学教授オリビエ・ルロイの著書であろう。この書の中でルロイは約二〇

〇の空中浮揚例をあげているが、その一つにアビラの聖テレサの物語がある。彼女はスペインのカルメル会の大改革の中心人物であり、一六二二年にはグレゴリー一世によって聖列に入られている。以下は彼女の異常な体験に対する

自分の反応を要約したものである。

「恍惚状態になっているあいだ、魂は肉体を生々とさせないように思われる。恍惚状態は大抵の場合くいとおめることができない。それは大抵に考えるひまもなく急速なショックとして起こってくる。すると上空へ昇る雲が大ワシのように感じられ、その翼に乗って運ばれるような感じがする。……私はしばしばその状態になるのにくいとめようとして必死になった。公衆の面前でその恍惚状態が起きるときは特にそうなるまいとした。ときにはものすごい努力によってわずかにくいとおめることができたが、あとで巨人にねじ伏せられたような疲れが出た。またあるときは全然くいとおめることができなかった。私の魂はどこかへ運ばれてしまい、ほとんどいつも頭も、ときには体全身も魂と共に行ってしまふ。それで地面から浮き上がるのであった。どうやら私がくいとおめようとするときに、私の足の下の大きな力が私を持ち上げるらしい。その力を何にたとえてよいかわからない。それは私を大きな恐怖におとし入れた。私の体が地面から浮き上がるのを見ても、どうしようもないからだ。……恍惚状態が終わると、私の体は重量がまったくなくなったかのように浮きやすくなる。あまり軽くなるので、両足が地面に着いてもほとんど感じなかった」

（注）このあと各種の神秘的な浮揚現象や、筆者クランプの自宅で行なわれた超能力的浮揚実験の詳細が述べてあるが、紙面の都合により

省略する)

こうした浮揚現象を注意深く調べると、二、三の重要な事実がわかってくる。浮揚に関連のある慣性の喪失と、聖テレサの言うような“恍惚状態”である。電流の流れた二つの電極を手握って回路にするとすれば、人体は電気ショックと呼ばれる感じを体験する。これは人体の神経系統に作用を与えるある変化が発生したのである。同様にして人体中の原子に影響を与えてその慣性を失わせれば、ある位置から別な位置へ体を動かせると考えられるだろう。しかも重力もその意味を失うだろう。このような状態が存在すると仮定すれば、原子のこのような変化は神経系統に影響を及ぼし、“恍惚状態”の感じを体験すると考えて不合理だろうか。

心の力に関してはほとんど知られていない。

しかし多くの実例がある。東洋のヨガの行者は“意志”によって自分の体を地球の重力に反して浮揚させ、空中をフワフワとただよう。ただしものすごい精神力のために疲れきっているのではあるが——。これは調査すれば目撃できる事実である。水脈占いの術は“気まぐれ”なものとして占っているが、これには原始的な器具を用いて占いの師の脳から放射する高周波インパルスを増幅するのである。われわれも内部で眠っているこの機能を応用できれば、増幅器の必要はなくなるだろう。

ヨガの行者の潜在意識が自分の体は無重量にする方法を“知っている”のと同様に、学習に

よってわれわれも意識的にも機械的にも“方法”を発見できるかもしれないのだ。そして水脈占いの師が増幅器を用いるのと同様に、われわれも自分の心の意志通りにやれるような機械的な増幅器が作れるだろう。ヨガの行者のようにひどい疲れをおぼえることもなく——。そしてその増幅器をわれわれは空飛ぶ円盤と呼ぶかもしれない！

こうした考えを認めるのがむづかしければ、科学はまだ物質の基本的な組成を理解していないことや、動物が人間の耳に聞こえない高音に反応を示すように、人間の感覚もある種の放射線に感応するという事実を考え直す必要がある。そうなる人間は感覚的知覚作用を超えた物質の高周波帯域のようなものは存在しないと言えるだろうか。

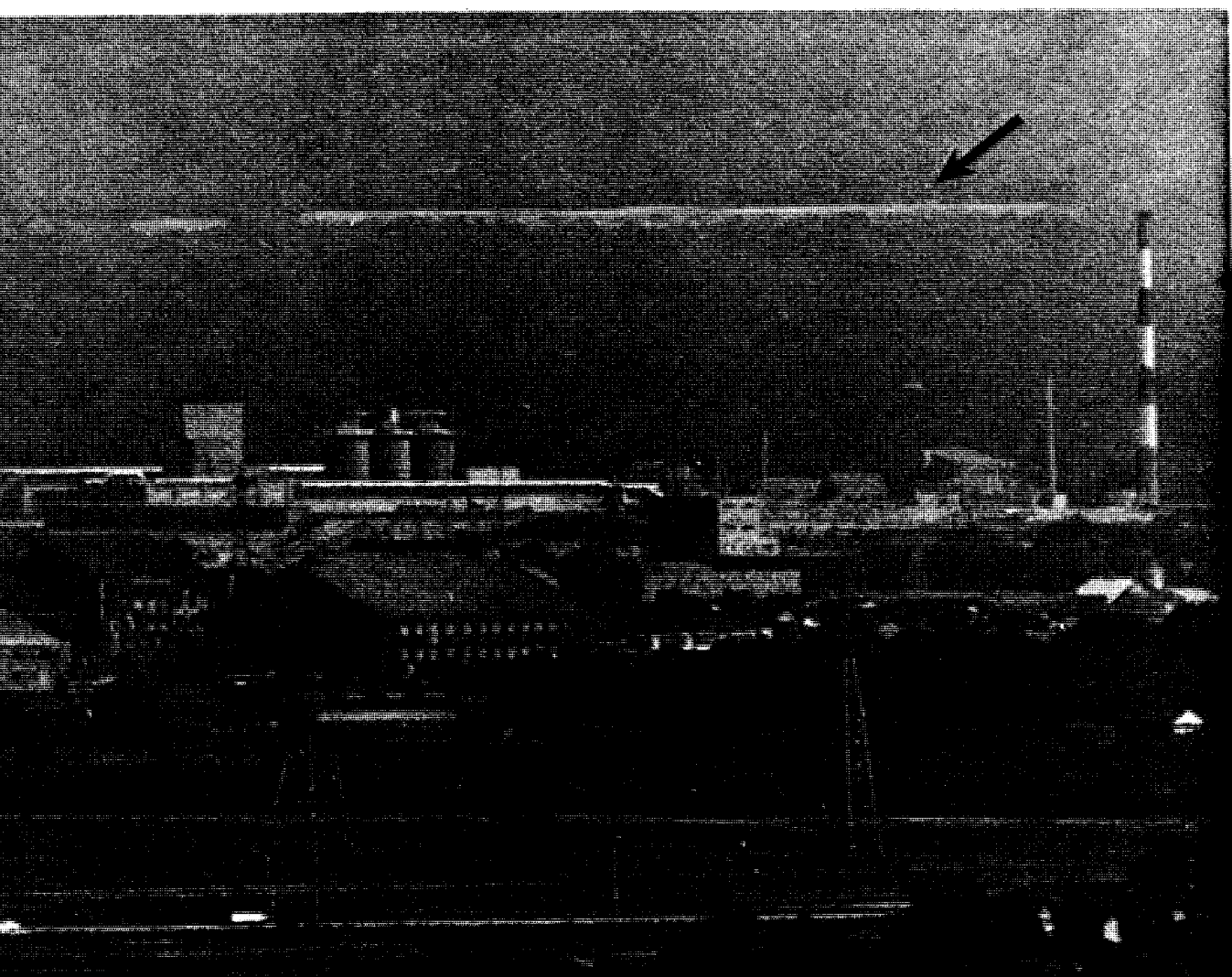
これらの事実を認識するとき、人間の手になる円盤は日常の物になるだろう。宇宙空間に住むことさえも、現在われわれが考えているような諸問題を必要としなくなるだろう。

われわれは宇宙旅行において食物、水、酸素などを積み込む必要がなくなる時代を期待してよい。“円盤人”はおそらく数千年前にその必要がなくなったのではないか。現在惑星間をロケットで飛ぶ夢は、多くの点で潜水艦の設計に似ている。船室は居室、機械設備、酸素、ライト、その他の日用品で満ちている。推進法も似ている。いずれも反動物質を放射し、船体の外には人間が自由に生きることのできない異質媒

体がある。そこで宇宙服または潜水服を着ることになる。基本的にはほとんど相違はない。

潜水艦はそれ自体の酸素供給設備を持つが、実際には周囲の海中には酸素がある。もっと効果的な方法がわかれば、海水を船内に入れて装置に導入し、酸素と水素を分離して、大量のガスを利用して燃焼させ、ガスタービンのエネルギーが得られるのである。第二次大戦中ドイツ軍はこれを実現させようとしていた、といううわさがあった。

この方法の原理は基本的には簡単に理解できる。だがロケットとなると複雑だ。しかし複雑でなければならぬという理由はない。遠からぬ昔、人々はエーオの基本的な分析法を知らなかった。状況は今も同じである。ただ多少進歩したというだけだ。それゆえ、われわれが空間とその半身である物質についてもっと知るようになったら、宇宙旅行で酸素や食物を携行する必要はなくなるだろう。同様に、触れることのできない“エーテル”を取り入れて酸素や動力用の“燃料”を作り出すことができるかもしれない。このような説はSFじみているが、数百年前に同じような印象を与えなかった科学上のアイデアがあるだろうか？ われわれの立場は少し有利である。なぜなら円盤問題にこそ、いつかわれわれ自身の空飛ぶマシンといえる物をのぞき見できる特権が与えられているからである。(以下次号。本文中の〔注〕は訳者による)



富山湾上空に謎の白線が出現!

「蜃気楼か? いやUFOだ、」

去る10月21日の午前9時半頃、富山市城山の呉羽ハイツ職員の表憲治さん(43)が屋上の望遠鏡の料金を“集金”中、岩瀬方向の沖合で銀色に輝く細長いオビ状のスジが水平にたなびいているのを発見、急報により同ハイツの従業員が次々と屋上に上がって、この不思議な現象を目撃し、大騒ぎとなった。同月20日夕方にも黒部市上空で空飛ぶ円盤の出現騒ぎがあったばかりである。

これについて富山地方気象台は「この日の気象状態は気温15.7度、北東の風7メートル、海上は波が高く、蜃気楼発生条件(5月頃、無風で、波がないこと)とはまったく逆。季節はずれの蜃気楼とは考えられない」と言っている。

(写真は北日本新聞社提供。ニコンF・600mm・絞りf32・1/60秒・トライX)

国内UFO目撃報告



① 佐藤 基 (12) 日本大学付属水沢第一高等学校2年

② 一九七四年八月二十日午後9時20分頃

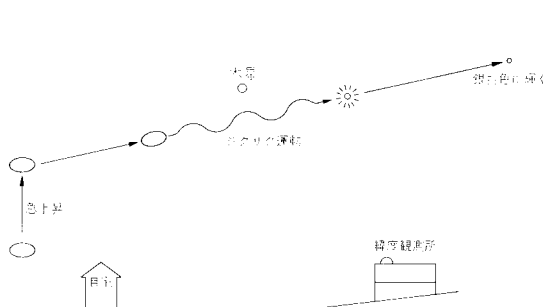
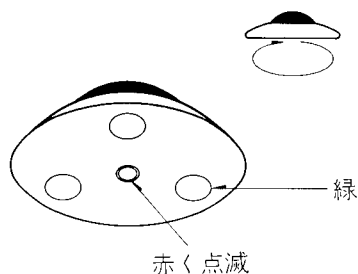
③ 岩手県水沢市吉小路26 (自宅付近)

④ 快晴

⑤ 約10分間

⑥ 佐藤庄造 (父)、静 (母)、庄子 (姉)、由美子 (姉)、佐藤俊二 (伯父)、愛子 (伯母)、美紀子 (従姉妹) の計7人。

⑦ 肉眼



⑧ 円盤。1機、15cm位の大きさ。木星より数倍の輝きで中心が赤く周りに緑の3つの回転するもののある物体。

⑨ 2階の窓から北の方を眺めていた時眼前に光る物体を見た。初めは星だと思いつつ見ているとその物体は回転しつつ同一場所に停止している様子であった。2、3分その状態が続いていた。

- ▼凡例▲
- ① 氏名 (年齢)・職業・学校名
 - ② 目撃日時
 - ③ 目撃地点
 - ④ 天候
 - ⑤ 目撃継続時間
 - ⑥ 同時目撃者
 - ⑦ 観測機器・方法
 - ⑧ 物体について
 - ⑨ 飛行状態その他
- ()内は目撃者の住所

たがやがて急に上昇して南方に移動したのですぐ戸外へ出るため階段を降りている間に物体は隣の屋根のところに達していた。それ以後は、回転しながら音もなくふわふわと飛行し続けていた。その後は速度を急にあげて、一定の方向をめざして飛び、それからまた止まった。それから、その先は静かに消えていき、姿が見えなくなってしまった。

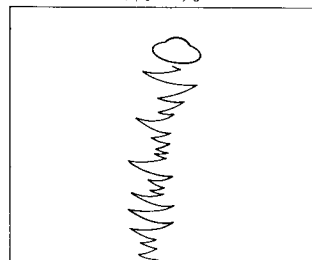
その物体が何であるかを知りたかったため水沢緯度観測所に連絡して観測してもらったけれどその物体は見られず、確認できなかったということだった。ところが私が目撃したより17日前にIBCラジオでUFOが盛岡付近を通過し、何人かが目撃していることを放送しているのを聞いていたので、この体験を本物だと信じている。

(〒023 岩手県水沢市吉小路二六)

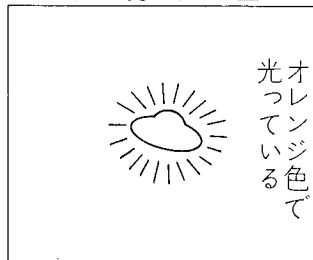
① 佐藤伸一 (15) 平塚市立春日野中学

* * *

飛び方



双眼鏡で見た図



オレンジ色で光っている

三年

② 一九七四年七月三十日 (火) 午後11時3分頃

③ 神奈川県平塚市見附町の自宅の2階から目撃

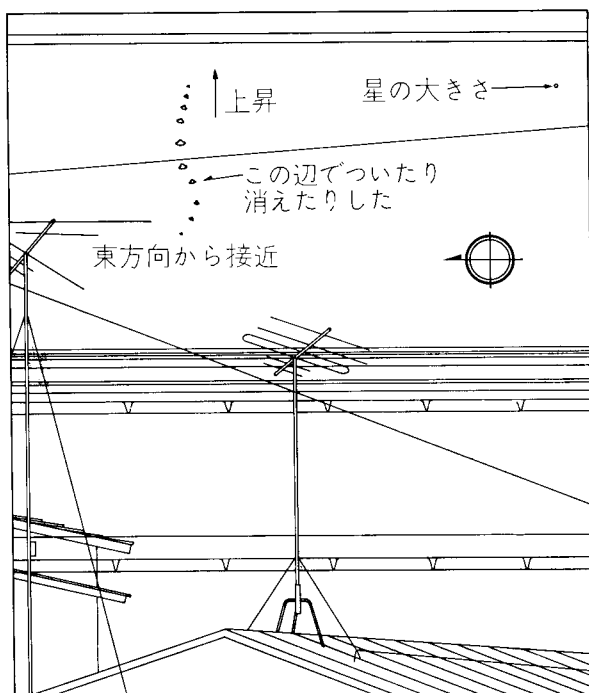
④ 薄くもり

⑤ 約5、6分

⑥ 美島英二 (13)

⑦ 肉眼、双眼鏡 (神山 成二九歳)

⑧ ジョージ・アダムスキーさんの写し



25分

③ 東京都東久留米市上空
④ 薄ぐもり

⑤ 23分間

⑥ 兄、姉、母と兄の友人3人の計6人
⑦ 肉眼

⑧ 球形、かすかにオレンジがかった白色をしていた。(一度視線をはずすと見つけにくい程度のもので、近隣の星とさほど変わらない)

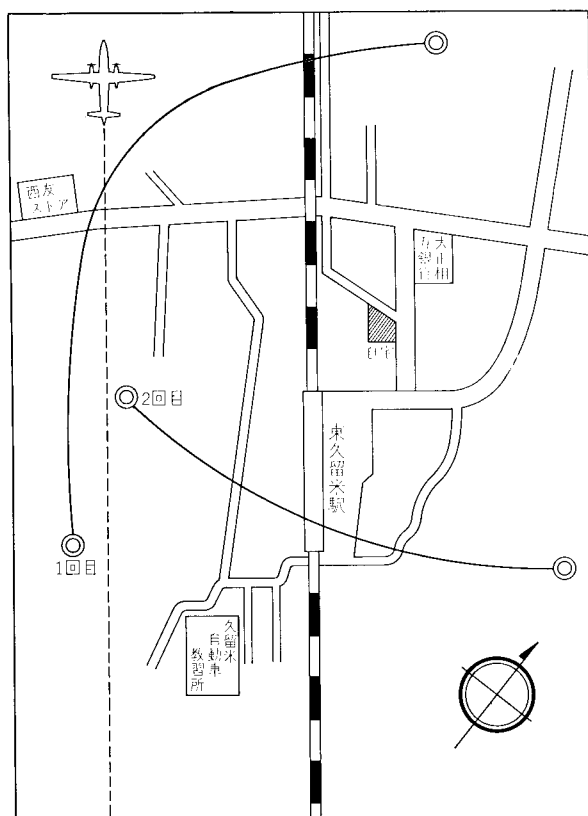
⑨ 緩慢なスピードでときどき上下に微動していた。自宅の斜め上空を飛行中の航空機と接近したが、その際UFOは静止していた。(運輸省航空交通管

* * *

一回目

① 野村 豊(12) 小学6年

② 一九七四年8月12日(月) 午後10時



しいので

二回目

① 野村好一(20)

② 一九七四年8月20日(火) 午後7時16分

③ 東久留米上空

④ 薄ぐもり

⑤ 3分間

⑥ 伊藤英明(20)、野沢好夫(20)

⑦ 肉眼

⑧ かなり明るい球形(色調は第一回目と同じだが、明るさは増している)

⑨ 曇天でも目撃できたので高度は低いように思う。飛行状態がヘリコプターに似ているが、爆音、金属音など一切

しない。

(〒180-03 東京都東久留米市東本町

一五)

* * *

① 西坂佳晃(19) 福島市立学法福島工業高等学校三年

② 一九七四年2月12日午後6時

③ 福島市新町の新浜公園正面前

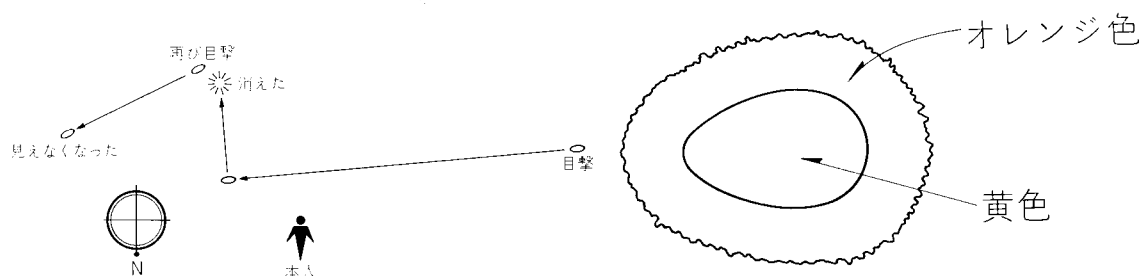
④ 晴、星がたくさんでいた

⑤ 10分間

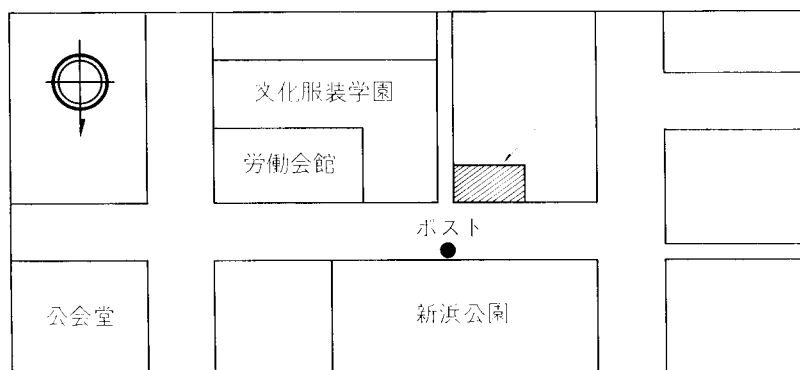
⑥ 西坂みよ子(母42歳)、安信、知子の三人。

⑦ 肉眼

⑧ 楕円形(卵形)で15×20センチメートルの大きさに見え、周りがオレンジ



色で中が黄色。
⑨西↓東↑直角に曲がって↓南↑消えた↓再び東へ飛んだ。飛んでいる最中物体の黄色の部分濃くなったり薄くなったりした。速度はジェット機の3倍程度。高度は不明。
(千 600) 福島県福島市新町八一二
* * *



①一九七四年八月十九日午後6時43分頃
⑧⑨自宅夕方飛行機をオペラグラスを使ってみると、晴れた空の一角に確かYS11型機と思われる飛行機が北から南へ飛び去った直後、オペラグラスを西の方へ向けると仰角80°位の空中に金色の自動車のようなものが浮かんでいた。5秒ほど見ていたが、その間物体は左右に揺れ動いていた。大きさはオペラグラス(倍率2.5)で米粒の10分の1ほどだった。約2秒間のドラマだった。
(兵庫県尼崎市)
* * *
①前田吉彦(15) 京都府乙訓中学校事務組合立乙訓中学3年
②一九七四年七月二十日
③自宅の屋上
④晴
⑤約10分間
⑥妹
⑦肉眼、カメラ、50mm地上望遠鏡
⑧柿の色でなめらかな飛び方をしていた。
⑨東の空に急に明るい柿色に輝いた物体を発見、望遠鏡でのぞくと上昇していくのが見え、やがて見えなくなり、再び二等星ほどの明るさで天の赤道に沿って薄くなりながら西の方へ消えて行った。飛行機の通過する軌道上にはなく音が全くなく、飛行機のように10分間に数10回の光の点滅はなく10分間

に2回の点滅だけで、望遠鏡で見ていると光が四つに分かれた。
(千 610) 11 京都市右京区大原野灰方町二一〇

* * *

①峯 博晃(14) 箕面市立第2中学校2年
②一九七四年一月十四日午前7時40分頃

③自宅付近

④雲一つない快晴

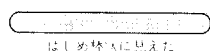
⑤1回目2分位、2回目1.5秒。

⑥山脇 明(中1)

⑦肉眼

⑧⑨私は当日耐寒遠足に出るため家を出て空を見上げると、前方の山上に比較的大きな物体が飛行しているのを見つけた。その時は飛行機かと思いましたが形がおかしく、朝なのでライトや星ではなく、あるいは気球かとも思いましたが違うようでした。その後山に登る前に飛行場所の前を通る「豊中亀岡線」を一時間歩き、ふと山のわ

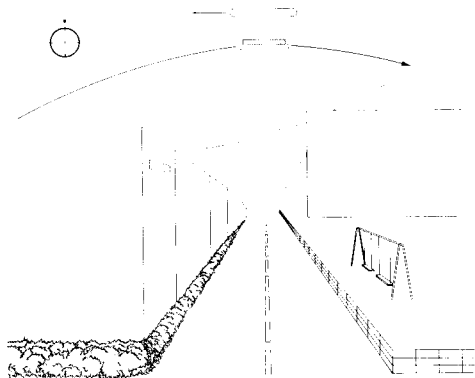
UFOの形



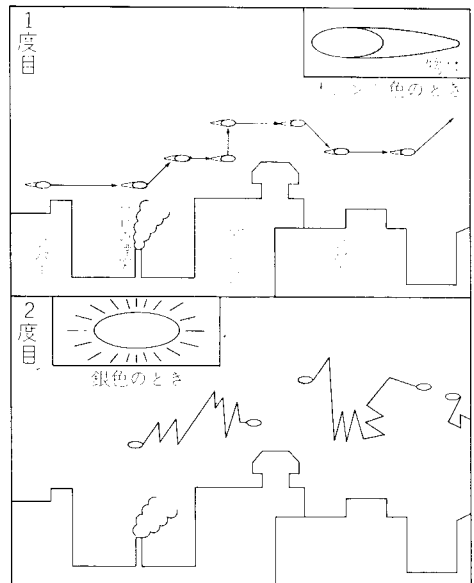
ずかな切れ目を見るとさきほどのUFOの東から西への飛行が反対方向に変わっていました。色は白で、ゆっくり飛んでいて音はなかった。形は横から見ると棒状だが奥行きがあり、大きな盆のような形でした。

(千62 大阪府箕面市箕面四二〇—四四八)

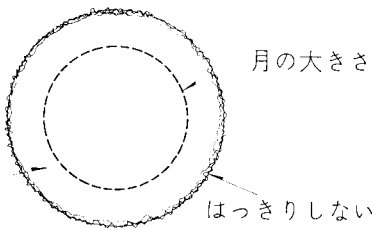
* * *



- ① 齊藤 革 (12) 杉並第一小学校六年
② 一九七四年六月二日午前11時30分頃
と午後4時10分頃の2回
3 自宅のベランダ
4 晴
⑤ 約7分間



- ⑤ 二分間位
⑥ 父と母
⑦ 肉眼
⑧ 真赤で月の二倍の大きさで輪郭がはっきりしなかった。
⑨ 初めは月と思ったが真赤で輪郭がはっきりしないので月ではないことがわかった。あんまり気にも止めないで家にはいったが少し後になり、また外へ出てみると月が出ていてさきほどの物体は月ではないことがわかった。物体を2、3分見ていると下の方から消えていった。



月の大きさ

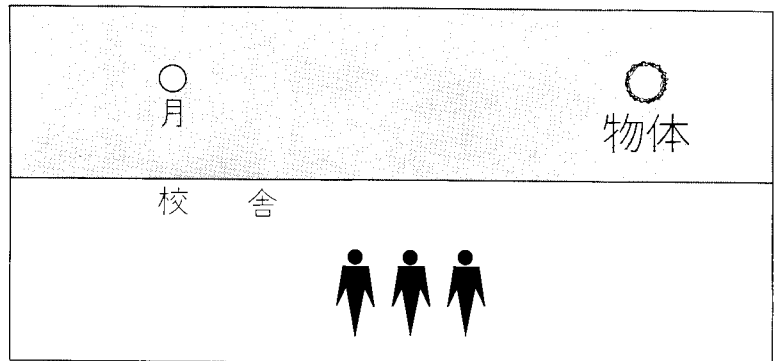
真赤

はつきりしない

(千315 茨城県名岡市東大橋三二—一三四)

* * *

- ① 岡田憲昌 (16) 学生
② 一九六九年一月七日午後8時10分頃
③ 埼玉県蔵市北町四丁目自宅から50m離れた所
④ 晴だが少々薄雲あり
⑤ 20秒位
⑥ 母



⑦肉眼

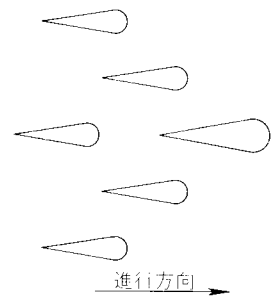
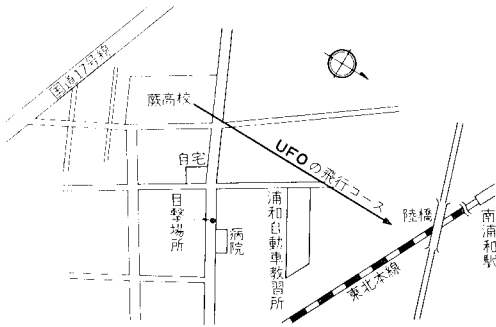
⑧おたまじゃくしの
ような形をし、その
尾のような物を除い
た部分の大きさはウ
ズラの卵位で、他の5つの物体はウズ
ラの卵より一周り小さめ。物体はオレ
ンジがかった黄色い光を放っていた。



⑨仰角約、南から北へ飛行、飛行中の
形態、色、光度の変化なし、速度は飛
行機よりやや速い位、音は無い。あと
になって私が目撃したのと同じ物体ら
しいものの記事がある本に出ていた。

(千335 埼玉県蔵市北町四一〇一二
三)

* * *



①山崎栄一(17) 大阪市立高校二年

②一九七四年八月二日午前八時50分頃

③守口市佐太東町

④南寄りの風、風力1、快晴、30℃

⑤6分位

⑥橋本修氏ほか町内の人々

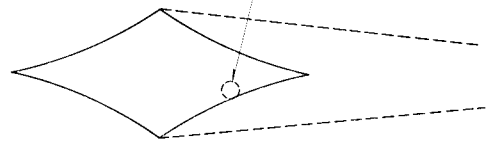
⑦肉眼

⑧菱形をしていて赤色だった。見かけ
の大きさは視角度1°、尾を引いてい
た。

⑨物体は回転しているかのように定期
的に右肩が非常に鋭い光を放った。そ
の光は太陽光の反射か物体白らの光か
わからない。はじめは停止していたが
やがて北西に見えていたのが西方へゆ
っくり飛行していき仰角約から30に減
少していった。

この物体は近くのヘリコプターの落
とし物ではない。なぜならこんな大き

この部分が強く光る



物体スケッチ

な物を落とすのは危険だし、紙のよう
な物ならヒラヒラと舞い降りてくるは
ずだがそうでなく、風船とはとうてい
考えられない。同時目撃者をつのりま

す。

(千570 大阪府守口市大枝東町六一)

* * *

①井上 寛(14) 瀬野川中学校3年

②一九七四年八月七日午後八時22分
25

③広島市瀬野川町虹ヶ丘団地内の路上

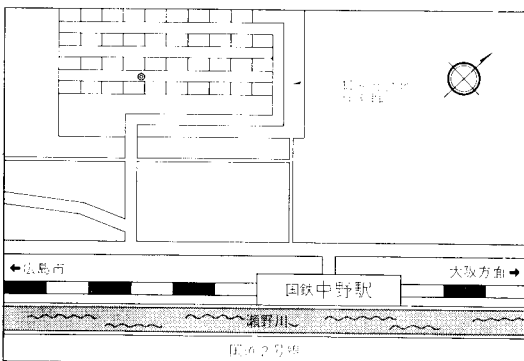
④午後4時頃まで雨(雷はない)以後
快晴

⑤約3分間

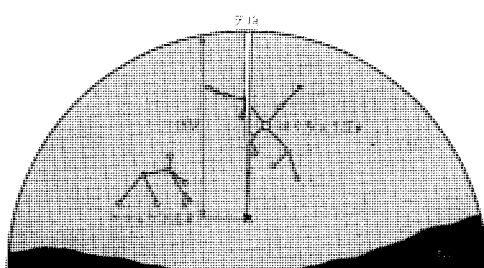
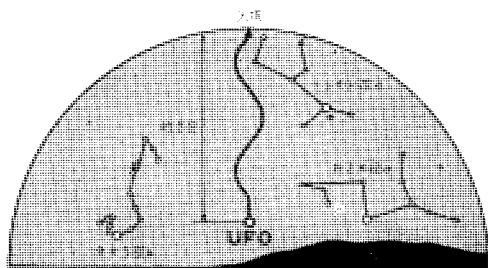
⑥妹と母

⑦肉眼および双眼鏡(ビクセン×11
9)

⑧双眼鏡の観察では完全な球形。レモ
ン色に輝いていた。光度はおとめ座の
α星(二等星)とほぼ等しい。終始無



音。仰角 30° 、 90° 、 30° 。速度は天頂に達するまでは旅客機よりやや遅い程度



だった。そこを過ぎると急加速しそれまでの数倍の速度になった。

⑨自宅から10 mほど離れた路上で星を見ていると、東西の空、さそり座の α 星とおとめ座の α 星の間あたりで星のような物体が動いているのを発見した。それは東西か北東方向に天頂を通って飛行した。天頂に達するまでに2回蛇行しそれまでは旅客機より遅いくらいだったのが、天頂をすぎると急加速しそれまでの数倍の速度になった。

物体が天頂よりやや南西にある時、僕は家に走り込み母と妹に告げいっしょに双眼鏡で観察し友人に写真を撮ってもらおうと電話をかけるため再び家にはいった。そしてその友人が電話に出たとたん母が「急に速く飛び始めた」と言い、その後15秒ほどで北東の空仰角 30° 付近で光度を下げ、消えた。肉眼で見えなくなった後も双眼鏡には見えていた。

注目すべきことは①物体が天頂に達するまでは低速だったのが天頂を過ぎてから数倍に急加速したこと②物体が急加速を始めた時と写真撮影をたのもうとした友人が電話に出た時とが一致することの2点である。

この物体は雲ではなくまた流星にしては長すぎる、雷が鳴っていないことから球電でもない。また飛行機でないことをたしかめた。気温逆転層による幻像のぼんやりした姿でなくはつきり

した固体だったので、これはUFOにちがいない。

(千739—03 広島県広島市瀬野川中野七六—三三)

* * *

①長尾守人(23)

②一九七四年一月十六日午後6時30分頃

③駅前本屋で「鉄道ジャーナル」を買って外に出てふっと空を見た時、流れ星位の速さで北の空から南の空へ行った来たりしている光体を発見、5秒後空中に静止、瞬間に消えた。明るさは3等星から4等星位。無音。

(千228 神奈川県相模原市相模台団地二—三—三〇四)

* * *

①後藤信行(18)学生

②一九七四年五月十六日午後11時すぎ

③自宅の2階

④曇

⑤10〜15分間

⑥兄

⑦肉眼

⑧外を見ていると南西方向の雲の切れ間よりオレンジ色の光体がスロープを描いて上昇しだんだん光が強くなり

はじめ最後に高度を落として高度を数倍強くし日立上空を旋回した。下方に赤色の点滅灯が数個確認された。その時写真10枚撮影した。(ニコマート、F2、ニッコールF2、50mm、絞りF2、 $\frac{1}{16}$ 、 ∞ 、ネオパン90)。その後5月

25日兄も目撃した。

(千317 茨城県日立市弁天町二—七—一一)

* * *

①長内精一(15)豊中第四中学3年

②一九七四年七月8日(月)午前0時30分〜1時?

③大阪府豊中市浜町の自宅2階から

④雲量5、西の風

⑤約5秒

⑥なし

⑦肉眼

⑧葉巻型で低速から高速(目がついて

いけない)、黒色つや反射なし。推定

の大きさ30〜40 m、形の変化なし。

⑨最初黒雲を発見、そこからUFOが出現、垂直になり低速から高速運動を

はじめた。高度2000 m、仰角 40° 〜



60°、距離31.73km、位置北方向4km、12kmの上方。

(千561 大阪府豊中市浜一―一―一三)

* * *

① 松岡正憲(21)

② 一九七四年八月12日午後10時30分頃

③ 社宅の屋上

④ 晴

⑤ 20秒

⑥ 5人

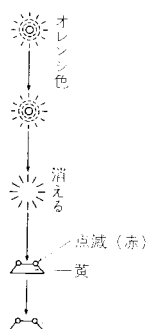
⑦ 肉眼、天体望遠鏡では追跡不可能

⑧ 木星の2倍の大きさ。

⑨ 最初の10秒位がオレンジ色であとの10秒位が赤と黄色だった。速度は初めゆっくりであとスピードをあげて北の空に消えた。音無し。

(千151 東京都渋谷区本町一―九―一七、洗旗荘二〇一)

天体望遠鏡を使ってみたが、スピードが速かったためおいつけず、追跡することができなかった。ゆっくりのときはオレンジ色で突然消えたり、赤と黄色に変化した、そのあとはスピードをあげて行ってしまった。



* * *

① 相沢光寛(13) 三鷹市立第2中学二年

② 一九七四年八月2日午後9時5分頃から11時22分の間

③ 自宅の2階から

④ 薄曇、弱い南風

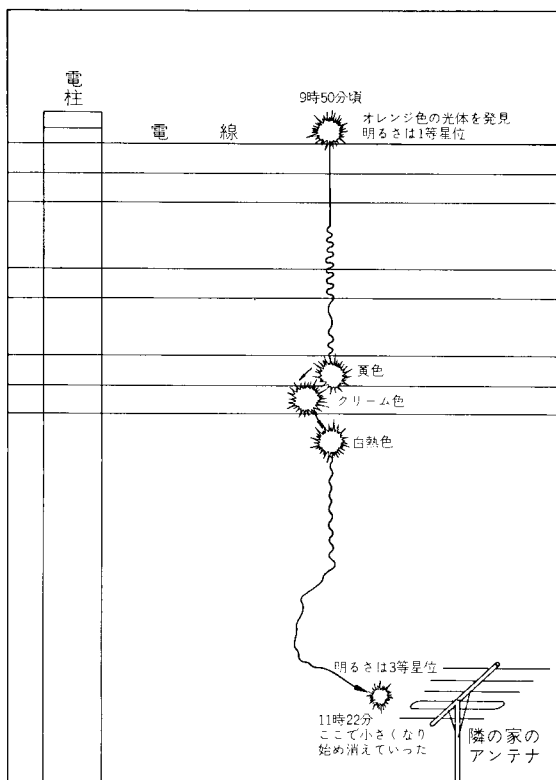
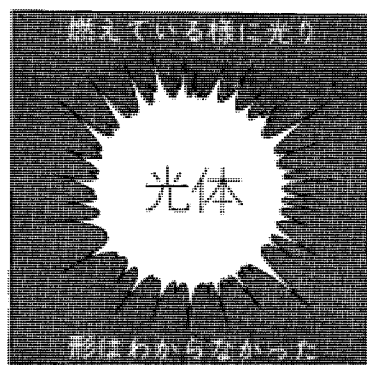
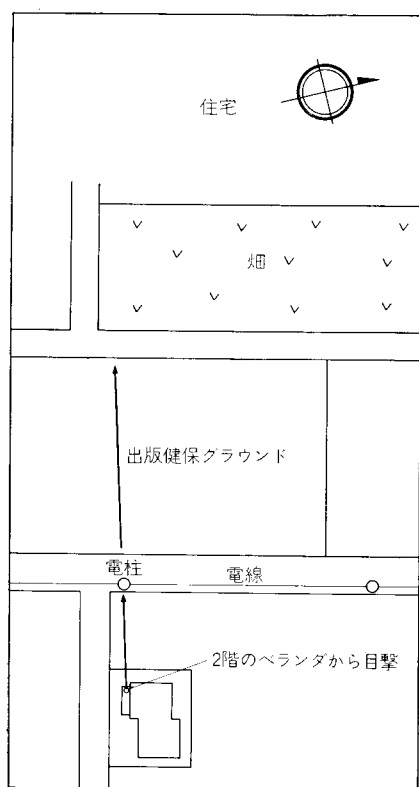
⑤ 約2時間17分

⑥ 友人

⑦ 肉眼?

⑧ 金星の1.5倍位の大きさに燃えているように輝いていた。

⑨ 9時40分頃友人から電話がかかって西の空にUFOの飛んでいるのを知った。UFOは上下左右運動をし下方へ50mにゆっくり降りて行き光度を下げていった。それは西に向かったためだろう。その後下がりながら徐々に北方向を変え、11時3分頃には小さくな

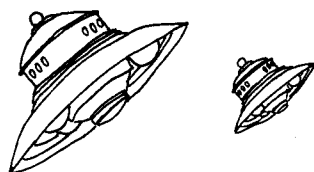


り、ついに見えなくなりました。高度ははっきりしないが高空にあったようだ。この日は薄雲といっても月が

出ているくらいで星が出ていなかった。この光体はUFOにちがいない。(千181 東京都三鷹市井口五六)

読者の声

OPINIONS



奥

空飛ぶ円盤は存在する

奥山 易庵 千葉県流山市向小金新田148-4

UFOに取り憑かれて早、四年程になりました。その間は我武者羅にUFOの調査・研究をしてきました。それで自分でも相当なUFO気遣い野郎だと思っています。最初は国内で起こった国際データの裏取りばかり追っていましたが、国内では外国のようにはUFOが着陸したりあるいはその中からヒューマノイドが出現したりと言ったファンタスティックな事件は皆目ゼロと言ってよいほど無く、そのため最近ではもっぱら外国の資料(単行本や会誌)ばかり集めています。

今私が一番興味を持って調べているのはUFO活動がある極めて限られた時期に(おおよそ一月程から一年近くにもなる場合がある)ある特定の地域で急激に増加するいわゆるUFOの「フラッシュ現象」です。この最近の例をあげると一九六九・七〇年にかけて北欧のスウェーデン、フィンランドなどを中心にして起こったフラッシュ現象、七二年夏から翌年春頃までにかけてアフリカの南端に位置する南アフリカで起こったフラッシュ現象、そして昨年十月末国で起こったフラッシュ現象があります。私は今、これらのフラッシュ現象を整理し、それぞれにどのような相関性があるかを調べてみたいと思っています。

昨年、米国で起こったフラッシュで地上に痕跡を残した事件は二五件あったと報告されており、その内訳では四形痕や無形痕などがあり、またヒューマノイドの目撃を何件か報告されています。(昨年、全世界で二〇〇〇件の目撃があったそうです)蛇足なように思いますが、他に継続時間が二〇秒を超すいわゆる長継続時間流星や屈曲流星、通常の音波とは考えられない音(ツ)を発すると考えられている流星、流星の電波放射問題、流星とUFOとの相違点などにも興味を持っています。もう一つは

F.O.の合流現象(ランデブー)にも興味をもっています。これは一台のUFOがもう一台(あるいは複数の)のUFOの到着を待って空中に滞空し相手と来るといふように特徴をあげるとUFOが進行中に何度も数分間隔にわたって空中に停止する現象でこの訳を考えてみると、いろんな説が考えられそうです。池田隆雄(22)(平七二九・四一 広島県甲奴郡甲奴町本郷二〇六九一)

コスモNo.7の柳田俊彦氏のUFOの無線局より、無線を通じ呼び出されたという記事について抗議します。小生もアマチュア無線を趣味として営む一人ですが、氏の言われるところの宇宙人「EUCO」は実在し日本国より認定を受けハム局を営む「人物」です。しかも(貴局・柳田氏「EUCO」)と同じ田無市に住む方です。したがって貴局を呼び出しても何ら不思議はない訳です。(偶然「EUCO」のコールサインを認定されただけのことです。)

以上から推測すると柳田氏とUFOの正体であるハム局(氏名は伏せます)とは知己の関係にあり、柳田氏による冗談であると断言できます。氏はこの事実をご存知ないのならば、かく冗談のつもりで発表されたのなら「EUCO」の学術的研究誌「コスモ」の研究者である愛読者の度を越した冒険行為に値します。同じハムを営むものとして氏の節度を忘れたい行為をまことに遺憾に思います。

加藤和也(高校二年、一七歳) 国際宇宙研究会会員アマチュア無線局JH2ONP(平五一一 三重県桑名市東方門前通り一六八五)

私達地球人よりもっとも進んだ人類のいることを私は信じています。またその反面、自分達以外にそんな人類は存在しないと思う人も多人数いるだろう。しかしこの果てしない宇宙に私の私達は目にも見えない存在なのだ。コスモを拝読していつそ果てしない宇宙を想像する私です。(平八六三 熊本県津市大浜町一八一三)

私は友人から「気遣い」扱いされている一高校生です。私も空飛ぶ円盤を強力で作ってやろうと思っています。作って何をやるかという、私はあやうの方面の学者を円盤に乗せ地球脱出を図るのです。その際、地球をスタートに促すために水爆か何かで地球を全滅させようと思っています。円盤に關しては相対論からはいった方がよいと思ひ独学でやっています。とにかく初めてこの本を読んで自分の数学力がいかにか低いかを教えられました。これからは死ぬ気になって取り組もうと思います。できたら、「コスモ」に「高等数学」のページを入れてください。そして難い数学を解説していただく下さい。(平六五一 兵庫県神戸市暮合区二ノ宮町四一二二九)

初めまして、私は同年前からUFO現象に興味を持ち、それに関する本を集めている(もちろん「コスモ」も愛読させていただいてます)UFO気遣いです。私はUFOのことを友人や母に話しますと「そんなものいるわけない。そんなウソだ!!」などと根拠もなく言われるのです。なかそれ否定する根拠というものがあんな別ですが、根拠をええしに否定するのです。私はそれがひどくいやです。これではいつまでたってもUFOの謎は解けないと思います。

先日、日本宇宙現象研究会(J・S・P・S)の会誌「未確認飛行物体」に目を通して(この研究会の会員デラ)その中に掲載されている記事(一九七二年十月の事件)を読んだらUFO(空飛ぶ円盤)という名を知りたてても具体的にそれがどういふものである知らない人々が知らないという事がわかりました。その前記の内容を知らない方が多いと思いますので、総括してみますと「一般の人にはUFO(空飛ぶ円盤)という単語を知っていてもそれがUFO(空飛ぶ円盤)という宇宙から来たものか、それを見た流行語としてしか使っておらず、それが具体的にどういふものであるか理解しておらず、また、そんなもののいるわけがない。ウソだ!!」と軽蔑の目でしか見ておらず、現代の科学から遠ざ

けてしまっていることなのです。そのために現在、日本ではアマチュアの研究機関が細々と活動を続けているにすぎないのです。(しかし、ヨーロッパ、アメリカ、ソ連などの国々では行政機関でもかなりそれを認め、研究を助めている)話は少し変わりますが、宇宙人がわれわれの地球の公の機関(行政機関)などに堂々と進み出て来ない理由はやはり一般の人々あるいは公の機関がそれを認めないため宇宙人側も「今ここへ踏み出せば危険である」と思い、だからわれわれを完全に信用できないのではないかと思います。話をもうとどいて、なぜ一般の人々がUFO現象をバカにして信じないか、また先ほど述べた事件が大衆に大げさに伝えられたがその原因の一つは一般の人々がUFO現象のことをよく知らない(認識不足)点にあると思います。第二の原因は公の機関が積極的にUFO現象を認めその研究に取り組むことにしない点にあると思います。公の機関が認めればしるに大衆もUFO現象を真剣な目で見るようになると思います。

そこで、まず大衆にUFOというものを理解してもらう必要があるのです。そのために日本のUFO研究団体、または公の機関は世界各地あるいは国内のUFO事件情報を早急にかつ正確に大衆に伝え、そして一般の人々がUFO現象を信じないにせよ、それが早く大衆に理解しうよう糸口になり、またUFOの謎を解く、近道になるのではないのでしょうか。

そしてさらにUFOの謎が解けたら(もちろんUFOの謎が解ければ未確認飛行物体ではなく、完全な確認飛行物体となるだろう)地球人と宇宙人(「アンドロメダ星人」)との惑星間宇宙友好協定?がどこかで(もしかしたらニューヨークの国連本部かもしれない)なされる。ちょっとこの話は、ウソかもしれませんが私の空想だから、調印となるかもしれない。しかしこれはあくまでも仮定で私の想像する範囲のものです。

しかし本当にそうなら、もし宇宙人側の文明がわれわれ以上のものだとすれば、それとわれわれの唯物論科学とミックスしてそれを練りより新しい世界観、人生観を持った科学(スーパーサイエンス)を造るわけです。何とこれはすばらしい考えでしょう。(What a beautiful idea!)そして今、もっとも大切なことはそれを夢で終わらせるのではなく、これの実現(一歩一歩近づいてゆくこと)です。神から授けられたこの生命の灯をいつまでも消すことなど……。

藤井哲也(15)(平二三三 神奈川県横浜市南区大岡一三二一八)

撃報告などを見て、フト共通したことを大発見しました。それはUFOの発見の時刻の共通性です。皆さんコスモNo.6を見てください。そのUFO目撃報告の目撃日付を見ると、江端さんと林さんの同年の10月下旬のグループと同年の1月上旬に分かれます。なんとその加藤さんと須永さんは同日の1月6日にUFOを目撃しています。このUFO目撃報告は、ためめといいますが、もしどちらかがたまたま書いたとしても、こんなに日付が同一になりうるものではないか、いいえ、99%ありえないと私は思います。1年は365日あるのだから、その確立は1/365の1なのです。それは加藤さんと須永さんが、真実性をたすために二人で協同でやっただけで、そういふことはまずありえないと私は思います。

それからグラフィックの方の横浜市のライティング・ワイヤが1月6日です。三人とも目撃日が同じなのです。こういふことから考えると、今年の1月12日、特に1月上旬にどこから多くの目撃が飛来したのではないのでしょうか。偶然にも私は今年の1月4日にUFOを目撃しました。それは加藤さんとUFOを目撃した江の島から2kmぐらい離れたところまで、もう現在ではUFOの存在は否定できない段階にきています。UFOの有無を論じているときではないのです。政府はもうUFOの公共機関を設立しなければならないときなのです。ある事件が起これば、さあUFOの研究機関をつくらなければならないのです。もうUFOは今か今かと公然と出られる日を待っているのだから。

熊谷俊一(15)

(千一五) 神奈川県横浜市長選挙東海岸区

数人の男子が銀色に光る物体を、私の横で見たのです。私はタッチの差で「グググ」見のがしてしまつたのです。アア人生とはかくも数秒なものでしょう……。それはそうとこんなボクと文通してくれる人はいない。いたら手紙ちょうだいネ! くそー。

コスモを月刊にする。するまで「立てっ、しいたげられし者よ、解放の独立、立てっ……」だんこ戦うぞ!

(千二四) 神奈川県横浜市長選挙区区際町八七

井啓コスモ様 ぼくはコスモをいつも二十日発売(奇数月)にとっている熱烈な愛好者であります。なぜぼくはコスモをたまたまといふと「少年X」(名前を忘れた)の雑誌にコスモの紹介が載つていたらからです。そこで一冊とみてみることに。おもしろいワケは、①他の雑誌とちがひ記事の扱いが正しく冷静である。②他のマスコとちがひ感情を入れず科学的にしかもわかりやすい。しかし残念なことは、創刊号と売切れた号がもういっぺん作つてくれたらなあ、ということ。

福沢 勉

(千八二〇) 福岡市南區柳井町西岩崎

前略、コスモNo.7に掲載させていただいた僕の論文に修正箇所がありますのでお知らせいたします。もともと三三三の「光も」と同じ方向に走り、一を削除し、同じくヘーゲン三三三の下の式

$$\left(\frac{2}{3} - \frac{1}{V}\right) \left(\frac{2}{3} - \frac{1}{V}\right) \left(\frac{2}{3} - \frac{1}{V}\right) \left(\frac{2}{3} - \frac{1}{V}\right)$$

と書き換えます。

とそれからヘーゲン三三三の補説のところ全部を削除しそのかわり、条件やVを加えます。

3としてヘーゲン三三三の「Kは積分定数」とは自然の底」とします。

また、橋本博士のご親切な回答に大変感謝いたします。また、まだ述べたことない自分の身分ではないのです。また述べさせていただきます。それはある理論または、新しい考えといふのは互いに批判し合ひ、ときには同意し合ひながら進展するのだと思ひます。しかしこれは事実を否定するのとはちろん異ります。僕は博士の「新しい事実」に目を凝らしてはならない」という考えに大賛成です。これからは互いに協力し合ひ(批判し合ひ)の協力、だと思ひます。UFOの問題の探究(または超常現象の探究)に力をそそいでいきましょう。

金井武義

(千一五四) 神奈川県横浜市長選挙区区際町八七

No.6拝見しました。この号は今までのより内容がより充実し、まさに圧巻でありました。一日日本米の天宮人出現談(これなどは世界的に貴重な資料だと思ひます。その中でも一四二二年6月29日のUFOの落下などは調査する必要があると思ひます。ハインリッヒ・シェーリマンのトロイの発掘と比べたら紀元前二一〇〇年前と、紀元前四〇〇年まではかなり差があり、新しい。皆さん、過去は何かを語りかけているのです。附石がUFOの墜落、いづれにせよかなりの収穫があります。今や行動あるのみ。ただしこの調査によって生じた人命もしくは費用負担および精神的苦痛その他諸々の損害は、当局の関知するところではない。そのつもりでイベリア半島のUFO墜落事件(例百件)これはまた驚き。なにかイベリア半島に重大な目的があったのだから。一九七〇年以後はどうか。たのたの。一円盤に連れ込まれた男では宇宙人がシアアラに話した光速の二乗の速さで飛行装置や肉体が粒子に分解したのを再結する装置。これなどは現代の地球の科学をはるかに超えて驚異的なことで、嘔然としました。

その星では生命合成などは朝飯前だろうと思ひます。次にヒル大生命事件では宇宙人の解説に立体星図を参考、苦心を重ねて製作し、ついに宇宙図の星を発見した話は劇的であった。マジジョリ・フーッ先生。この人は本当に偉大な、しかし妄なものは何十光年も離れたところの恒星系から地球を訪れている早さで十年一日の如く宇宙空間を飛んでいること。そして近い恒星系から地球を訪れている可能性もあるわけでのコンタクトの例もなまじ肯定できないようです。

きょうも彼等の宇宙船は地球を日ごと飛行している。SFに近いだろうか。キングなのは、エトガー・ケーラーの宇宙による世界の大変動です。一九八八年から一九八九年の間に始まり、日本は一九八八年までに海中に沈み、現在の諸大陸の沈下が始まることだが、大宇宙のノストラダムスによる一九九九年の沈下は、天から恐るべき大王が舞い降りて来る。しかし大陸の沈下についてはなにも触れていない。この二大陸の沈下についてはかなり後になっていきます。もう一つ異なっている点は恐るべき大王と主の光では侵略者と救世主の違いであると思ひます。エトガー・ケーラーは第二のノアの洪水を予言しているようです。人が運命を知り、時がそれを証明し、いかなる時も自然のふるまいを止めることができるか。なによりNo.6のよさは抜群であつた。

ある。またUFOの否定者の論文が少ない。これからも大いに期待し貴社の発展をお祈り申しあげます。Good bye! All the best again.

S・O (徳島県)

僕がコスモを買ったのは6号からなのです。こんな良い本があつたことを今まで知らなかったことを本当に口惜しいと思ひます。どなたか何号でもいいから見せてください。

ところでこの前、7号を買いにゆきましたがそのときは10冊ぐらいあつたのです。そして2週刊ぐらいして同じ書店に行きました。その前と本の数があんまり減つていませんでした。それほどとは思ひないのですが、みんなUFOなどに関心のないように感じました。

コスモ6号からの「宇宙・引力・空飛ぶ円盤」は円盤の推進機関のこととおもしろく書かれています。黒沼健氏の「空飛ぶ円盤と宇宙人」では空飛ぶ円盤は太陽電池などに使われるシリコンと化学化合物から形成され、その胴体は重力に対する絶縁体として働き、他の電磁波および胴体を流れる交流電流は圧電効果を生じ、非常に波長の短い超音波といふことになって、円盤の推進力をつくるそうです。コスモを出版している方々、これからもよりよい本をつくってください。

編者三

(千一四) 東京都大田区大森五(一一一五)

書店では雑誌が売れると次々に補充して並べますから、一見売れないように見える場合があります。

一編者部

私もまたコスモ・ファンです。読者の声にはたくさん意見が載せられていたが、その中には知つたかぶりの意見、強引な考えなどがあるように思ひます。それも一意見だとは思ひますが、円盤の謎は強引な考えや知つたかぶりの意見では解けないと思ひますし、円盤に興味ある人々を惑わすことになつて思ひます。

円盤や宇宙人について知りたいなら、それらについて先進国である米、ソやその他の国の円盤研究の事情や真相を知ることが早速だと思ひます。秘密好きの米、ソは円盤や宇宙人についていろいろのアルコトを隠しているはずですが。米國には宇宙人のアルコトづけがあるかも知れません。またソ連は秘かに宇宙機を所有し、宇宙人と交信しているかも知れません。これは私の想像ですが、以上のようなことはないと思ひないでほしい。現に以上いふ話があるのです。アメリカのある街に降つて来た空飛ぶ円盤の機破者で全身銀色をした生物がFBIの調査官に

進行されたという事件があります。しかしそれ以上のことは何も報道されないという事実があります。私はたまたま米ソの田舎研究の真相を知るべきではないでしょうか。

自分こそ解ったようなことを言ったようですが、私の考えはまちがっていないと思います。私の意見に反対する人、同意する人、あなたの意見を聞かせてください。コスモの繁栄を祈って筆をおきます。

千葉 伸(16)

(千九八四 四七 宮城県登米郡石越町北郷字橋向六二一)

私はコスモをNo2より愛読しております。さて、最近富士山付近に円盤が多数出現するとの報を知らされたもので、もしかと思って「あること」を公にしておきたいためペンを取りました。No6でエンドガー・ケイシーの予言のことが紹介されておりましたが、私は最近この予言という現象を追求し解明しようと思っておりますが、もちろん結論は出ておりません。

さて、「あること」というのは6月7日の朝方に見た私の夢のこと、これを紹介したいと思うわけですが。私の頭の中には日本の関東地域の地図が浮かび、印が2つついておりました。1つは伊豆大島、つまり、三原山の所、もう1つは富士山の所です。そして富士山の所には、「突然的に」と「爆発」という文句が記されておりました。そして夢の中で自分、富士山爆発の前(前後?)に三原山の噴火があることを直感的に感じておりました。またその地図には「1、1、4」の3つの数字が見えたのも定かです。これらの数字は連続してはおらず、1、14のように別れていたように思いますが、確かではないので「1、1、4」としておきます。これは1日、14日、というように日時を表わすものかは見当つきません。

最近の火山活動の異常な活発さはいかに暗示しているように思われます。西ノ沖島の噴火、鳥海山の1500年ぶりの噴火、三原山の噴火口の底の上昇そして、つい最近の新潟の焼山の噴火等です。特に富士山火帯の活動が盛んなようです。また、伊豆で起きた地震後にその地域の温泉の温度が平均10度前後の上昇をみたこと、また関東というより東京で井戸水が温水化したという事件が都内7カ所で同時的に報告され、その後、本郷地区で25軒くらいだけが原因不明のかなり振れはげしい直下地震を受けており、これは私に言わせれば、地下のマグマの活動を言っていると明言したいものです。井戸の場合には近くに浴槽とか、ボイラー施設があるということ、チェーン切れとなりましたが、風呂屋は何十年も前からあったはずで、いままでにもたがひたさうい

う温度変化があってもいいはずですが、いかがですか。一〇〇年以上も昔から存在し、いっとうに温度が20度前後を極端に上下しなかった旧家の古井戸が突然に40度前後に変わったという話も、果たして前記の理由で解明できるのでしょうか。

ところで以上の話をSFと考える人はそう考えでくさしてもいいんじゃないでしょうか。ただUF Oが「一カ所に頻りに現れる時は、その前後に何か異常な変化や事件が起こったことが多い」という統計的見地からしても私の夢との関連がありそうなのでここに紹介したわけですが。

吉岡 公(学生、二二歳)

(千一八二 東京都柏江市和泉一七〇二、佐野方)

前略、いつも楽しく読ませていただいています。これは僕自身の疑問なのですが、宇宙人は果たして攻撃的かそれとも友好的か、G・アダムスキーなどがコンタクトした宇宙人は大要友好的であるが、なかには円盤に近づけたために焼けどをしたり、頭を打たれて死傷したりするものが多いのです。

円盤が飛来したりするのは別に不思議じゃないのですが、本当の目的はなんなのだろうか。よくいような説が出てくるが、それは推測であるからして確かなのではないのです。もし、いま宇宙人とコンタクトしている人がいましたらそれを聞いてみてくださいます。

それとこれはいつも思うことがUF Oを研究している人はどんな物でもと不思議と見るや、すぐ宇宙人などと関連づけてしまおうとあると思

います。たとえば偶々、カッパ、超能力者、ルンダの木彫像など例をあげればキリがありません。絶対違うとは言いませんが、あまりにもひどすぎると思います。たしかに証拠もないのにそう考えるというのは、例としてはいいのですが、カッパは宇宙人ではなく水中に住む文明の進んだ人間かもしれない。たとえば口が酸素マスクで甲羅が酸素ポンプ、ヌルヌルした体が水中服、足が足指、お尻の三つの穴が炭酸ガス排出口かもしれない。これだつて一応説明がつきます。ですからこのようになどとは確かな証拠があつてから発表した方がいいと思

います。

また、円盤の写真は、ほとんどがニセモノでしょう。ライティング・ライツでよく「見えていない」と説明が出てくるものがありますが、それは、おかしで飛んでいるが、目に見えない光(たとえば、紫外線)などを放つて飛んでいるのか。このような写真が7号の藤田氏の考えのようなくらでもトリックができるのです。一九五一年にアメリカ・テキサス州でカール・ハート少年が撮映したラボック光体と

言われる写真説明文はこう出ている。「アメリカ・テキサス州ラボック上空を円盤の大編隊が何度も通過した。そのうち一団をカール・ハート少年が、みこしたと認めた。それは、まづおかしいと思つたことは、大編隊が何度も通過した割には、これについて同じ日の他の情報が少ないこと(目撃者がいないこと)、飛行中の円盤の円盤の輪郭がはつきりしていること。これはほとんどシャッター速度が速いからと考へるが、ほとんど強い光でない、瞬間的には撮影できない。また光が強ければ飛行中のUF Oの周りがその光のために明るくなり写真にも写るはず。

カメラの問題ですがバカチョンカメラで写したらまづこのようには撮れない。また一眼レフなどの高級カメラで写すにはよほど操作が速くないと撮影できない。また全自動一眼レフなら写せないことはないが、このころにはまだ開発されていなかった。それとこの円盤はめづしくでもたれたようにいびつである。特に一番右の物、またその方に小さなシミが沢山ついている。底の考えではおそらくネガの上にスミのようなものをたらしめたニセモノ写真だと思

う。

話は一変しますがこの間「11PM」で紹介された北海道で円盤に連れこまれた男の人はその後どうなつたのでしょうか。コンタクトする時はテレパシーのようなものが送られてくるらしいのですけれど、ぜひ取材していただきたい。

田野村 真(16) 千一九二 東京都八王子市中野町八二〇)

(G・アダムスキー氏の書物によると宇宙人は一般的に友好的です。円盤に近づいたため焼けどしたのは故意にしたのではなく不注意だったようです。またガリタ木彫像、カッパなどをUF Oにしたが、またというのはいままで仮説であつて真偽の究明にはもつと研究が必要で、それがラボックの光体ガニセモノであると書つていられますが、これはまづいなく円盤の写真は、北海道で円盤に連れこまれた男の人の件は、その真偽についてはあいな

は地球に条件のよく似た星は、数限りなくあるだろう。そのことからして「宇宙生物」の存在を否定する方が疑問だ。そのうちの一種、または数種の生物が何らかの目的を持って地球にやってくることは目撃者によつて千差万別というのはいさうなことだ。そんな矛盾が人々の不信感を買い「UF O」という人類必須の課題を娯楽的存在としてしまつて

いるのではないだろうか。

匿名希望

(千三三二 栃木県鹿沼市泉町二四五三)

UF Oの推進はいろいろ言われているが、その幾つかについて述べさせていただきます。反重力エンジン(精密には逆動エンジン)は、J・サリ氏の浮揚ディスク研究ですが、惑星間飛行に必要な光速以上のスピードを出すものとしてコスモの読者の皆さん、いろいろ論ぜられてますね。イオノクラフトは内田氏が非対称電界を使つて実験されていますが、交通機関に適用して使用するなど前途はいろいろあるでしょうが、果たしてUF Oの動力源として逆重力エンジンにスピードが出るかはあまり期待できそうにありません。今コスモ誌上で話題となつてるのは文字どおり光速を超える光速速が出来るかどうかと思ひますが、私の考へる光速は超えられないと思ひます(精密に言へば)。しかし特殊相対性理論では光速以上のスピードを出す方法がありません。

光速で五〇年飛ばせば五〇年しか進めませんし、しかし光速の〇・九九八倍で飛ばせば二五〇〇光年飛べるのです。厳密に言へば「超」光速ではありません。しかし光速以上のスピードは出せるのです(意味は同じかな)。厳密な意味での「超」光速を論ずるのは意味がないのでは? とにかくそれ以上のスピードがあつて、UF Oが存在すると肯定させることのできる理由が見つかれば、われわれにとってUF Oの実存を強く説明できる一つになるのでは

峯 博晃

(千五六二 大阪府箕面市箕面四 九二〇一四四)

昨日、偶然にこのコスモNo8をみつめました。UF Oファンは私にあたかもわづらわめきましした。しかも8回目の発行に驚かされた。今までに何回も本屋に行っている私でしたが本屋に気づかないなんて(もう、私のバカバカ!)これからはこの「コスモ」を購入したいと思ひます。

野々村 孝(17)

(千八一〇 福岡県福岡市中央区大濠二一〇一四)

STATEMENT

執筆より寄せられた補遺と質問の回答

●「ガルダ」追記

「ガルダ」の発見（本誌第7号に掲載）の筆者黒沼健先生より。

先に本誌に書いた「ガルダ」の発見「の末尾に、インドネシア大使館に、ガルダに関する記録があったら、送ってくれるようにと、ソジャ・ホテルの秋山君が頼んでくれたところ、同大使館教育文化部の田村三郎氏の著述になる「インドネシアのあらまし」という貴重な資料が手に入った。A5版で全篇二七三ページの充実した著書である。表紙裏の著書略歴によると、一九〇二年生れ、一九二四年インドネシアへ渡航、戦時中は軍属として内務行政担当、一九四六年帰国、一九五五年インドネシア貿易に従事し、六〇年以降はインドネシア大使館教育文化部に勤務、七〇年インドネシア政府の招待により、インドネシア各地を再訪、現在に至るとある。

「インドネシアのあらまし」の表題のごとく、その領域、気候、人口、生産、風俗、治安、交通、河川、政府機関、教育などについて、インドネシアの輪郭をかなり詳細に叙述してある。これ一冊を読めばインドネシアのあらましを知ることができるわけである。

だが、目次を見たところでがかりしたのは、私の目的である伝説の項目がない。

そこで歴史関係のある章を克明にあさった。そしてわかったことは、民族としての存在は古く、紀元前五〇〇年頃、すでに家畜の飼育と米作を知っていた。その後、幾多の王朝の統治を経て、一九四五年八月一七日にインドネシア共和国の独立宣言が行なわれた。そして五年後の五〇年九月二十九日には国連加盟国になったのである。

「インドネシアのあらまし」によると、

「独立時に憲法、国旗、国歌、言語、国歌が制定された。国歌の驚はガルダ（ガルダ）と呼ばれ、羽ばたいて理想に向かう聖鳥である。その胸にはバンチャラ、すなわち五箇条の国是を描いた盾をつけ、首の羽四つと五箇条で四五年（一九四九年）を尾羽八枚は八月を、両翼の羽の七枚は一七日を、すなわち独立宣言の一九四五年八月一七日を具体的に表現している」となっている。

こうなると現在インドネシアで見る聖鳥ガルダの像は、人為的な一つの表徴で、本来のガルダとは違うことになる。

先の「ガルダ」の発見の「小文」に掲げたガルダは、戦前のもので、今日のものではない。あれが昔から伝わる真の姿なのである。

ガルダ伝説については、「インドネシアのあらまし」には、

「私（三田氏）自身インドネシアに行ったとき聞いた話は下記ののとくである。

昔ある王様が敵と対戦中優勢な敵に囲まれて全滅を待たざるの苦戦に陥った。そのとき一羽の大鷲が現われ、王をその背に乗せて脱出することができた。その途中で大鷲は敵の矢にあたり、ようやく飛びつづけたが、無事に王を安全地帯へ救出して王を背から降すと同時に力つきて息絶えた。王は大いに悲しみ手厚く葬った。王はこの大鷲ガルダを勇気と忠誠の鑑として称えた。その出来事以来人々はガルダを心から尊敬し、今日に至るまで語り伝えられている」。

この話は一九四三年に中部ジャワのブルオケルトで土地のインドネシア人の長老から聞いたが、その後心掛けていたが文書では未だ見たことはない」となっている。

古代の伝説に詳しいイスのエリーヒ・フォン・デニンは、ガルダ伝説にこそ触れていないが、南太平洋の伝承には、鳥のこゝに鷲や鳩が出てくることが多いと述べている。

わが神武帝の東征は、南太平洋ではないが、これには金鷄が出てくる。

鳥と古代伝説との関係は将来の研究課題となろう。

●本誌第7号に掲載記事「空飛ぶ円盤はGエンジンか？」の反響のひととして慶応中等部三年の宮沢薫君から次のような反論があった。以下は、橋本博士の回答。

《反論の要約》
博士はユリ・ゲラー、関口淳君などの超能力者を高く評価しているが、狂信的である。また四次元霊界は存在せず、超光速は不可能である。

《超能力は狂信か？》
ユリ・ゲラーに始まった「超能力ブーム」はたしかに週刊朝日の否定キャンペーンによって終止符を打たれてしまったので、超能力ブームは終わり、最早あんなものを信じている者は狂信者だとあなたが思うのも無理はありません。

たしかに週刊朝日が関口淳君をマルチストロボで撮影したとき、彼はインチキをし、彼の母親もそれを認める手記を書いた。しかし、彼は今迄のすべてがインチキだとはいつていない。道徳的に見れば、一回でもウソをついたら、彼はウソツキだといわれて仕方がない。しかし科学は逆である。九九％がインチキであっても一つでも本物の現象があれば自然の中にその現象は存在するのである。

朝日のたった一回の実験で、超能力すべてを否定する人は、権威あるマスコミの自由になる頭の弱い人ではないだろうか？

アメリカ空軍はUFO調査のために、コロラド大学に依頼して「コンドン委員会」を作り、二年の年月と五億円の予算を使い、調査を行なった。そして一九六九年一月「UFOが地球以外の惑星から飛来した宇宙船である証拠はない」と発表し、調査を中止してしまつた。このように確実な公的機関が否定したUFOを信じる者が狂信者でなくて、なぜ朝日の一回の実験による否定論にもかかわらず超能力を信ずる者が狂信者なのか？

UFOの目撃報告または写真の九五％は、ウソ、デッチ上げ、トリック写真、ゴースト現象、心理的な幻覚、気球、人工衛星、雲等の既知の物理現象で説明できる。しかし、残りの五％にUFO信者はかけている。

同様に超能力の九〇％はトリックかも知れない。だが、五％の？にかけるあなたがなぜに超能力は百％インチキだと、一般の人と同様にそれを捨て去ってしまう軽率さを犯そうとするのか？

UFOの存在に寛容なあなたは、超能力の存在にも寛容になつてほしいのだ。

マスコミの超能力ブームはたしかに下火になつたが、ブームが下火になつたから研究するのをやめるといふのはミちゃん、ハーちゃんのなすべきこと、真の研究者はそんなことにはまつたく無関係

係、ただ「事実」のみを厳密に追
い「実験」をくりかえして追求す
るべきである。

幸いにユリ・ゲラーに触発され
て、数百名の超能力少年が輩出し
たので、電気通信大学の岡田幸
雄、関英雄教授等を中心とする
「超心理学懇談会」ではこれ等の
少年の協力を得て厳密な科学的実
験をくりかえしつつあり、中でも
同大学機械工学科主任佐々木茂美
教授は、念力が金属の弾力を変わ
せる実験のデータをとることに成
功、同会に発表している。

私は「日本超科学会」を結成、
同会雑誌「超科学」創刊号に「ス
プーン曲げ特集」を組み、各研究
者のスプーン曲げ理論の仮説を掲
載したが、次号には佐々木教授の
実験を中心として特集することに
なっている。

いずれにしろ超能力を初めとす
る多くの心霊現象はたしかに存在
するのであり、これは従来の科学
や哲学に重大な影響を及ぼすもの
であって、決して無視してはなら
ないことなのである。

一週刊紙の否定論を単純に信じ
て、この研究から撤退するような
人の態度にこそ私は幻滅を感じる
ものである。

次に私や高次元説を唱える人の
いう四次元は、かならずしも数学
的、または物理学的な四次元では
ない。したがってメタ相対論によ
って、四次元に行くためには超光

速でなければならないとか、円盤
はタキオンでなければならないと
か、そういう議論とは、まったく
関係がない。だから「四次元」と
いう言葉は必ずしも適切ではな
い。誤解を生むおそれがある。

「別世界」とでもいったほうがい
いかもしれない。
何と名づけようと、この三次元
世界にダブって「別世界」とでも
いふべき世界があって、テレビボ
ーション、予知、透視等の現象
が起き得るのである。この「別世
界」では三次元の時間、空間を超
越した動きができるのである。

このように「別世界」の存在を
認めなければ説明のつかない多く
の心霊現象が起き、日本以外の世
界各国では多くの科学者によって
真面目に研究されているのである
が、くわしくは多くの文献を参照
されたい。

参考文献

「超科学」日本超科学会雑誌創刊号
鎌倉市小町一・一五・一七

「ソ連圏の四次元科学」上・下
日本超科学会

橋本健監修たま出版

「超物理学入門」橋本健著

池田書店

「四次元世界の神秘」橋本健著

池田書店

「四次元の図鑑」橋本健ほか著

池田書店

●「天体オーラと宇宙電界の謎」

(本誌第8号に掲載)に関する大
阪、寧屋川市の武田安治氏の質問
「オーラ現象の詳細とオーラ・メ
ーターの技術的事項についてお知
らせ下さい」に対して筆者内田先
生から次のような解答があった。

「質問の件お答えします。
私の記事を最後のところまでお
読みいただいたことと存じませう
が、記事に述べてありますよう
に、現在電気通信大学の研究グル
ープにより検討されつつある電磁
気現象で、詳細は近い将来權威あ
る筋から専門分野に公開されるで
しょう。

その公開発表がありましたら
いづれかの機会にまた発表させて
いただく予定です。今ここで私が教
授の立場を無視して詳しい回答を
することはできません。

次にあなたの考えておられるツ
ボの電圧分布のことですが、何を
言わんとしておられるのかよくわ
かりません。

ご質問の内容から推察させてい
ただきますと、私がこれまで発表
している記事についてご存知ない
ようにも拝察できます。

参考までにこれまで執筆してき
ている記事の主なものが、
四次元世界の謎(正・続・新)
神秘の四次元世界

(いずれも大陸書房発行)

右の四冊に、おさめられておりま
す。もし興味がありましたら御関
覧下さい。

編集部より

●左の予告のとおり本誌は次号か
ら題号が「UFOと宇宙」に変わ
り、名実ともにわが国唯一のUFO
専門誌として一段と充実した内
容になります。ご期待下さい。本
誌は題号「コズモ」を記念して特
大号にしました。

●読者の本誌バックナンバー譲渡
・交換で特折トラブルが発生する
ようですが、希望者が譲渡者もま
ずハガキで照会して確認し合った
うえで送金・送本して下さい。本
誌はいっさいの責任を負いません
のでご了承下さい。

●本誌に投稿されたレポート・原
稿・写真類は原則としてお返し致
しませんので、必要ならあらかじめ
コピーをおとり下さるようお願い
いたします。ただし写真のネガ
だけは希望により後日返送します

から、返送希望者はその旨明記し
て下さい。全国から多数の写真・
原稿等の投稿があり、感謝してい
ます。山積していますので、調査
検討するのに日数がかかり、早急
な結論ができませんが、全部に目
を通して綿密な吟味を行なっていま
すからご安心下さい。

●よく学生の方が文化祭などで使
用するため展示用UFO写真を貸
してくれと依頼してこられますが
、我社には貸出用資料はいっさ
いありません。ご了承下さい。

●「UFO写真集」が刊行されま
した。掲載写真類はすばらしい印
刷により迫真感が充実にあります
が、惜しいことに解説文中にミス
プリントが目立ち、申し訳ない思
います。これを訂正した「正誤表」
が出来ていますので、希望者はハ
ガキに「UFO写真集正誤表送
れ」と明記して本社編集部宛お申
込み下さい。すぐ送ります。

★お知らせ!

次号より本誌の題号が

「コズモ」から

UFOと宇宙

に変わりますから
ご注意ください。

わが国最初のUFO写真集!

コスモ別冊 絶賛発売中!

UFO写真集①

—UFOファン必携—

¥1300 送料 ¥300

●2冊以上は¥300×冊数

- A4判、94頁、極上厚手アート紙使用、美麗表紙カバー付き豪華本／貴重な資料として長期保存性を考慮、入念に制作。
- カラー写真約20点、白黒写真約30点／本誌よりひとまわり大きい判の左右2頁にわたる大画面からわき起こる圧倒的迫真感!
- 書店発売は10月中旬／書店で入手できない場合は本社宛直接ご注文下さい。3万部限定版につき、早目に書店か本社へご予約を。
- 第2巻以降も発行を企画中。

★本誌バックナンバー(既刊号)

品切れ後は再版しません。未入手の方は早目にご注文を!

第5号(1974年3月発売)

定価 各¥330

第6号(" 5月発売)

送料 1冊 ¥85

第7号(" 7月発売)

2冊 ¥145

第8号(" 9月発売)

3冊 ¥250

■創刊号より

第4号までは
売切れ、絶版。
在庫なし。

—本誌特製—

コスモ誌とじ込み用

バインダー

¥400 送料 1~2個 ¥300
3~4個 ¥600

- 1カ年6冊分のコスモ誌一括保存用の必要品。
- 極厚手表紙、布装、表面背共金文字箔押。
- コスモ読者は書棚に誇らしく飾ろう!
- この品は書店にないので必ず本社宛直接ご注文下さい。

***ご注文は振替・現金書留・小為替・低額切手等により必ず前金でお願いします。
代金あと払いはおことわり。

〒110 東京都台東区秋葉原
3-3、アキバビル

コスモ出版社

振替 東京 119478

●UFO目撃報告と写真を募集

UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項

(1)目撃者住所氏名(できれば本人の写真を添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他。
(2)目撃場所地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
(3)物体の飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
(4)飛行状態、仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他。
(5)観測機器の使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
(6)撮影用具(カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータ)を付記する。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル

コスモ出版社UFO資料調査部

●目撃報告とは別に、「読者の声」欄を設けています。本誌に対する感想、UFO問題に関する所感等をふるってご投稿下さい。宛先は「コスモ出版社、読者の声係」

Along the Editor's Desk

◎本号は16頁の増頁により総頁100頁の特大号です。内容は更に充実! 名実ともに世界最高のUFO専門誌となりました。

◎そこで次号より本誌の題名を「コスモ」からUFO誌にふさわしい「UFOと宇宙」に変更し、内容も一段と密度を高めますので、ご期待下さい。題号変更により書店で他誌と勘違いしないようにご注意ください。

◎UFO—この謎の未確認飛行物体の正体は?—どこから、何の目的で来るのか? 未確認なるがゆえに私たちの神秘現象解明の意欲はますます熾烈となり、天空への夢は限りなく広がってゆきますが、一方、惑星地球に対する愛着も高まります。このような宇宙時代ともなれば、大宇宙空間の創造的パワー(英知と意識をもつパワー)に思いを馳せたくなるのは編者だけでしょうか。(K)

UFOと宇宙 一九七四年十二月号
コスモ 第9号

編集発行人 株式会社 コスモ出版
発行所 株式会社 コスモ出版

〒110 東京都台東区秋葉原三の三
電話(二五五)八七八四、七〇一九
振替・東京 119478

印刷所 大日本印刷株式会社
昭和四十九年十二月一日発行
(隔月刊・奇数月二十日発売)
特価四〇〇円・送料一五〇円

年々め購読料・送料共一三〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

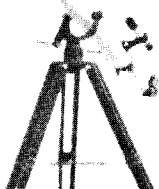
●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済。

スリーピーチ望遠鏡

No.ST60B 屈折経緯台

D60mm F800mm
倍率 160×
100×
44×
上下微動装置

¥16,000
送料 ¥800

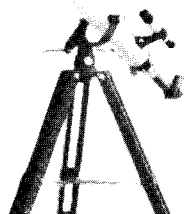


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST63A 屈折経緯台

D60mm F1,000mm
倍率 125× 55×
上下微動装置

¥16,500
送料 ¥1,000

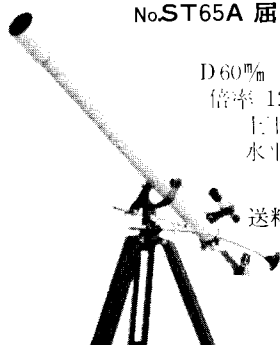


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST65A 屈折経緯台

D60mm F1,000mm
倍率 125× 50×
上下微動装置
水平微動装置

¥23,000
送料 ¥1,000



性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST67B
屈折経緯台

D60mm F1,000mm
倍率 200× 125×
50×
上下微動装置
水平微動装置

¥27,000
送料 ¥1,000

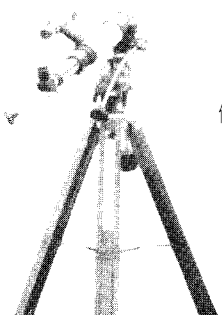


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST600
屈折赤道儀

D60mm F950mm
倍率 158× 76×
43×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥38,000
送料 ¥2,000

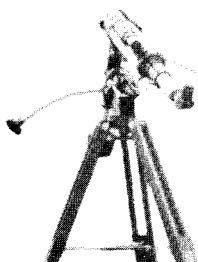


性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST80
屈折赤道儀

D76mm F1,250mm
倍率 310× 200×
100× 60×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥57,000
送料 ¥2,000

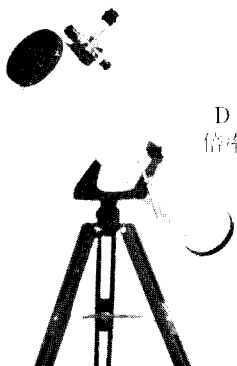


性能 1.5秒・11.2等星・118倍

No.SR108B
反射経緯台

D100mm F800mm
倍率 160× 100×
44×
上下微動装置

¥19,800
送料 ¥1,000

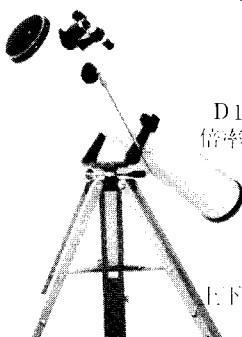


性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.STR100A
反射経緯台

D100mm F900mm
倍率 180× 110×
45×
上下水平微動装置

¥26,000
送料 ¥1,000



性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.SS1000G
反射赤道儀

D100mm F1,000mm
倍率 200× 125×
55×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥62,000
送料 ¥1,500

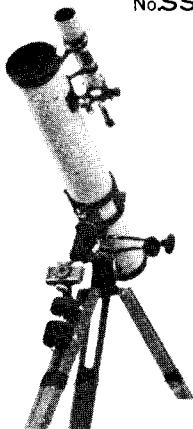


性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS1200G 反射赤道儀

D100mm F1,200mm
倍率 240× 96×
67×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥62,000
送料 ¥1,500

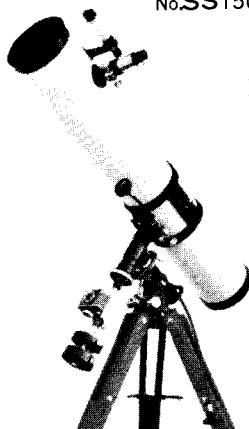


性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS150EA 反射赤道儀

D150mm F1,200mm
倍率 200× 100×
67× 48×
経緯微動装置
緯軸微動装置
上下桿微動装置
水平ネジ微動装置
経緯目盛環

¥120,000
送料 ¥4,000



性能 0.8秒・12.7等星・460倍

●反射式は光軸修整
用アイピース付

くわしくは切手¥120
同封の上、総合

カタログ No.10

申込み下さい。

〒121 東京都足立区
東島根町2392

K. K. スリーピーチ
サービスセンター
KM 係



サテライト天体望遠鏡

ヤマモト

60mm 屈折径緯台

MODEL A-7

定 価 32,000円

荷造送料 1,500円



新発売

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

●光学的性能

有効径 60mm
焦点距離 700mm
集光力 73倍
分離能 2.0秒
極限等級 10.7等

●付属品

接眼鏡 (倍率)
SR-5mm 140倍 (280倍)
R-20mm 35倍 (70倍)
〔()内はバーローレンズ使用〕
2倍バーローレンズ
5倍ファインダー
天頂プリズム
地上用正立プリズム
サングラス

●格納箱

発泡スチロール入り木箱

メーカーからユーザーへ！

通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをC係へ御請求下さい。

株式
会社

山本製作所

東京都板橋区大原町5-3
電話 966-2408 郵便番号 174